浦添市文化財調査報告書

ぐすく　ま
城間古墓群

—牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査報告書—

1990年3月

沖縄県浦添市教育委員会

あ い さ つ

城間古墓群発掘調査は昭和61年度から昭和63年度にかけて、牧港補給地区内の緊急発掘調査の一環として実施されたものであります。

最近まで、牧港補給地区内の文化財分布状況は十分には把握されていませんでしたが、今回の調査に先立ち実施した試掘調査の結果新たに約70,200㎡におよぶ埋蔵文化財の分布が確認されることになりました。これまでに城間古墓群・城間遺跡・嘉門貝塚の発掘調査を実施致しましたが、本報告書は城間古墓群発掘調査の成果をまとめたものであります。

古墓は14基確認されておりますが、形態からみると岩陰囲い込み墓、岩陰掘り込み墓、掘り込み墓、亀甲墓に分類され、墓の変遷を知る上からも貴重なものになっています。

さらに採集された遺物は納骨器、陶器、土器、石器、貝製品、骨製品、貝殻等が得られています。特に第９号墓からは約6,000年前の土器が出土するとともに、県内では極めて出土例の少ない翡翠製品も確認されるなど貴重な資料になっています。

今後は、発掘調査によって得られた貴重な資料を広く市民に公開し活用を図っていきたいと考えています。最後になりましたが今回の発掘調査にあたり国、県の関係者をはじめ数々の指導・助言を賜わりました諸先生方に対し厚くお礼申し上げます。

平成２年３月

教育長　**保久村　昌　伸**

例　　　　言

1．本報告書は牧港補給地区の開発工事に伴う城間古墓群の調査成果の記録である。

2．調査は那覇防衛施設局からの委託を受けて浦添市教育委員会が実施した。

3．報告書作成にあたっては下記の方々の指導・助言をいただいた。記して感謝を申し上げる次第である。

墓の形態および立地	名嘉真　宜　勝	（読谷村立歴史民俗資料館館長）
石器の石質の同定	大　城　逸　朗	（沖縄県立教育センター）
納骨器	上江洲　　　均	（沖縄県教育庁文化課課長補佐）
銘　書	田　名　真　之	（那覇市企画部文化振興課主査）
骨製品	金　子　浩　昌	（早稲田大学考古学研究室）
土　器	池　田　栄　史	（琉球大学）
〃	山　崎　純　男	（福岡市教育委員会）
貝類の同定	黒　住　耐　二	（沖縄生物学会員）

4．検出された人骨の鑑定については長崎大学医学部解剖学第２教室の松下孝幸助教授に依頼し、合わせて玉稿をいただいた。

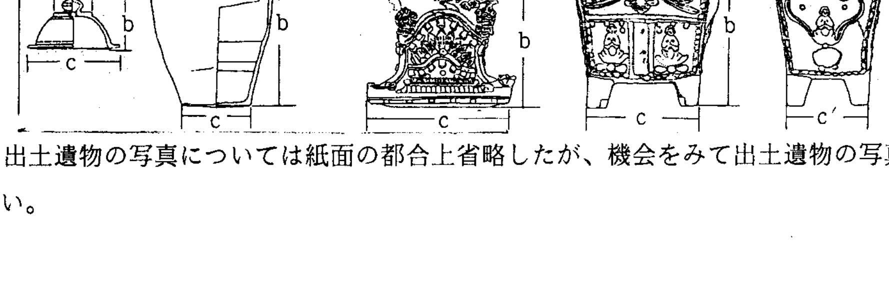
5．古墓の実測については業者に委託し、墓の墓室は実測で、他は写真測量で行った。編集においては下地、松川、比嘉、大湾が当たった。

6．本書の原稿執筆は下記のメンバーで分担し、編集は比嘉の協力を得て松川が行った。

下地　安弘	第Ⅰ章・第Ⅳ章第１節の陶磁器、円盤状製品、土器、石器、金属器、古銭、キセル
比嘉　　聡	第Ⅱ章
松川　　章	第Ⅲ章・第Ⅳ章第１節の墓と納骨器、獣魚骨、第２節貝類遺存体・第Ⅴ章
高良　京子	第Ⅳ章第１節の骨製品、貝製品
松下　孝幸・分部哲秋・佐伯和信・小山田常一	沖縄県浦添市城間古墓群出土の近世人骨

7．出土した資料については浦添市教育委員会教育部文化課で保管している。

8．第Ⅳ章第１節の納骨器観察表の法量の記号については下記のとおりである。



9．出土遺物の写真については紙面の都合上省略したが、機会をみて出土遺物の写真の報告をしたい。

正誤表

城間古墓群

頁	行	誤	正
	19	下地安弘	下地安広
36	27	第29図　彫刻骨器復元図	第29図　彫刻骨器復元図（金子浩昌氏原図）
38	4	（12点）、イモガイ製品（4点）の3	（12点）、タカラガイ製品（1点）、イモガイ製品（3点）の4
38	19	第29図	第30図
38	31	第７表	表７
58	33	第47図	第48図
65	17	第２節　貝類依存体	第２節　貝類遺存体
66	40	カンドウ原遺跡ー溶・排水に	カンドウ原遺跡ー溝・排水に

目　　次

第Ⅰ章　調査に至る経緯

第１節　調査に至る経緯

昭和61年６月９日に那覇防衛施設局より駐留軍施設・区域における建設工事計画について本市に通知があり、特に協議等を要する事項があれば昭和61年７月７日までに連絡するようにあった。そこで、本市教育委員会は駐留軍施設牧港補給地区内（キャンプキンザー）の埋蔵文化財を十分把握してない旨を連絡して、埋蔵文化財の有無の確認作業が必要であることを調整した。調整の結果、那覇防衛施設局の協力のもと、昭和61年10月22日から11月20日の期間、本市教育委員会の職員が立会い重機による30メートル間隔の試掘調査を行って埋蔵文化財の有無の確認をすることにした。

試掘調査は販売所区、倉庫区、診療所・野球場区の３ヶ所で実施する予定であったが、周知の遺跡の嘉門貝塚近くに高層・低層住宅計画もあるとのことで高層・低層住宅区も含め４ヶ所の地区、面積にして約150,000㎡の試掘調査を行った。試掘調査では、販売所区より古墓群と近世および貝塚時代の遺跡（後に城間古墓群、城間遺跡とする）、診療所・野球場区より近世の遺跡（後に小湾遺跡とする）、高層・低層住宅区には嘉門貝塚が延びることから、開発予定区内に約70,200㎡前後の埋蔵文化財の所在が明かとなった。

試掘調査の成果から昭和61年12月５日那覇防衛施設局あて①開発計画地区内に埋蔵文化財が所在すること、②埋蔵文化財は可能な限り現状保存を希望すること、③現状保存が工事設計などの理由から困難な場合は文化財保護法第57条の３第１項を厳守することの回答を行った。

本市教育委員会の回答に対して、昭和61年12月18日、那覇防衛施設局より牧港補給地区における建設工事に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて協議があり①当該建設工事の事業計画が既に確定していること、②当該区域以外に建設工事の可能な土地の確保が困難であること、③設計変更を行い現状保存をすることは不可能な状況にあること、④今後、発掘調査を必要とする場合は市教育委員会に委託したい旨の内容であった。

本市教育委員会と那覇防衛施設局の数回にわたる調整の結果、小湾遺跡については盛土し、野球場の設計を変えて埋蔵文化財に影響のないようにするとの一部調整を行って本市教育委員会が発掘調査を受託して行うことになった。正式には昭和62年３月11日、埋蔵文化財発掘調査の調査費用を原因者負担で受託する旨の回答を行った。

前述の調整業務の間に、新発見の遺跡について那覇防衛施設局より「遺跡発見の通知」の手続きを本市教育委員会経由で文化庁あて提出したところ、沖縄県教育委員会から昭和62年１月30日付「・・・（略）文化庁の指導により発掘調査を行うこととされていますので、工事着手前に発掘調査を実施して下さい。なお調査の結果、重要な遺構が発見された場合はその保存等について別途協議しますので御協力下さい。」との回答が本市教育委員会経由で、那覇防衛施設局あてにあった。

埋蔵文化財発掘調査を実施することが内定してからは両者間で文化財保護法の所定の手続きと事業の委託・受託の契約書を随時取り交わして発掘調査を行った。

ここでは牧港補給地区内で埋蔵文化財発掘調査を行うことになった経緯について略記した。今回の報告書は城間古墓群、城間遺跡、嘉門貝塚と発掘調査が実施された中の１つであり、個々の遺跡の調査に至る経緯として記述できないこともこれに起因する。

第２節調査体制

事業主体	浦添市教育委員会	教育長	西原　正次	（昭和63年３月まで）
〃	〃	〃	保久村昌伸	（昭和63年４月より）
事業所管	〃	教育部　部　長	名嘉原安栄	（昭和63年３月まで）
〃	〃	〃	比嘉　靖芳	（昭和63年４月～平成元年１月まで）
〃	〃	〃	東　一男	（平成元年２月より）
事業総括	〃	教育部文化課		
		課　長	宮里　良一	（昭和62年３月まで）
〃	〃	〃	豊里　友建	（昭和62年４月より）
事務総括	〃	文化財係長	前津　政廣	（昭和63年３月まで）
〃	〃	〃	仲宗根盛栄	（昭和63年４月より）
事業事務	〃	主　事	小浜　恵子	（昭和63年３月まで）
〃	〃	〃	小波津春美	（昭和63年４月より）
〃	〃	〃	下地　安広	
〃	〃	〃	松川　章	（昭和62年４月より）
〃	〃	臨時職員	嘉数喜久子、運天順子、川満美和子、喜舎場涼子	
調査員	〃	主　事	下地安広	
〃	〃	〃	松川　章	
調査補助員	〃	臨時職員	宮城義明、比嘉　聡、島袋春美、大湾政人、下地傑、高良京子	

発掘作業員

古堅厚徳、城間昌貞、城間辰重、宮城清子、宮城ユキ子、金城　清、宮城清子、上原ミヨ、宮城良子、秋吉慎一、上里恵子、豊元充子、翁長静江、諸見里ユキ、宮城ミネ、前里定勇、石川ヨシ子、森本和子、棚原弘春、宮城春美、高野キク、玉江秋子、阿嘉節子、福嶺信吉、比嘉トシ、玉那覇スミ、新田末美、宮平良子、宮城光子、島袋正助、平良米子、与那覇浩、宮城美代子、金城光子、比嘉サダ、石川チヨ、上地孝子、渡名喜悟、荷川取直樹、崎浜良枝、宮城静子、津波加代子（古墓群の調査にかかわった作業員を記述した）

整理作業員

仲地智子、住友千恵子、宮城　敦、比嘉典子、津波古良子、大城研一、大城広輝、中野洋子、儀間るみ子、嵩原朋子、与那嶺文子、金城京子、渡具知征子、大浜利子、平良貞子、高橋良子、宮平留美子、比嘉清美、仲宗根菊枝、冨里順子、平田紗夜子、又吉純子、上地孝子、上里恵子、古堅禎子、大城和子、当間初江、大城洋子、国仲恵子、又吉一枝、渡具知孝江、菊池絹子、徳村カツエ、大田アイ子、玉寄敏子、奥原玲子、宮国福子、銘苅才子、前川安美、真栄城由記子、又吉美佐江、栄あゆみ、宮城律子、我如古辰也、安和千代子(昭和62年度から平成元年度までにかかわった作業員を記述した)

第Ⅱ章　位置と環境

浦添市は、県都那覇市の北側に位置し市の東側に西原町、北側に宜野湾市が隣接しており、西側は東シナ海に面し遠くには慶良間諸島を望むことができる。

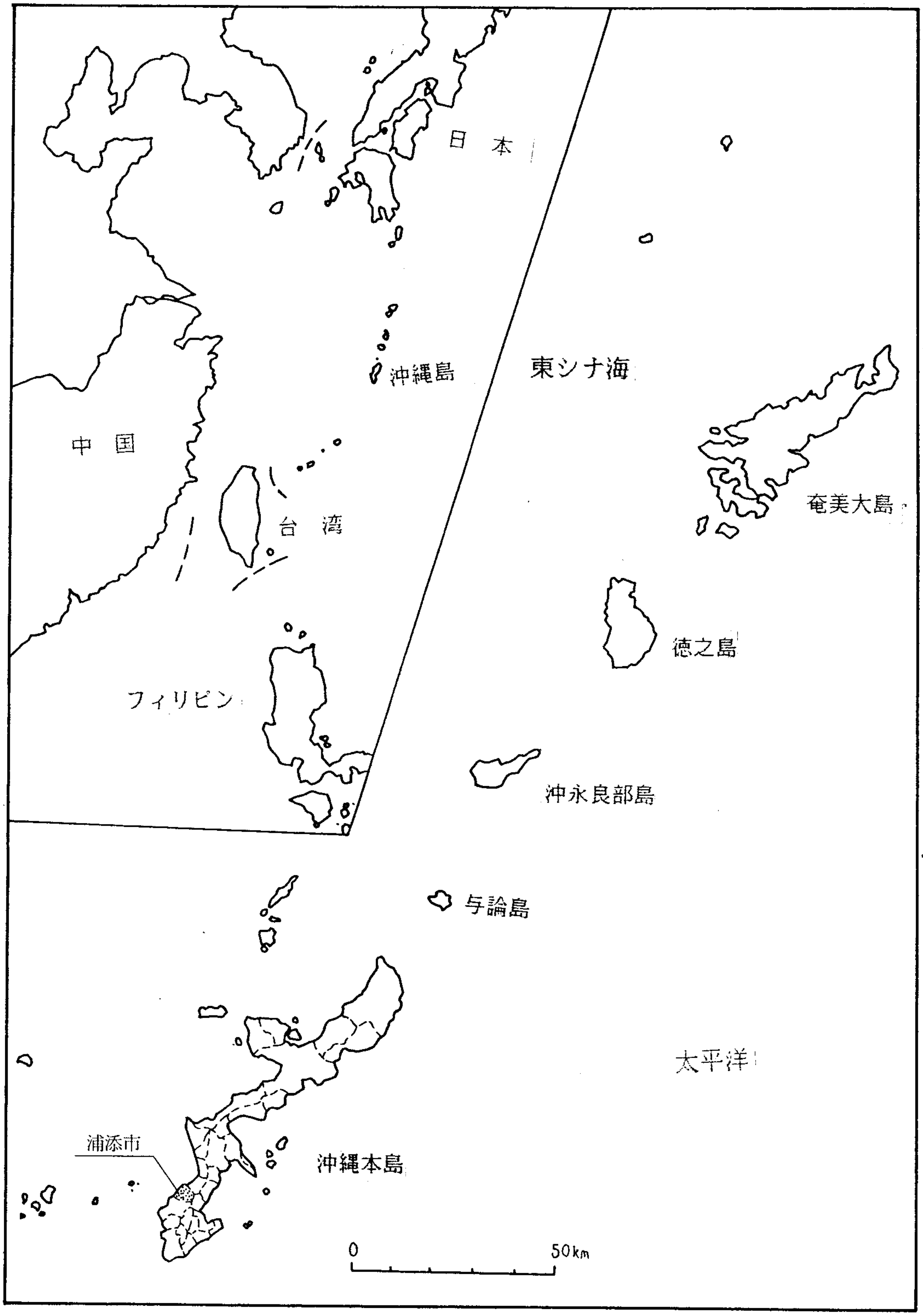
本市の人口は、那覇市に隣接していることから年々増加の一途をたどり市制施行（1970年）前は、4万人台の人口であったのが1989年（平成元年）においては2倍以上の約9万人の人口を擁する県下第三の都市に発展している。それにともなって行政区別による自治会も19の組織から現在は35の組織に増えている。

市域は、東西8.4km、南北4.6kmで北側を頂点としたややいびつな扇状形をなし総面積18.28k㎡でそのうち約15%の2.8k㎡が軍用地となっている。

地形は、沖縄本島中南部によく見られる波状の地形と石灰岩からなる台地、段丘が広がっており、特に市の中央部を南北に横切る国道330号線（通称・バイパス）を境に東西の地形に違いが見られる。市の中央部から東側にかけては、標高50m以上の石灰岩台地（中位段丘下位面）（註1）と丘陵によって形成されている。この丘陵一帯は、多年にわたる風化、浸食により起伏の小さい丘と浅い谷が連続する波状の地形となっている。また、市の東部に位置する浦添城跡から北西側の字牧港にかけては、断層によってできた石灰岩堤（註2）が帯状によく発達しておりその堤上に立地している浦添城跡あたりは標高100m以上となり市内で最も高いところである。市の西側は、標高50m以下の小丘陵と石灰岩の低台地（低位段丘面）（註3）で形成されており、ゆるやかな傾斜で海岸線に迫っている。また、海岸線には小規模ながら海岸低地がみられ、前面の東シナ海は沖合いにかけて幅広くサンゴ礁が発達している。このように本市は、東側が高く西側に向かって低くなるいわゆる東高西低の地形を形成している。

市内を流れる4つの河川（牧港川、シリン川、小湾川、安謝川）は全長3〜7km、幅員約20〜45mの小規模なもので市東部の丘陵地を源として、市の東西を横切り、東シナ海にゆるやかにそそいでいる。

地質は、第三紀島尻層群の与那原泥岩層（クチャ）が基盤を形成し、石灰岩堤が帯状に伸び



第１図　浦添市の位置

る部分と市の西側では琉球石灰岩がこれを覆っている。市の中央部からなだらかな丘陵をなす南側一帯と字西原一帯には基盤の泥岩が露出し、石灰岩堤の南側の丘陵地帯には小禄砂岩層（ニービ）が分布している。また、４つの河川の河口付近や海岸線には小規模ながら沖積層及び海岸堆積層が分布している。さらに、本市における地質の構成比をみてみると泥岩層44.4%、砂岩層12.2%、石灰岩層32.3%、沖積層及び海岸堆積層11.1％となり総面積の約６割は島尻層群が露出していることがわかる。

城間古墓群は、市内を南北に走る国道58号線の西側に位置し、遺跡一帯は現在米軍基地（通称・牧港補給地区）となっている。

古墓群は、海岸低地から石灰岩の低台地（低位段丘面）へ移行する標高6～13ｍの小丘陵（Ａ地区・第３図参照）の斜面に立地している。丘陵斜面は階段状を呈しており、丘陵がフラットになった面に墓が形成されている。フラットな面は３段あり下段に３基、中段に５基、上段に４基点在している。いずれの墓も丘陵の斜面を掘り込んだり、岩陰を利用して作った墓である。また、本地区の北東側300ｍの海岸低地（Ｂ地区・第４図参照）にも墓が８基（６基は空墓）所在し、そのうち２基は嘉門貝塚の発掘調査区に位置していることから城間古墓群と併せて調査を行うことになった。

遺跡一帯は、戦後の米軍基地建設によって大きく変わってしまい当時の地形を推し量るには困難な状況にあるが、古老の話によると海岸沿いは戦前10m前後の海岸砂丘が形成されており、防潮林としてアダンが植えられていたとのことである。また、この墓の所有者は、戦前の土地利用図や墓より検出した厨子甕の銘書などから、戦後の米軍による土地接収によって移動させられた城間部落の人々であったと思われる。

周辺遺跡としては、遺跡後背の石灰岩低台地に沖縄貝塚時代後期後半（古墳～平安時代）の城間遺跡、前面の海岸低地には沖縄貝塚時代後期（弥生時代）の遺跡である嘉門貝塚が立地している。また、東側には東空寿遺跡、下港川遺跡などがある。

＜註＞

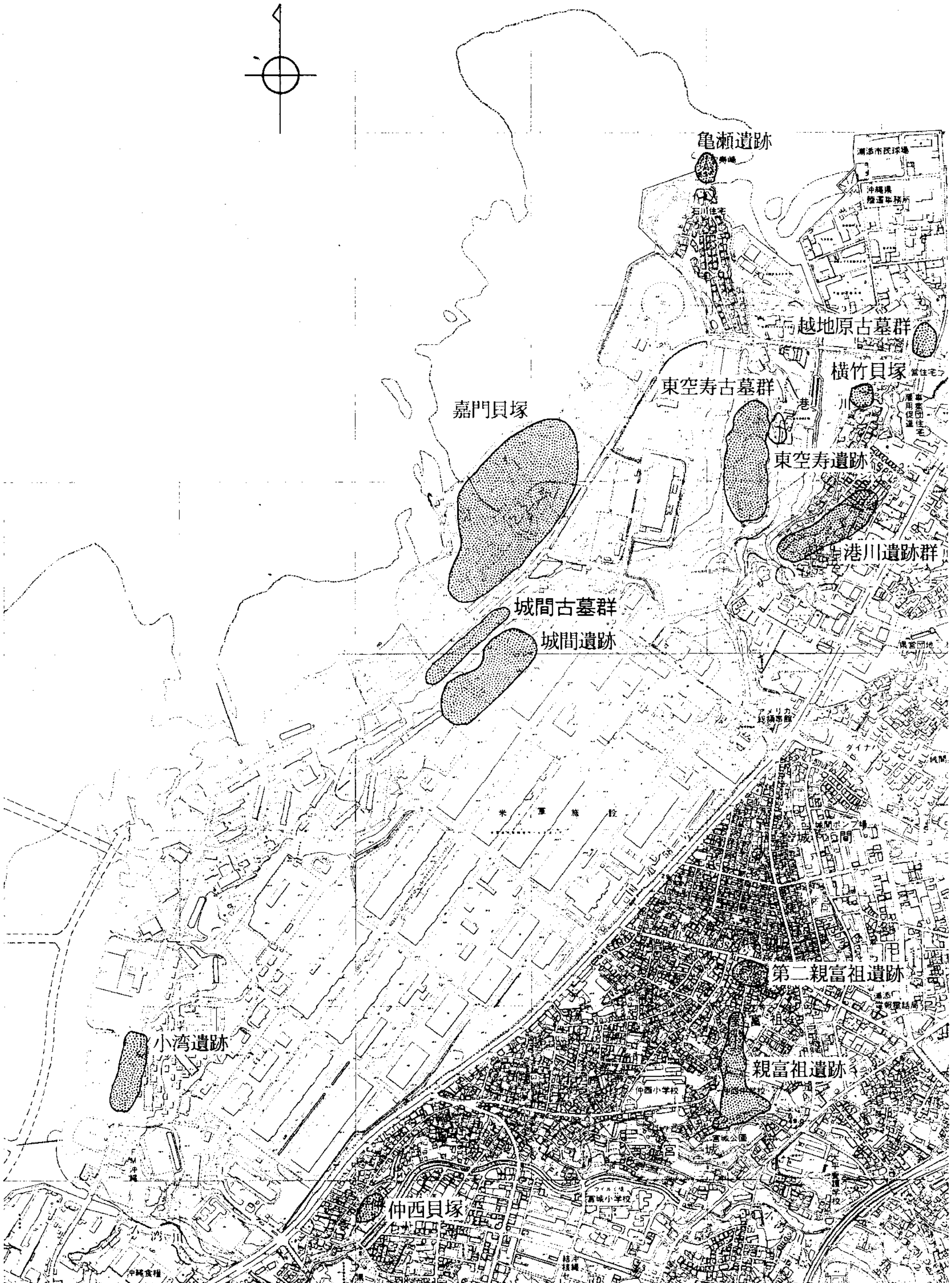
１・２・３　土地分類基本調査　沖縄県　1983

＜参考文献＞

１　浦添市史　第１巻　通史編　　1989

２　浦添市史　第６巻　資料編５　1986

３　統計うらそえ　第20号　浦添市　1987



第２図　城間古墓群の位置と周辺の遺跡

第Ⅲ章　調査の経過

調査は墓の露出作業を昭和62年５月28日から同年８月10日まで行い、測量調査を昭和62年９月16日から同年12月15日の期間で実施した。

調査は先ず、樹木の繁茂する丘陵斜面（Ａ地区）の伐採作業から入った。幹の直径が20cm前後の樹木が多く、機械（チェーンソー）等を導入して作業を進めた。伐採作業中に小銃弾等の発見があり、伐採終了後に磁気探査を実施し、危険物の除去を行った。

伐採後に確認できた12基の墓には斜面下のものから順に番号を付し、Ａ地区第１号墓・・・と表した。各墓とも墓庭や墓室内には礫と土が流れ込み、また墓室の入口を形成する石積みや側壁などは崩壊しており、往時の形態をそのまま残すものはなかった。墓の周辺には廃棄された納骨器や陶器片などが散乱していた。

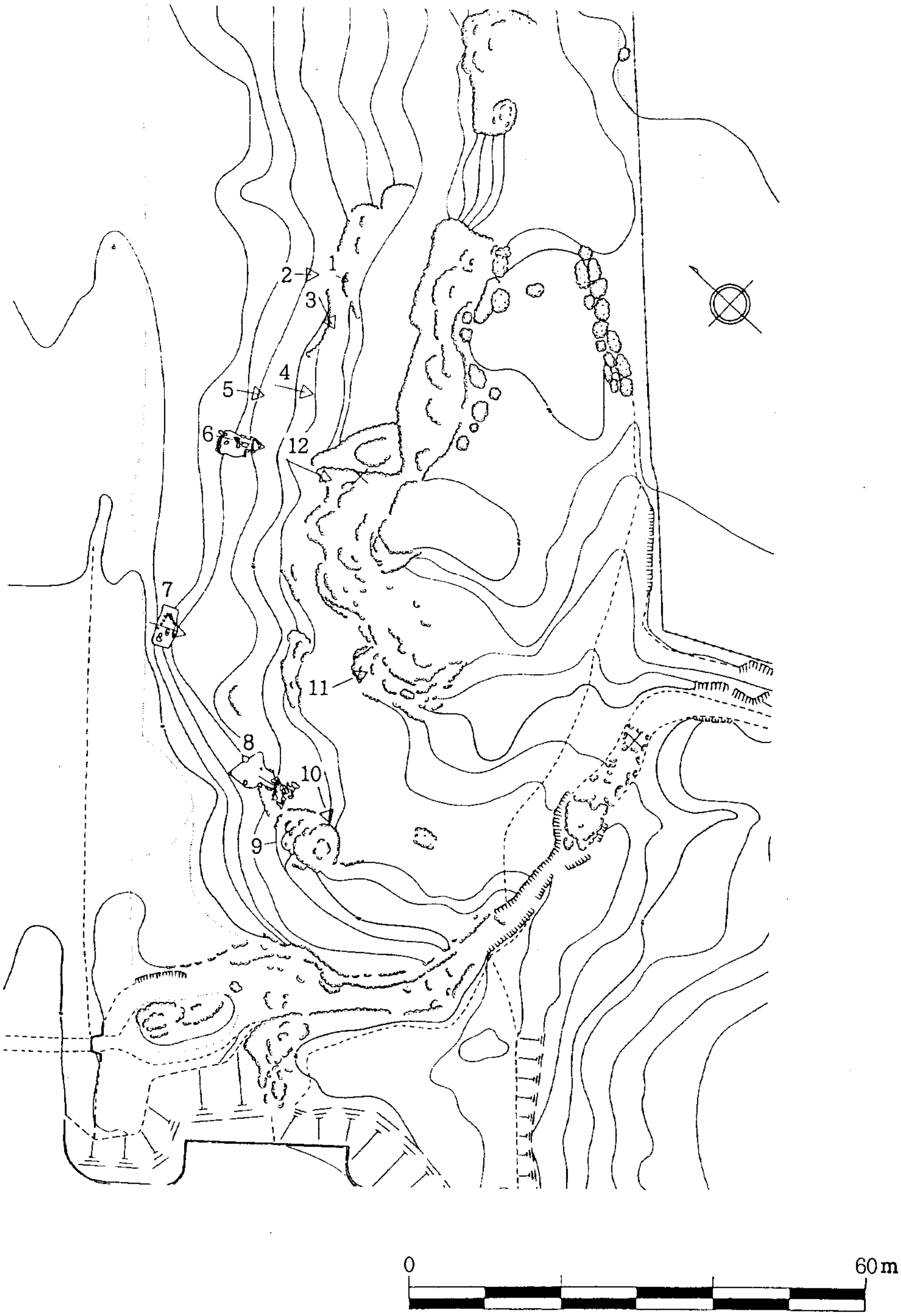
墓には縦に２分割するラインを設定し、第１号墓から順に第12号墓まで、漸次露出作業を進めた。また、墓の存在する可能性のある10ヶ所の地点において確認調査を実施したが、新たな墓の検出はなかった。第１・３号墓では墓口前面に基盤の石灰岩を掘り込んだ略方形状の墓庭の存在が確認された。第６号墓は今回調査したＡ地区では最大のもので、墓庭を囲む石垣を有する。墓室には骨の入った厨子甕等を残す。第８号は墓口の石積みは残すものの、墓室には天井部であった岩が落盤していた。第９号墓からは厨子甕や陶磁器と共に先史時代の遺物が検出されたが、発掘調査は写真測量調査のための写真撮影後実施することにした。第12号墓の墓口の前面には石灰岩礫を用いた階段が確認され、墓室からは翡翠製品が検出された。12基の古墓の露出作業終了後、写真撮影を行いＡ地区の露出作業を終えた。

人骨については那覇防衛施設局から縁故者不明の遺骨引き取り公告が新聞でなされた。

Ｂ地区はＡ地区の伐採終了後に露出作業を行った。隣接する２基の亀甲墓には東側からＢ地区第１号墓、Ｂ地区第２号墓とし、露出作業は前者からはじめた。第１号墓の墓庭にはドラム缶等が砂で埋められていた。第２号墓は墓室のシルヒラシが砂で埋められ、それを除去すると厨子甕が検出された。厨子甕の中には骨が入っていることから、那覇防衛施設局から墓の所有者に連絡してもらい、人骨と納骨器は引き取られた。第１・２号墓の全容を露出後、写真撮影を行い作業を終了した。

測量調査は測量業者に委託し、墓の平面図・正面図・側面図を写真測量、墓室内は実測調査で実施した。補測調査と実測調査は先史時代遺物の出土したＡ地区第９号墓から集中して終了してもらい、遺物包含層の発掘調査は他の墓の補測調査と並行してはじめた。

Ａ地区第９号墓の墓室には大型の石灰岩があり、そのため発掘作業は墓の中央部に限られた。遺物包含層は石灰岩の風化した黄褐色混礫土層で、沖縄貝塚時代の早期・前期・後期の土器、骨製品、貝製品、石斧等の人工遺物と貝殻等の自然遺物も出土した。また、遺物包含層からは細かくなった人骨片の出土があった。



第３図　城間古墓群Ａ地区の墓の配置図

第４図　城間古墓群Ｂ地区の墓の配置図

第Ⅳ章　調査の成果

今回、調査を行った古墓はA地区12基、B地区2基の合わせて14基であった。A地区で確認された墓は、形態上から岩陰囲い込み墓（9・10・12）、岩陰掘り込み墓（1・3・4・5・6）、掘り込み墓（2・7・8・11）に分類される。採集された遺物は厨子甕等の納骨器、陶磁器等が主で、その他にA地区第9号墓から先史時代の土器、石器、貝製品、骨製品、貝殻等が得られている。また、第9号墓と第14号墓より翡翠製品の出土があった。

B地区は石灰岩台地を掘り込んで造られた亀甲墓が2基で、検出された遺物は厨子甕・陶磁器等が得られた。

以下、A地区から各墓別に構造、出土遺物の順に略記していくことにするが、貝類遺存体に第2節、人骨については別項で一括して報告する。

尚、採集された納骨器は下記のとおり5類に分類された。

第Ⅰ類　土器
第Ⅱ類　甕型厨子甕
　a　ボージャー
　b　マンガン掛け
　c　マンガン掛け庇つき
第Ⅲ類　家型厨子甕
　a　石製厨子甕
　b　陶製厨子甕
第Ⅳ類　近世の骨壺
第Ⅴ類　日用品の転用

第1節　墓の構造および出土遺物

A地区

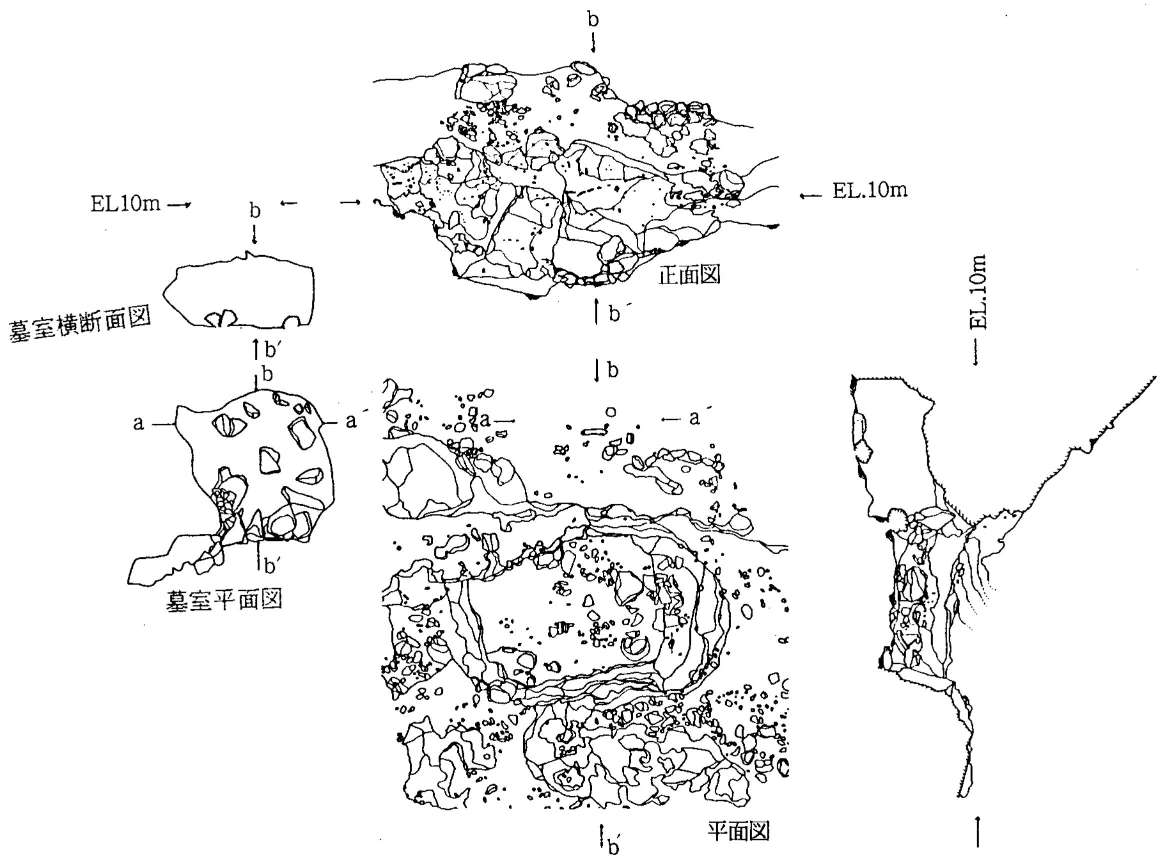
第1号墓

1　構　造（第5図1）

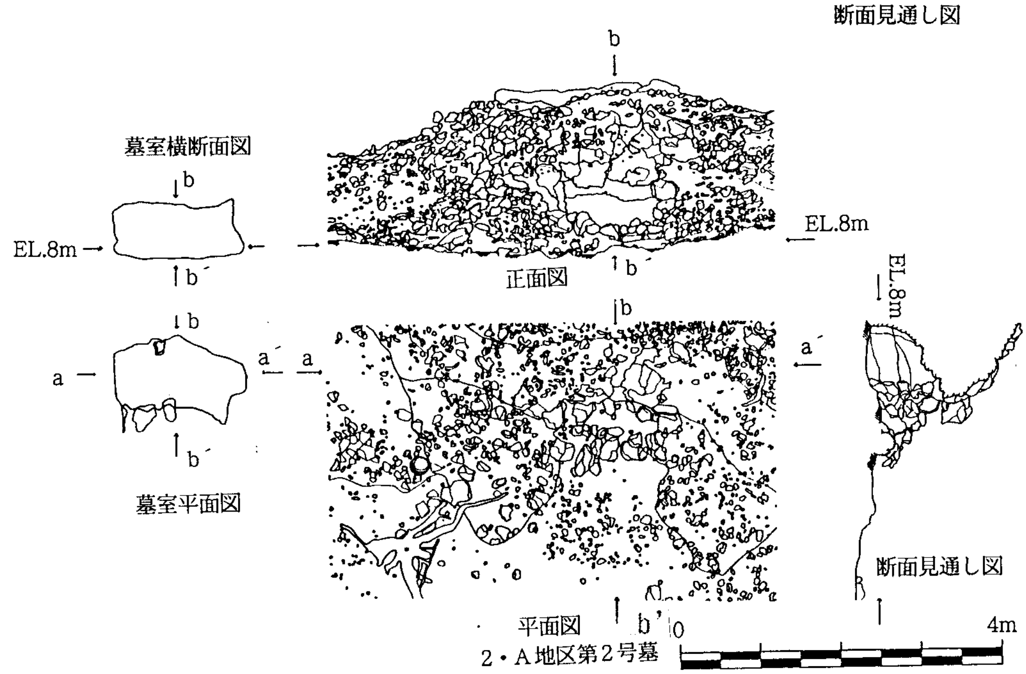
小規模な崖下に形成された岩陰とその前面の石灰岩を掘削して墓室と墓庭を造るもので、墓庭は基盤の石灰岩を略楕円状に60cm程掘り下げ、墓室を水平方向に掘り込んでいる。墓室は奥行き1.8m、横幅1.8m、高さ0.9mの広さを有する。墓口には石灰岩礫が配され、また墓口近くに散在する石灰岩礫等から、本墓は墓口全面を野面積みで密閉するものであろう。墓庭右側で破砕された納骨器や陶磁器片等が集中して採集された。

2　出土遺物

（1）納骨器（第6図）

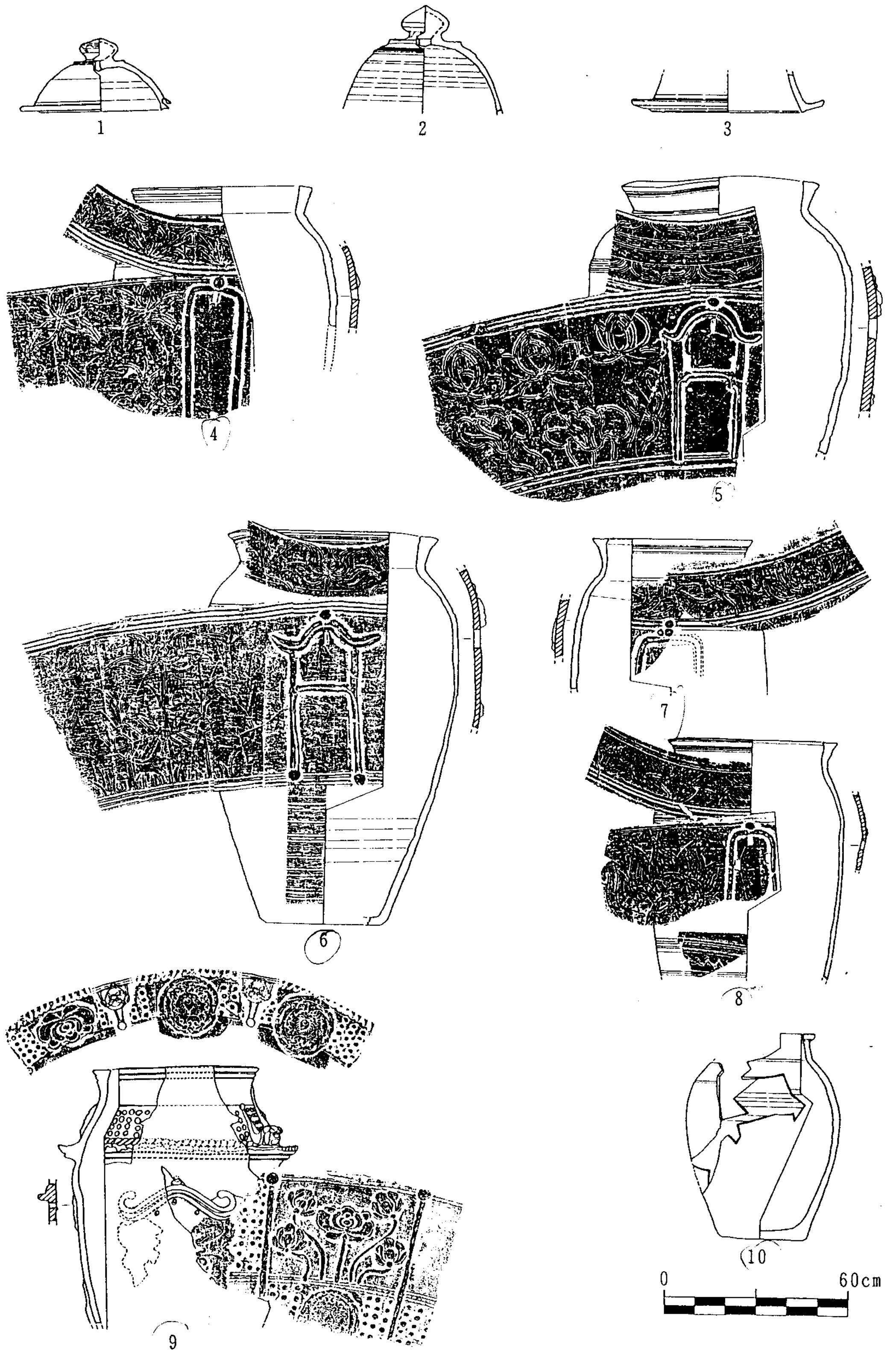


1・A地区第1号墓



2・A地区第2号墓

第５図　１・Ａ地区第１号墓 ２・Ａ地区第２号墓



第６図　Ａ地区第１号墓出土の納骨器

本墓出土の納骨器は第Ⅱ類bのマンガン掛け甕型厨子甕と第Ⅱ類cのマンガン掛け庇つき甕型厨子甕、第Ⅴ類の転用品であった。1～3は第Ⅱ類bの蓋で、1は口径に比して高さが低く、従って肩から鍔にかけて比較的緩やかな器形をなし、鍔は水平に造られる。頂部のつまみは弧状を呈する。2は鍔を欠くもので、肩部には器面を囲繞する3条の沈線を巡らす。つまみは宝珠形をなす。3は上部を欠く資料で、鍔は上方に向いている。4～7は第Ⅱ類bの身の資料である。4～6は口縁部は外反し、肩部が張る器形で、頸部が短く、口唇部は4を除き比較的幅広く造られる。8は頸部の屈曲が弱く、スマートな器形である。9は第Ⅱ類cに属する資料で、肩部には蓮と宝珠様の円形貼付を施し、その間に獅子頭を配するが正面に前記いずれの貼付がくるのかは明らかにできない。

表1　A地区第1号墓出土納骨器観察表

挿図番号	分類	資料 蓋	資料 身	法量 a	法量 b	法量 c	文様	銘書の有無	銘書の内容
第6図1	Ⅱ－b	○		25.8	11.6	25.8		無	
〃 2	〃	○		11.6	－	－		〃	
〃 3	〃	○		－	－	31.0		〃	
〃 4	〃		○	28.7	－	－	肩部に蓮華文、胴部に簡略化された家の貼り付け文とその両側に蓮華文。	〃	
〃 5	〃		○	31.6	－	－	肩部に菊文と波状文、胴部には家の貼り付け文と蓮華文、胴下部に横線と波状文。	〃	
〃 6	〃		○	33.5	65.5	20.6	肩部に蓮華文、胴部に家の貼り付け文と蓮華文、胴下部には横線と波状文。	有	亥口七日
〃 7	〃		○	25.8	－	－	肩部に蓮華文、胴部には簡略化された家の貼り付け文と蓮華文？。	無	
〃 8	〃		○	26.8	－	－	肩部に蓮華文と幾何学文、胴部には簡略化された家と蓮華文が貼り付けられ、胴下部に横線と波状文。	〃	
〃 9	Ⅱ－c		○	26.4	－	－	肩部に蓮華文、宝珠の描かれた円形貼り付け文、獅子頭、そして乳が配され、庇は瓦屋根様を呈する。胴部正面には屋根と龍頭、その両側に蓮華の貼り付け文、胴下部は宝珠様円形貼付と乳が施される。	〃	
〃 10	Ⅴ		○	8.0	31.8	14.1		〃	

第2号墓

1　構　　造（第5図2）

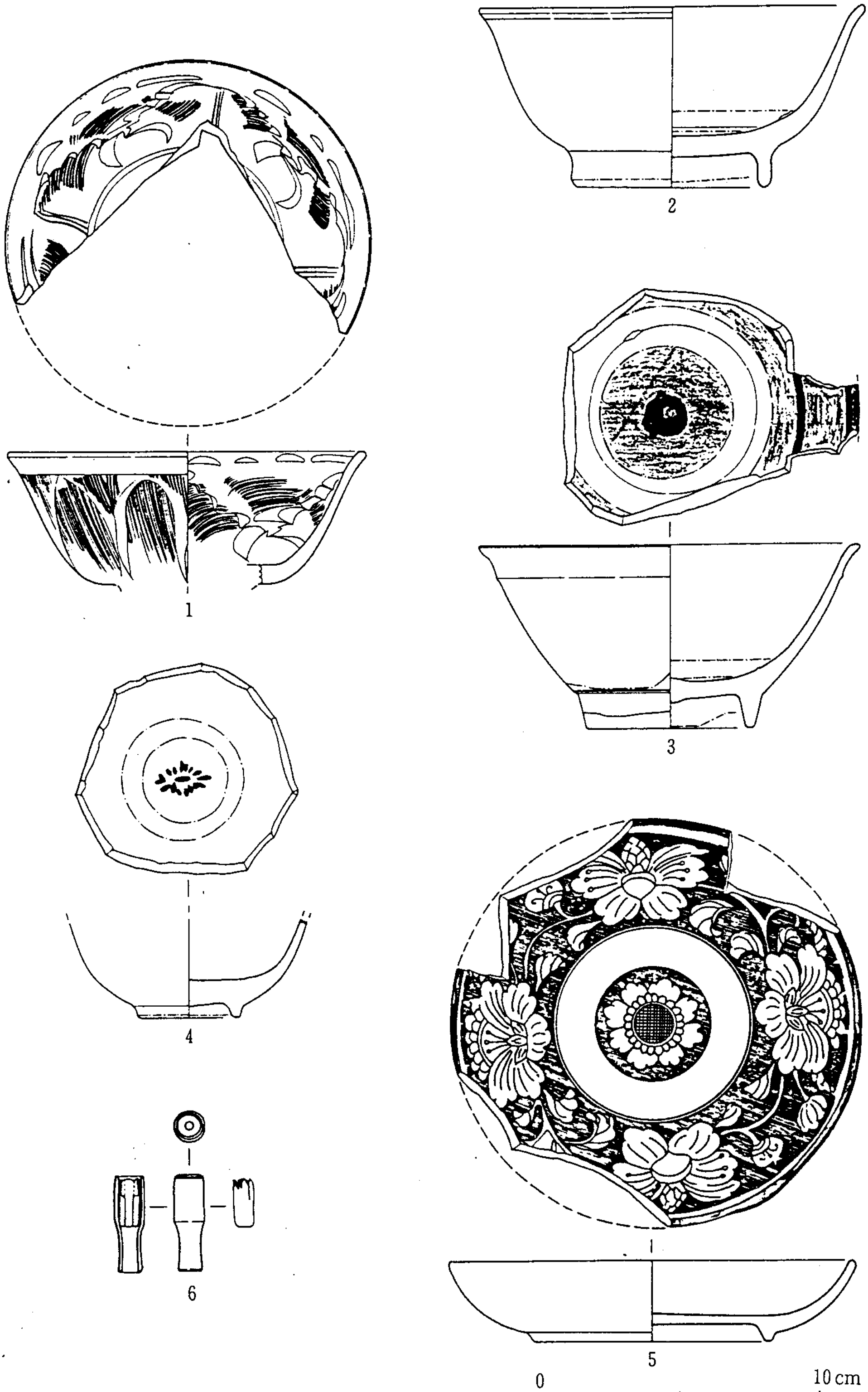
第1号墓前面の石灰岩を掘り込むもので、墓口の前面は基盤の石灰岩が整地されフラットな地形をなす。墓室は奥行き0.9m、幅1.5m、高さ0.9mの小規模な墓である。墓口には石灰岩礫が配されており、墓口全面を密閉する形式であろう。

2　出土遺物

（1）　陶磁器

これに属するものは青磁1点、沖縄産陶器3点、本土産磁器1点の計5点が検出された。しかし、ここに紹介する資料は整理上のミスから同地区1号墓に伴う可能性があることを報告しておきたい。以下、図の順に略記する。

第7図1は腰部分からほぼ直線的に立ち上がる碗で、口径は約12.8cmを測る。外体部には箆彫りにより蓮弁文と縦走する櫛描き文、内体部には劃花文を配する。釉は薄い緑色で、貫入はほとんど認められない。諸特徴から近代の所産と推察する。同図2～4の3点は沖縄産陶器碗になるものである。2は白化粧をするもので、口径13.8cm、高さ6.4cm、底径6.4cmを測る。畳付には白土をぬり、内底は輪状に釉を削り取っている。内底部には重ね焼きによる胎土の付着が認められる。3は外体部に鉄釉、内体部には灰釉を施釉するもので、大きさは口径13.6cm、高さ6.35cm、底径6.0cmを測る。畳付には白土をぬっている。4は小さな碗が推察される底部の



第７図　Ａ地区第２号墓出土の遺物

資料で、前述に２に近似するがつくりは前者に比較してやや入念である。また、内底部には呉須による花文を配する。底径は3.5cmを測る。５は銅版刷りの２種類の開いた花とつぼみの文様を周辺に、中央には上面観の開花文を配する。口唇部に鉄釉を薄く塗る。いわゆる口紅技法が認められる。大きさは口径14.6cm、高さ2.9cm、底径は8.6cmを測る。

（２）青銅製品

これに属するものはキセルの吸い口のみ検出された。第７図６に示したものがこの資料で、木質の管と本資料と管を着装する際の紙質の材料も認められる。大きさは長さ3.4cm 、長径１cm、短径0.74cm、厚さは0.1cmを測る。

第３号墓

１　構　　造（第８図１）

本墓も第１号墓と同じく小規模な崖下に墓庭と墓室を掘削して造るものである。墓口は墓庭の左側に開けられるが、これは自然の岩陰を墓口に利用したことと、墓庭右側は岩盤の露頭が左側にくらべて低く、墓庭を掘削する作業量を勘案したものであろう。墓室は奥行き3.3m、幅2.2m、高さ0.9mで、第１号墓の墓室より広く掘り込まれる。奥部の天井は風化のため崩落している。墓口には石灰岩礫が配されており、墓口全面を密閉する形式の墓であろう。

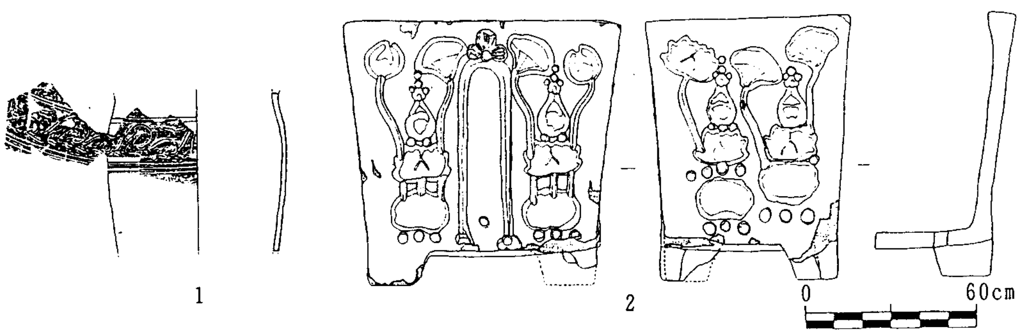
２　出土遺物

（１）納骨器（第９図）

第Ⅱ類ｂのマンガン掛け甕型厨子甕と第Ⅲ類ｂの上焼御殿型厨子甕が得られている。

表２　Ａ地区第３号墓出土納骨器観察表

挿図番号	分類	資料 蓋	資料 身	法量 a	法量 a'	法量 b	法量 c	法量 c'	文様	銘書の有無
第９図１	Ⅱ－ｂ		○	－		－	－		肩部の上位にラマ式蓮弁様の文様と波状文。	無
〃　２	Ⅲ－ｂ		○	48.6	－	46.0	35.9	30.9	正面と側面に蓮と合掌座の法師像を貼り付ける。	〃

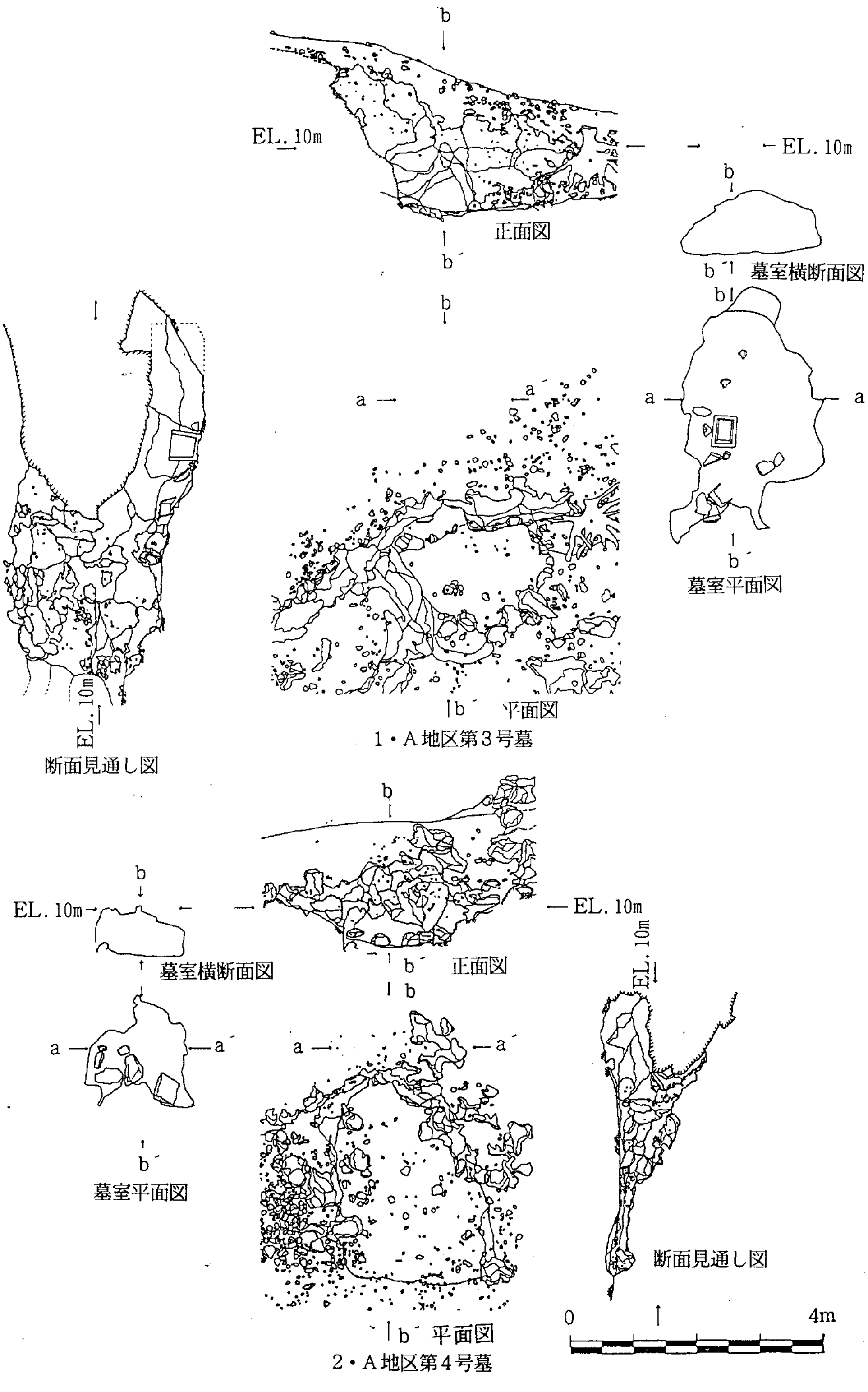


第９図　Ａ地区第３号墓出土の納骨器

第４号墓

１　構　　造（第８図２）

石灰岩の壁面を掘り込むもので、墓口の両側に石灰岩が前方に展開し、その間は平坦な地形



第８図　１・Ａ地区第３号墓　２・Ａ地区第４号墓

である。墓室は墓庭より約70cm低く掘削され、奥行き1.3m、横幅1.4m、高さ0.7mを測る。墓口には石灰岩礫が配されている。

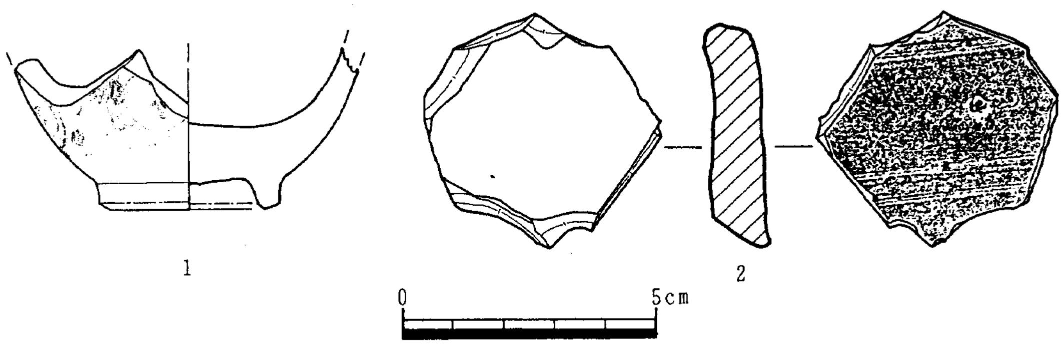
2　出土遺物

（1）陶磁器

沖縄産陶器の小ぶり碗底部が1点検出された。第10図1に示したのがそれで、外体部に呉須によるゼンマイ状の文様が認められる。畳付には白土の付着が認められる。底径は3.2cmを測る。

（2）円盤状製品

一般的に荒焼と呼ばれる破片を利用したものが1点検出された。第10図2に示したもので、大きさは短径3.9cm、長径4.5cm、厚さは約1cm、重さは27gを測る。



第10図　A地区第4号墓出土の陶磁器（1）、円盤状製品（2）

第5号墓

1　構　　造（第11図）

掘り込み式の墓で、墓は石灰岩が「コ」状をなす奥部に墓室がつくられる。墓口前面は平坦な地形で、墓室は奥行き0.6m、横幅0.9m、高さ0.6mの小規模な墓である。墓口には石灰岩礫が配される。

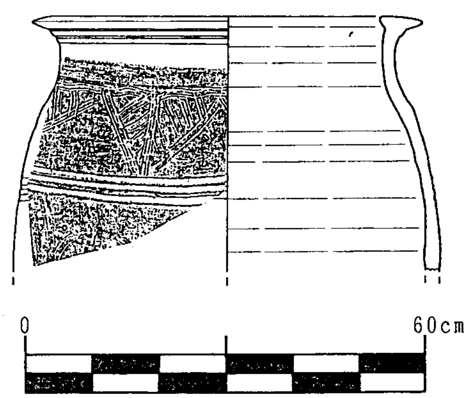
2　出土遺物

（1）納骨器（第12図）

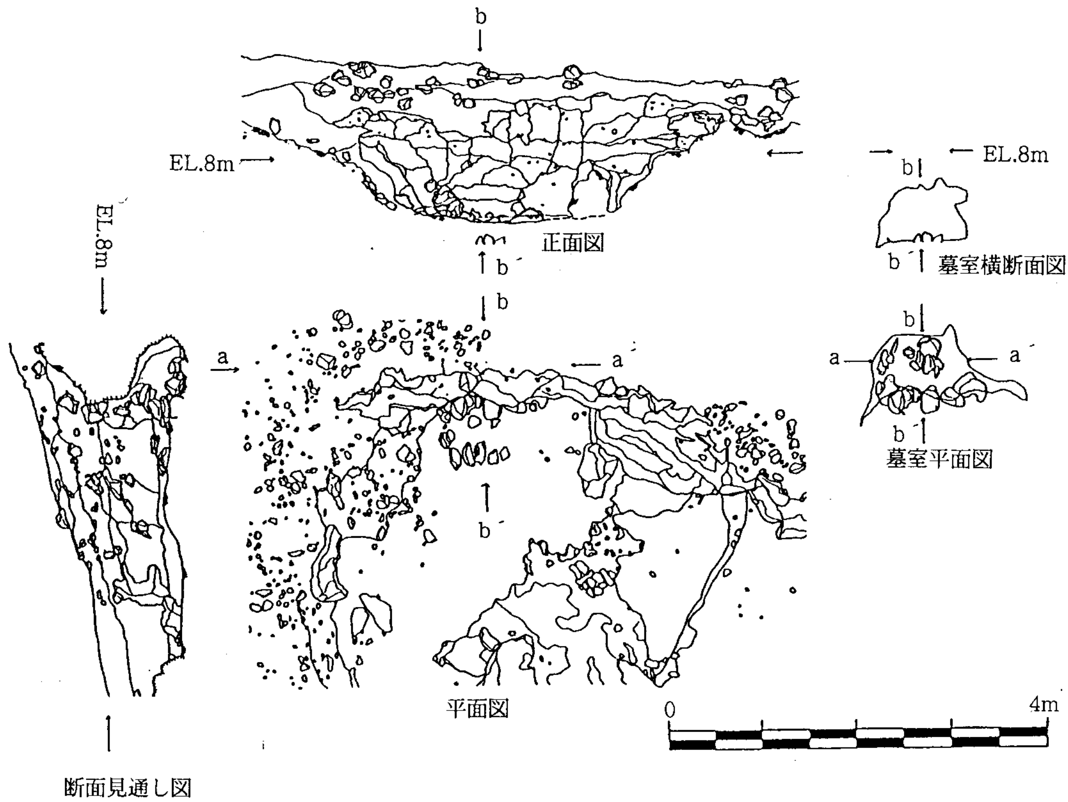
第Ⅱ類bのマンガン掛け甕型厨子甕の口縁資料で、口唇部は幅広く略「T」字状に造られる。口縁部は僅かに外反し、肩部の張りは弱いスマートな器形が想定される。文様は肩部になされ、逆三角形の葉状文と横線を施す。胴部の文様は蓮華文であろう。口径は推算28.7cm。

(2) 陶磁器

これに属するものは青磁2点、白磁2点、染付3

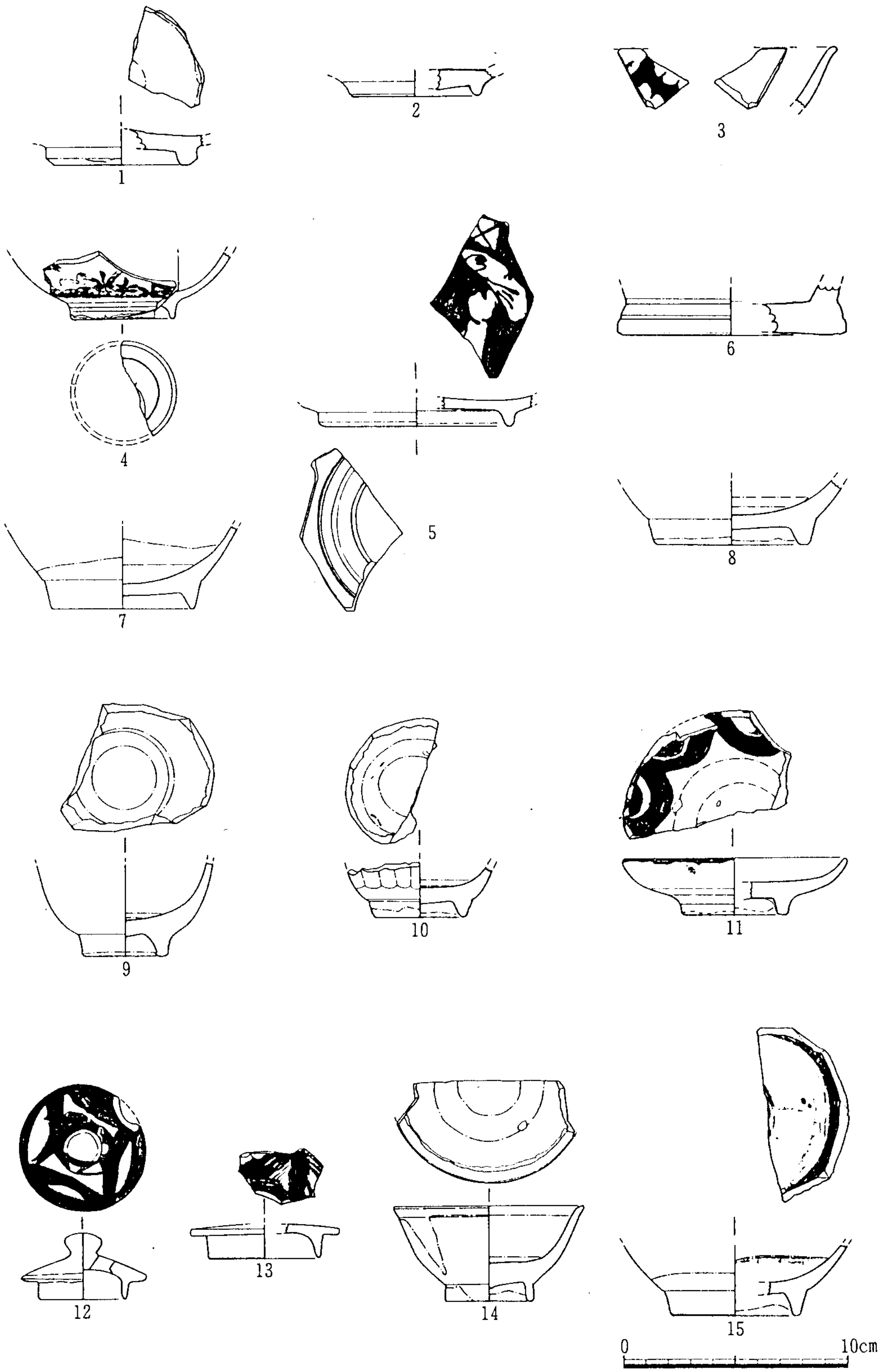


第12図 A地区第5号墓出土の納骨器

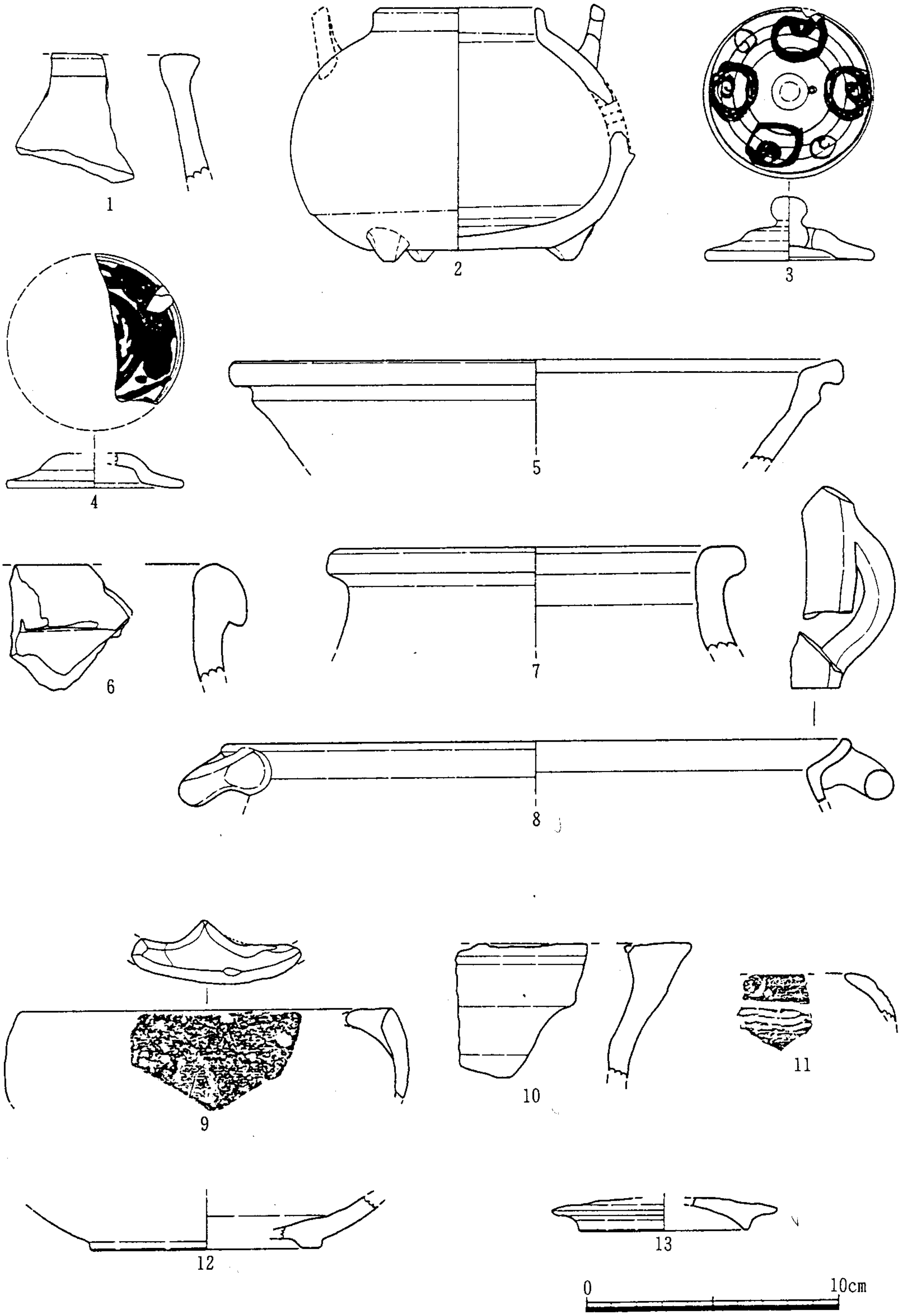


第11図　A地区第5号墓

点、褐釉陶器1点、緑釉陶器1点、灰釉陶器2点、鉄釉陶器4点、鉄釉掛け分け2点、白化粧および施釉陶器4点、二彩陶器5点、呉須染付陶器2点、本土産染付磁器1点、本土産二彩磁器1点、沖縄産無釉陶器18点、瑠璃釉陶器1点、現代磁器1点の計50点が検出された。この中から22点の資料について図示して略記する。第13図1・2は青磁皿の底部の資料で、1は底径6cm、2は底径5.4cmを測る。同図3～5に示したものは染付で3・4は碗、5は皿にそれぞれなると推察される。3は碗の口縁部破片で、中国清朝の所産と思われるものである。4は底径4.5cmを推算する碗の底部資料で、体部下方に濃淡のある呉須で描いた草文が認められる。5は皿の底部資料で、底径は8.8cmを測る。内底には文様が認められるが、構図は判然としない。6は中国産の褐釉陶器甕の底部で、底径は10.1cmを測る。7は灰釉陶器碗の底部資料で、底径は6.3cmを測る。釉は内外面とも体部下方まで施釉するが底部は露胎である。8は無文碗の底部資料で、底径は6.4cmを測る。釉は全体に施釉するが、畳付部分および内底では輪状に削り取る。9・10は小ぶりの碗になるもので、9は底径3.8cm、10は底径4cmを測る。10は体部で面取をする。11は鉄釉と呉須による二彩文の皿で、口径10cm、高さ4.3cm、底径2.59cmを測る。12・13は急須の蓋と思われるもので、12は呉須による文様、13は呉須と線彫りの文様が認められる。12は縁の径が5.6cm、口径4cm、高さ3cmを測る。13は縁の径6.1cm、口径5cmを測る。14は掛け分けの小碗の資料で、口縁内側より体部にかけ鉄釉を施釉する。口径8.3cm、器高4.3cm、底径3.9cm



第13図　Ａ地区第５号墓出土の陶磁器



第14図　A地区第５号墓出土の陶磁器(1～7)・陶質土器(8～13)

を測る。15も碗で鉄釉を施釉するが、外底部および内底部に露胎をつくる。底径は5.8cmを測る。また、高台の畳付には白土を塗っている。第14図1は、緑釉を施釉する口縁部破片で器種は不明である。2は瑠璃釉を施釉する急須の身の部分で注口部分を欠くものである。外底部は露胎で底には三脚が取り付く。3・4は、蓋の資料であるがいずれの器種の蓋かは不明である。外体部に4本の圏線、大・小の巻文を配置する。縁の径は6.6cm、高さ2.5cmを測る。4は緑釉と呉須による二彩文の蓋で縁径は7cmを測る。5～7に示した3点は沖縄産無釉陶器で沖縄では一般的に荒焼と呼ばれるものである。5は擂鉢で口径は24.3を測る。6は壺型が想定される口縁部破片で口縁は断面カマボコ状に肥厚する。7はやや小型の壺が想定されるもので口径は16.6cmを測る。

（3）陶質土器

これに属するものは9点検出された。器種別の出土状況で見るとナベ（サークー）1点、炉火（?）1点、鉢2点、碗1点、蓋1点、取っ手破片2点、器種不明1点である。しかし、この中で碗とした1点はナベの蓋になる可能性が強いと推察する。以下、順に略記する。

第14図8は一般的にアカムンあるいはサークーと呼ばれる土ナベで、口碑伝承によると薬草を主に煮炊きする土ナベであったとのことである。口径は25cmを測る。9は炉火と推察されるもので、口縁の内側に角状の凸起を有する。10は口縁が内傾する浅鉢と思われるもので、肩部に波状文を描く。11は前述した8の土ナベの蓋になる可能性が強いものである。12は注口を有する器の蓋と思われるもので、縁の径9cm、口径6.8cm測る。13は浅鉢もしくは蓋のいずれかに属すると思われるが、判然としない資料である。

（4）石　　器

石器は3点検出された。いずれも形状からすると石斧の形に近似する。しかし、刃部を有する明確な資料は1点であった。以下、順に略記する。

第15図1は平面型短冊型を呈するものである。刃部に入念な研磨が認められるが刃縁を欠くため特徴は判然としない。現存の長さは6cm、幅は4.94cm、厚さ1.44cm、重さは82gを測る。石質は緑色片岩である。2・3は石斧の頭部的形状を呈する資料である。現存の大きさは2が長さ7.7cm、幅は4.5cm、厚さ3.2cm、重さは128gを測る。3は長さ6.66cm、幅4.74cm、厚さ1.8cm、重さは92gを測る。石質は2・3とも輝緑岩である。

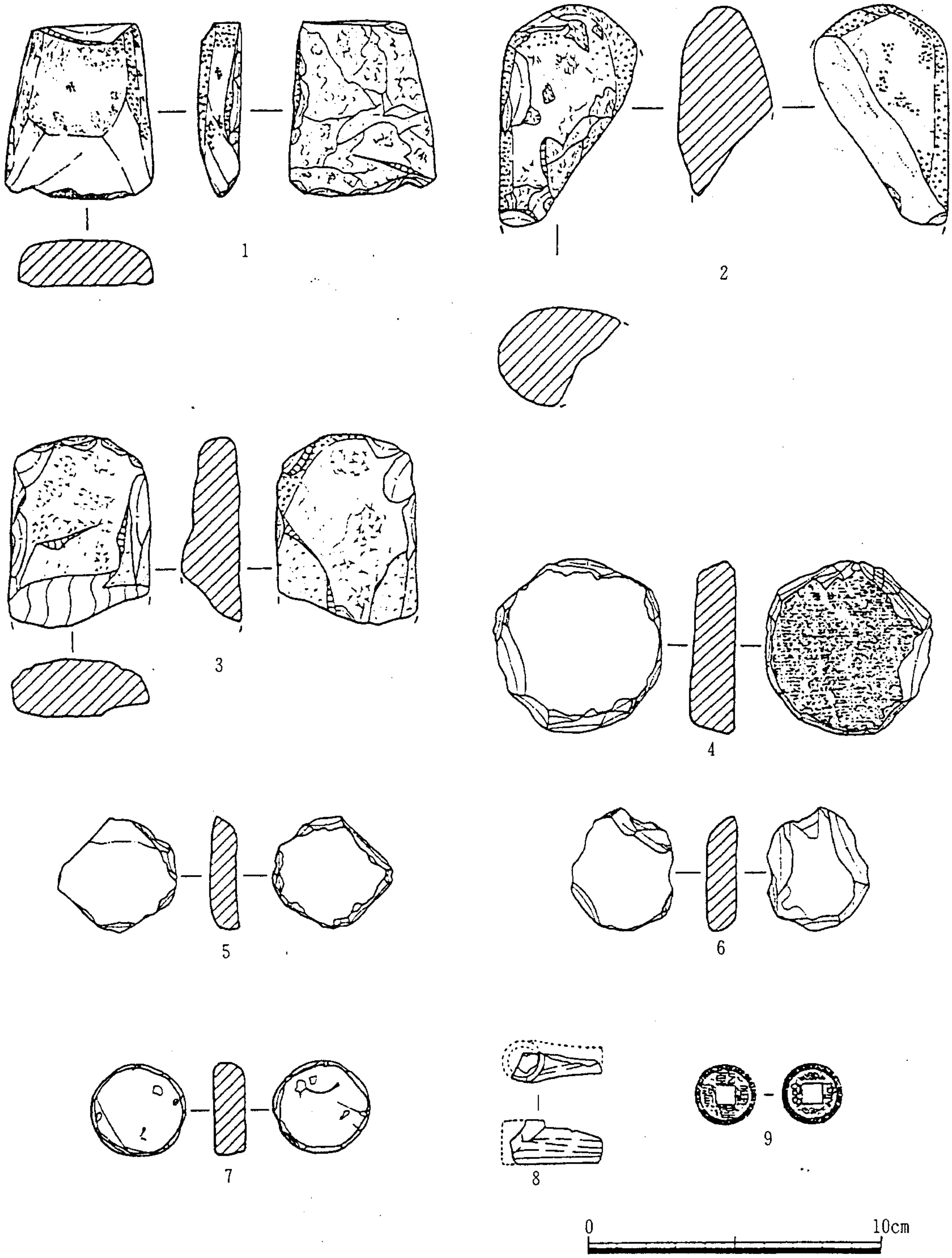
（5）円盤状製品

本製品の明確な用途は未だ明らかにされていないが、県内における同製品の究明は上原静氏の報告（註1）が最も検討されたものであろう。その報告によると遊戯具との推察がある。以下、図示したものについて略記する。第15図4・5・6の3点は小さな打割によって成形するが、7は入念な研磨仕上げをするものである。前述の

表3　円盤状製品観察表

単位：cm/g

挿図番号	直径	厚さ	重さ	備考
第15図4	5.92	1.4	52	瓦片を利用
〃　5	3.8	0.87	14	褐釉陶器片
〃　6	4.16	1.0	16	擂鉢片
〃　7	3.22	1.2	12	陶器片



第15図　A地区第5号墓出土の石器（1～3）、円盤状製品（4～7）、陶器製品（8）、古銭（9）

状況からして7は多少、性格の異なる製品になることも推察される。各製品の大きさは表3のとおりである。

（6）その他

第15図8に示したものはキセルの陶器製がん首、9は「乾隆通寶」で、大きさは直径2.2cm、厚さ0.14cm、重さ約3gを測る。

第6号墓

1　構　　造（第16図）

A地区で最も規模の大きなもので墓室は石灰岩を掘り込み、基盤の石灰岩と石積みによる庭を有する。平面観および墓室正面観は亀甲墓に近似するつくりである。屋根にヤジョウマーイ等は認められないものの、亀甲状に周辺に傾斜している。マユは基盤の石灰岩をそのまま取り込み、ツラは3枚の不定形の切り石でカガンイシとし、1枚の長方形の石灰岩でジョーカブイをなす。庭は平坦な地形をなすが、側壁の状況から石灰岩をある程度掘り込んで整地したと考えられる。側壁は基盤の石灰岩でなされるが、右側上部のみ拳大の石灰岩礫を積み上げる。門は右側のみ石灰岩礫で積み上げ、他は盛土の上に拳大の石灰岩礫が積まれる。墓口には蓋石止めの羨道が作られ、墓室は奥行き3.0m、幅2.0m、高さ1.3mの広さを有する。タナ等の施設は認められない。墓室と墓庭で納骨器、陶磁器等が採集されたが、納骨器の中には骨が入っているものもある。

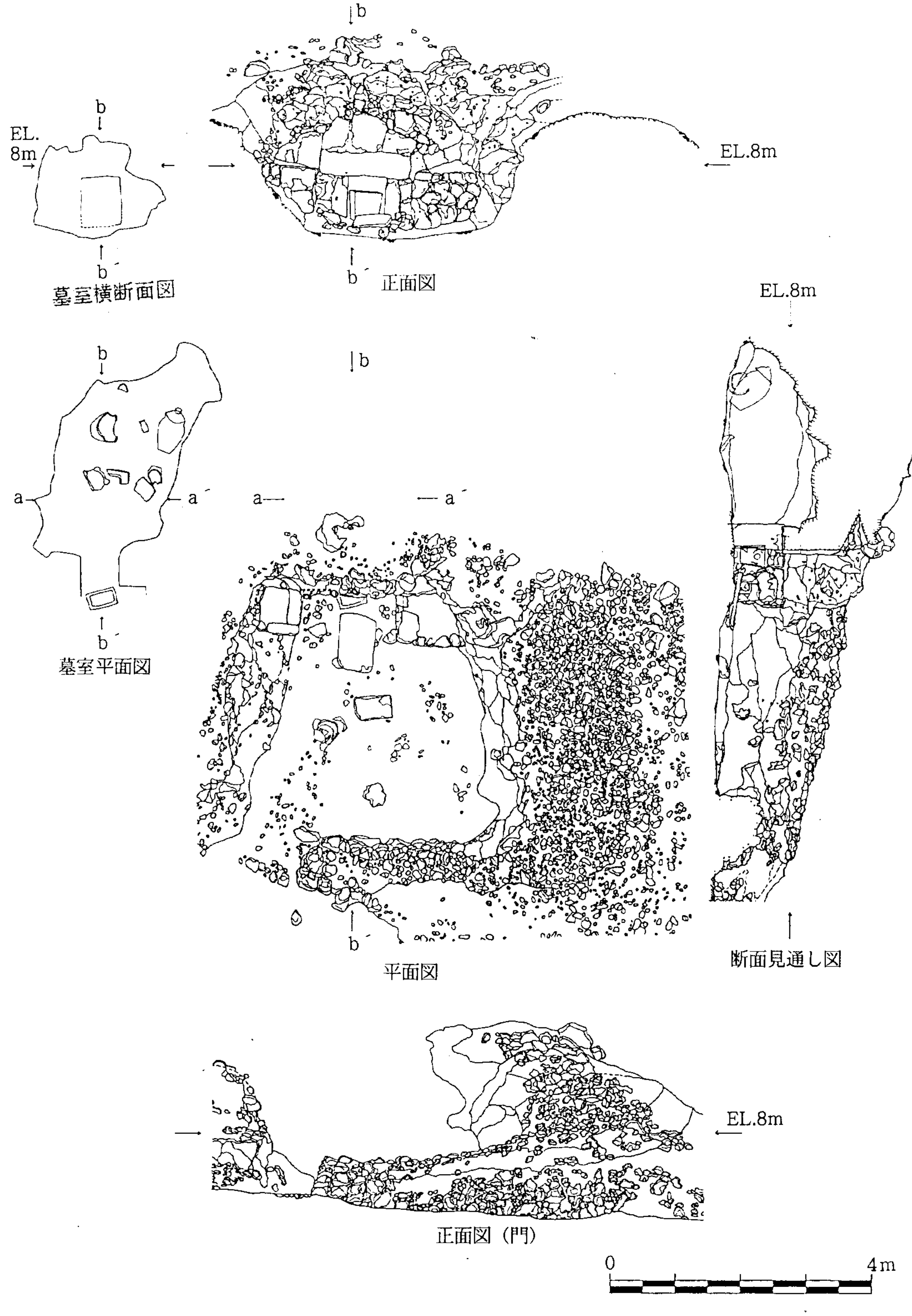
2　出土遺物

（1）納骨器（第17図）

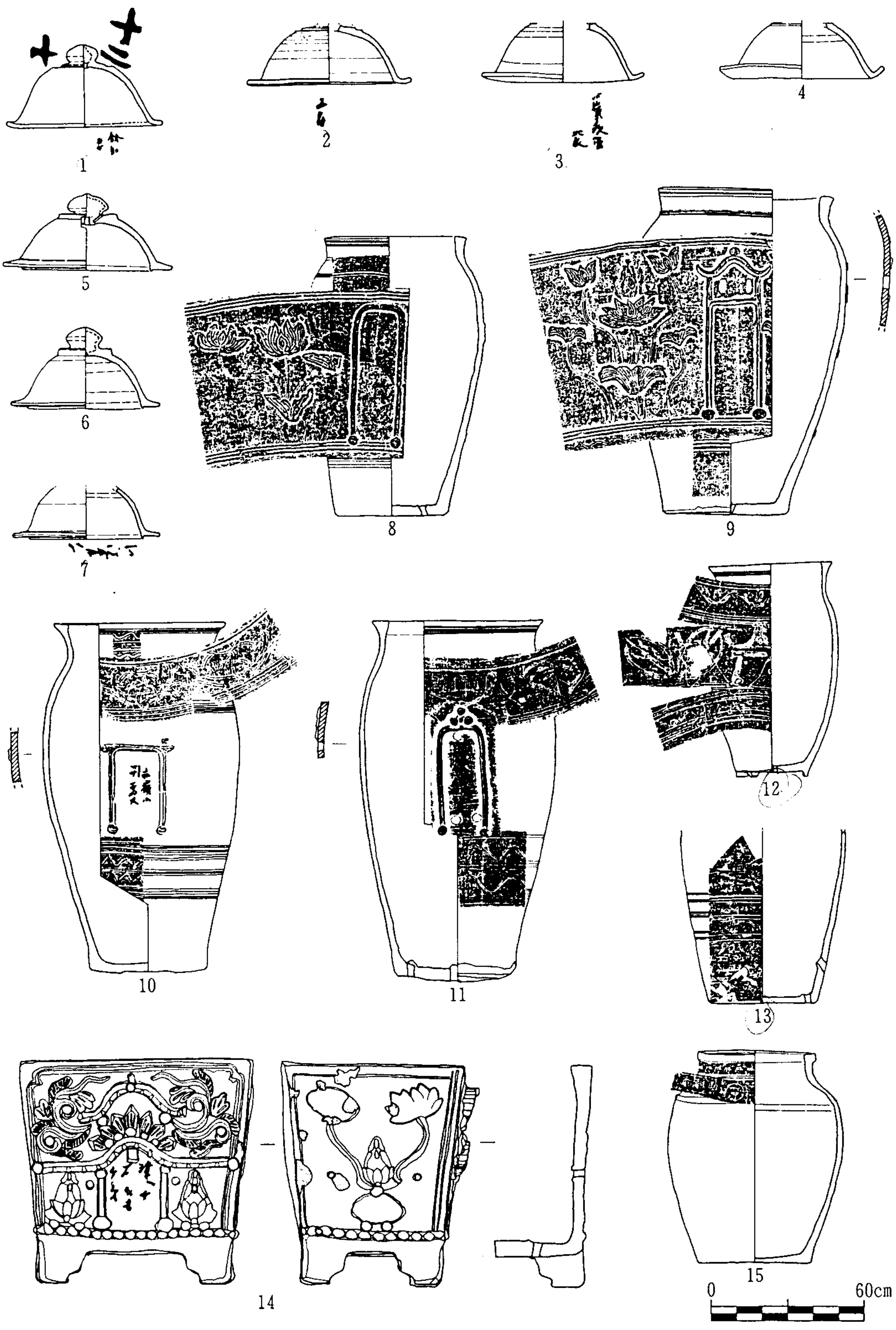
本墓出土の厨子甕は第Ⅱ類bのマンガン掛け甕型厨子甕、第Ⅲ類bの上焼御殿型厨子甕、第Ⅴ類日用品を転用したものの3種が得られた。1～7は第Ⅱ類bの蓋で、1～4は鍔の内側に「かかり」のないもので、鍔の向きは1は下向き、2はほぼ水平、3・4は上向きに造られる。5～7は鍔の内側に「かかり」を有し、水平方向に造られる。5はつまみの下部から内底にむ

表4　A地区第6号墓出土納骨器観察表

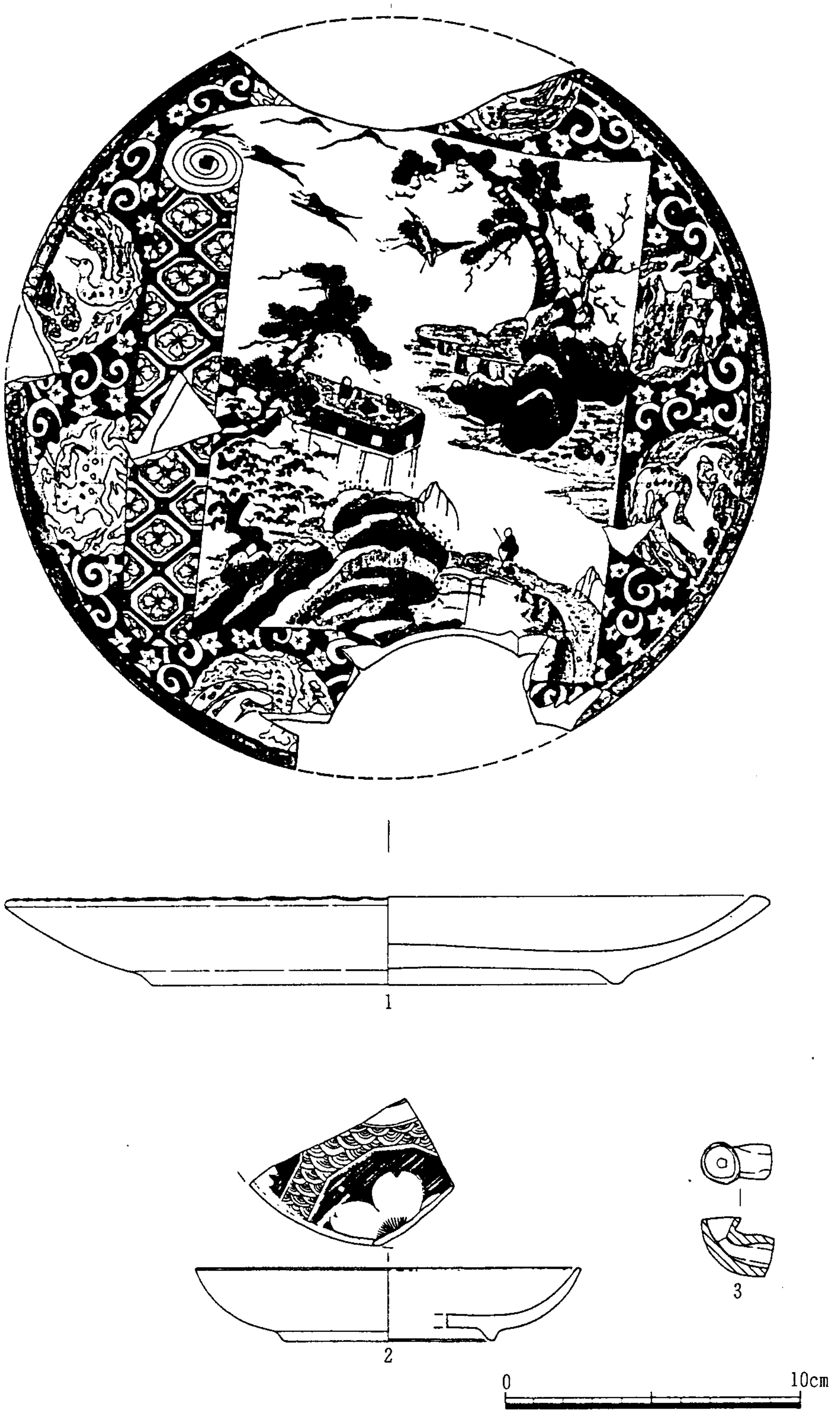
挿図番号	分類	質料		法量					文様	銘書の有無	銘書の内容
		蓋	甕	a	a'	b	c	c'			
第17図1	Ⅱ－b	○		11.6		16.0	15.3			有	鉢知／妻
〃 2	〃	○		13.2		－	32.4			〃	□□
〃 3	〃	○		13.0		－	32.2			〃	赤嶺ノ次男太良
〃 4	〃	○		12.0		－	16.6			無	
〃 5	〃	○		11.4		15.1	33.4			〃	
〃 6	〃	○		14.2		15.6	29.5			〃	
〃 7	〃	○		－		－	29.0			有	□洗骨□□
〃 8	〃		○	27.6		54.7	22.0		肩部に横線と波状文、胴部には簡略化した家とその両側に蓮華文を貼り付ける。	無	
〃 9	〃		○	33.8		63.5	24.5		肩部と胴下部に横線と波状文、胴部には簡略化した家の貼り付け文とその両側に蓮と合掌座の法師像。	〃	
〃 10	〃		○	33.4		68.5	23.0		頸部と胴下部に横線と波状文、肩部に蓮華様の文様を描き、胴部には簡略化された家を貼り付ける。	有	赤嶺小ノマサ子の太□
〃 11	〃		○	33.8		70.7	23.0		肩部に篦状文、胴部には簡略化された家の貼り付け文、胴下部には横線と波状文。	〃	□鉢知
〃 12	〃		○	23.6		42.1	14.0		肩部には波状文とその谷間に沈線を描き、胴部には線彫りで家と蓮文、胴下部には横線と波状文。	無	
〃 13	Ⅱ－不		○	－		－	19.6		胴下部に横線と波状文を描く。	〃	
〃 14	Ⅲ－b		○	45.4	36.0	44.1	38.0	27.9	正面上位に花文、下位に蓮の花の上に座する合掌法師像、側面にも後者の文様を施す。	有	判読不可能
〃 15	Ⅴ			22.7		41.8	22.0		頸部と胴部に花文がスタンプされ、また、肩部には螺旋状に沈線を描いている。	無	



第16図　A地区第6号墓



第17図　A地区第６号墓出土の納骨器



第18図　A地区第6号墓出土の陶磁器（1・2）、キセルのがん首（3）

けて穿孔される。8～13は第Ⅱ類ｂの身の資料で、8・9は口縁部は直口し、肩部の張る器形である。10～12も口縁部が外反するもので、10は肩部が張るもので、11・12は張りの弱いスマートな器形である。3点とも口唇部は幅広く造られる。13は横線と波状文を施す底部資料である。

14は第Ⅲ類ｂに属する身の資料で、俗にソーベージーシと呼称されるものである。黄褐色の釉とコバルトで施釉される。

15は沖縄産無釉焼き締めの壺形陶器で、肩の張る器形である。

（2）陶磁器

陶磁器の中でも、比較的新しい磁器のみ4点検出された。

第17図1に示したものは大皿に属すると思われるもので中央に人物、松、鶴、山、川を描いた巻絵を配し、4ケ所の空間には鳥・獣文を円状にモチーフ化した文様と草花文を配する銅版刷りによる絵付けと思われるが判然としない。大きさは口径約27cm、高さ3cm、底径15.8cmである。2は銅版刷りによってサクラと波状文を描いた皿である。口唇部には鉄釉をぬっている。大きさは、口径13.3cm、底径7.3cm、高さ2.5cmを測る。

（3） 陶器製品

第17図3はキセルのがん首で緑釉陶器製品である。大きさは、長さ2.6cm、重さ4ｇである。

第7号墓

1　構　　造（第19図1）

Ａ地区で最も下位に位置し、掘り込み形式の墓である。墓の入口は1.2×1.2ｍと広く開けられ、墓室は奥行き2.6ｍ、幅2.5ｍ、高さ1.0ｍで、床面は平坦に成形され、天井の横断面は弧状を呈する。墓口右側に石灰岩礫が配される。

2　出土遺物

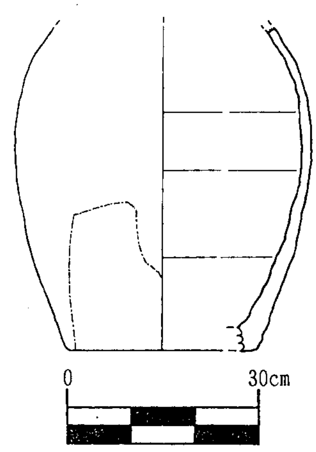
（1）納骨器（第20図）

沖縄産無釉焼き締めの壺形陶器が得られている。

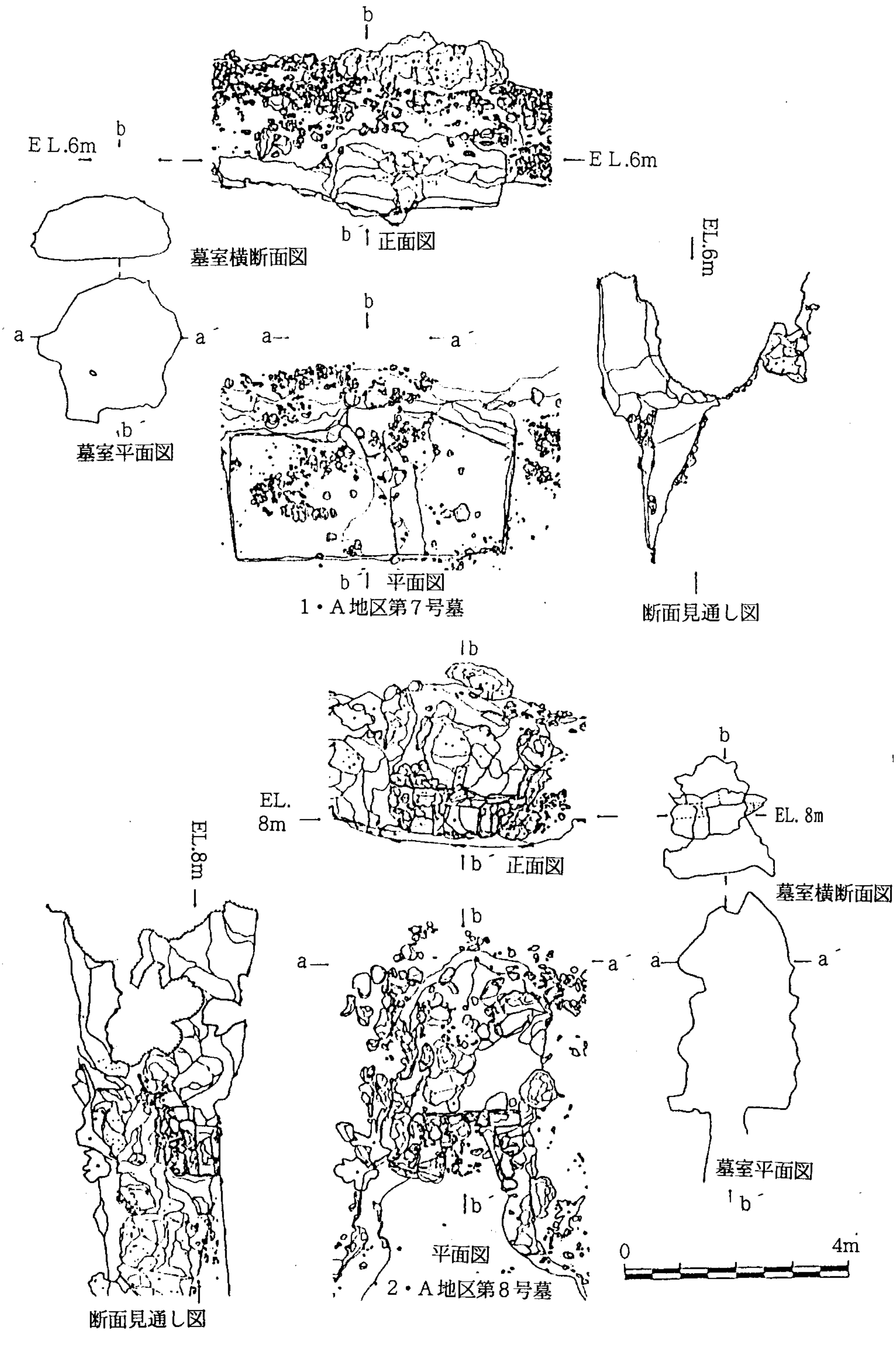
（2）陶磁器

図示したものについて略記する。

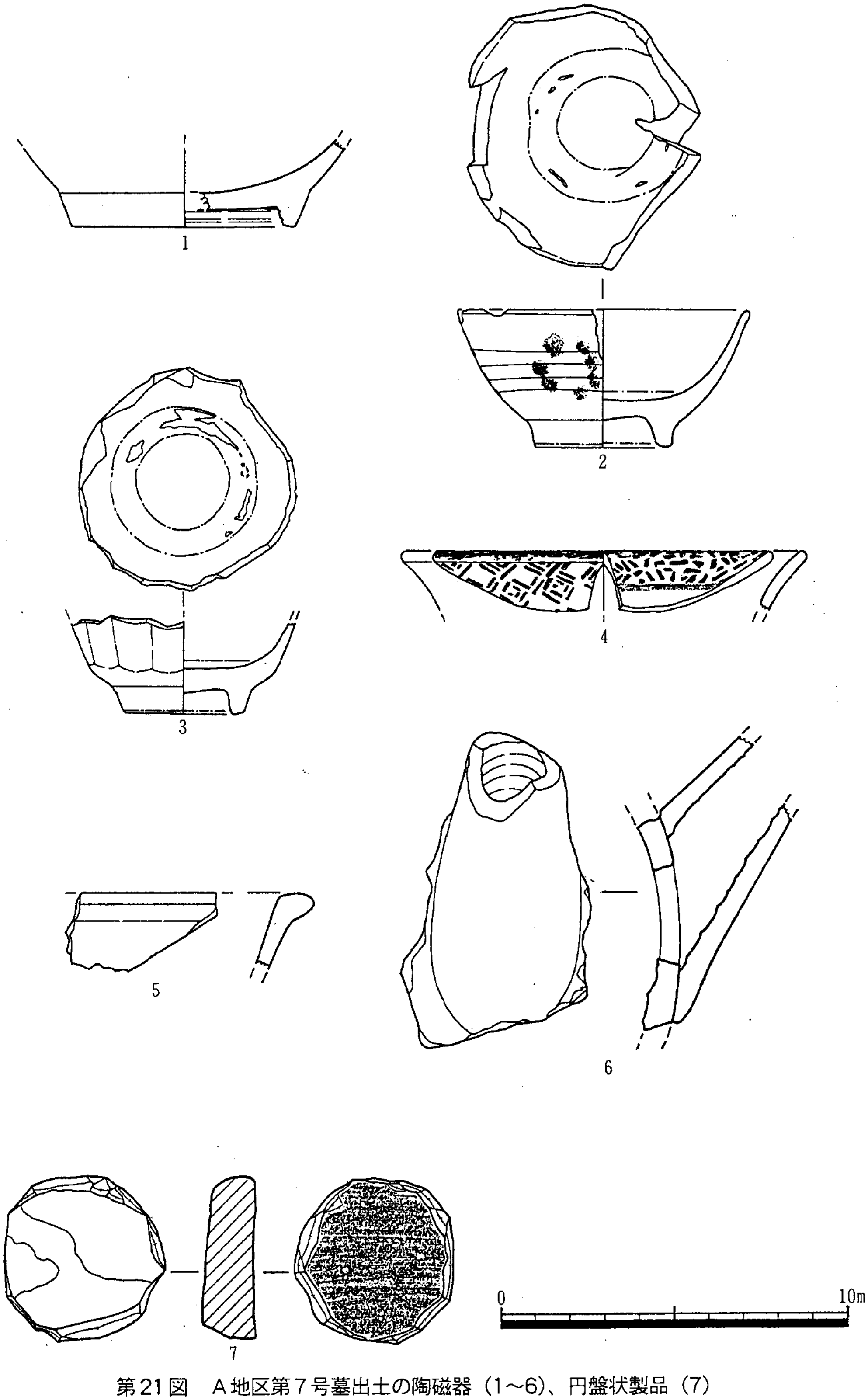
第20図1に示したものは、灰釉碗の底部で、底径は6.4cmを測る。内底は輪状に砂粒の付着が認められる。2は白化粧の跡に施釉する小ぶりの碗で外体部に7つの円状呉須文を円状に配する。大きさは口径8.5cm、底径3.9cm、高さ3.9cmを測る。3も前述2と同様の作りをするが、外体部の面取をする小ぶり碗の底部資料である。底径は3.4cmを測る。4は碗の口縁部破片で、型紙刷りによるひし形状の文



第20図 Ａ地区第7号墓出土の納骨器



第19図　1・A地区第7号墓　2・A地区第8号墓



第21図　A地区第7号墓出土の陶磁器（1～6)、円盤状製品（7）

様を帯状に口縁部に沿って配するものである。口径は推算11.8cmを測る。本土産の磁器である。
５・６は褐釉を施釉する沖縄産の陶器と思われるものである。５はやや小ぶりの鉢、６はやや大きい鉢の注口と推察される資料である。

（３）円盤状製品

第21図７は円盤状製品で陶器製で釉は認められない。大きさは直径4.55cm、重さは44ｇを測る。

（４） その他

現代陶磁器の皿が２点、沖縄産の陶器片１点が検出されたが、以上の報告にとどめる。

第８号墓

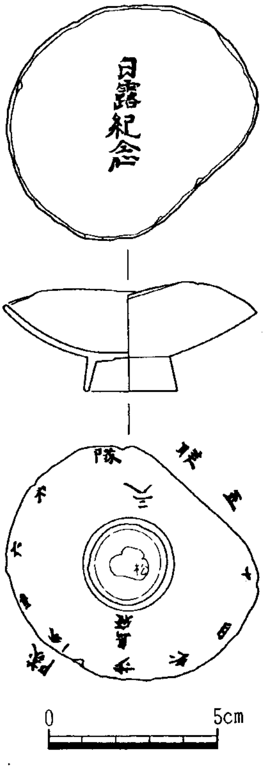
１ 構　　造（第18図２）

奥行きの浅い洞窟を利用するもので、墓室の天井部は落盤している。墓口は切り石でなされ、漆喰を塗られたソデイシは庭部に向かって「ハ」字状を呈する。ソデイシには補修のためのセメントで固めたところもある。庭部は平坦に整地され、左側壁と右側壁の石灰岩は粗方垂直に加工されている。墓室内からは人骨や厨子甕等の出土のないことから、墓の造築後に何等かの理由により移転したものと考えられ、天井部の落盤はその後に起きたものであろう。

２ 出土遺物

（１）金属器

第22図に示したものは前庭部付近から検出された盃である。この盃には内底部に日露記念と凸文字があるほか、外体部口縁部に沿って「才六中隊歩兵四十五联隊」と体部に縦走する「島袋」と「三八」の文字が認められる。大きさは口径7.3cm、底径2.6cmを測る。



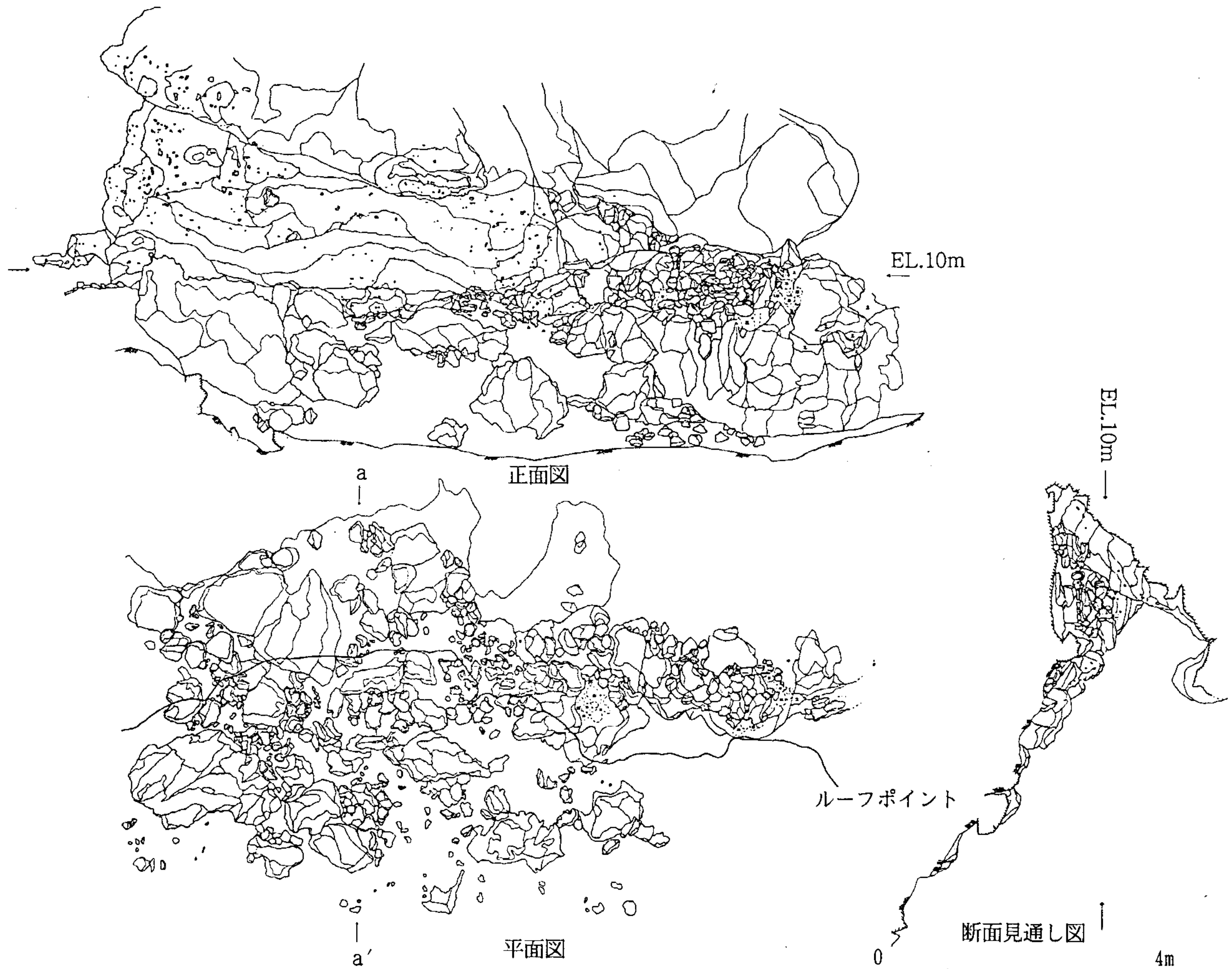
第22図　金属器

第９号墓

１ 構　　造（第23図）

Ａ地区南端に位置し、斜面上の岩陰を利用した墓である。岩陰は奥行き2.5ｍ、幅6.5ｍのひし形状の平場を有し、ルーフポイントは平場から約60cm斜面へ張り出す。岩陰の右側には野面積みの石積みがみられる。岩陰内と斜面に散在する多量の石灰岩礫等から本墓は岩陰を石囲いする墓である。高さは平場の前で2.0ｍ、奥で0.2ｍである。

本墓からは後述するように沖縄貝塚時代の数時期にわたる土器等が採集され、先史時代から近世までに何等かの活動が行われていたようである。



第23図　A地区第９号墓

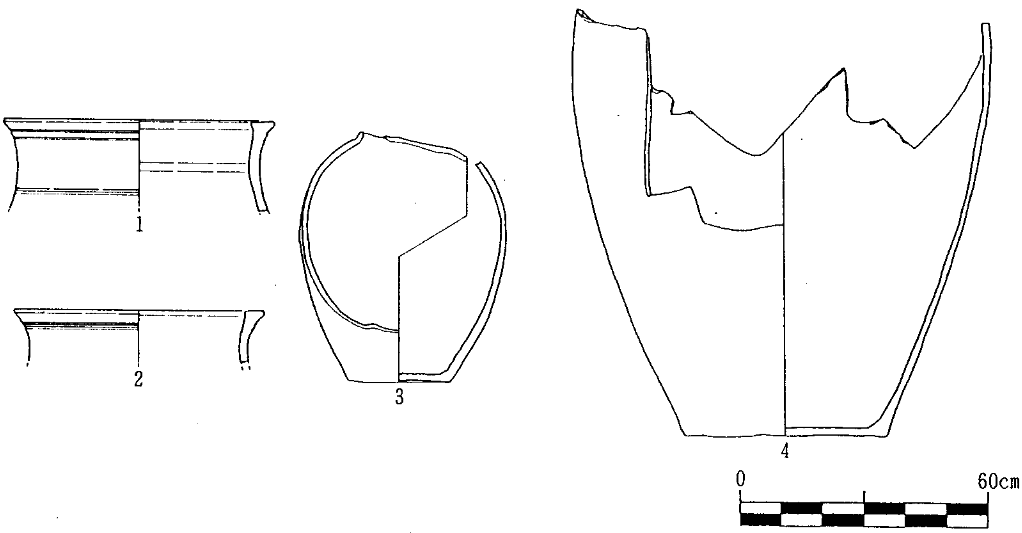
2　出土遺物

（1）納骨器（第24図）

1・2は第Ⅱ類bのマンガン掛け甕型厨子甕で、肩の張りの弱いスマートなタイプであろう。2点とも口唇部は幅広く、1は略「T」字状をなす。3.4は口縁部を欠く壷形陶器で、転用品と考えられるものである。

表5　A地区第9号墓出土納骨器観察表

挿図番号	資料 蓋	資料 身	分類	法量 a	法量 b	法量 c	銘書の有無
第24図 1		○	Ⅱ－b	32.6	－	－	無
2		○	〃	32.5	－	－	〃
3			Ⅴ	－	－	24.0	〃
4			〃	－	30.0	12.0	〃

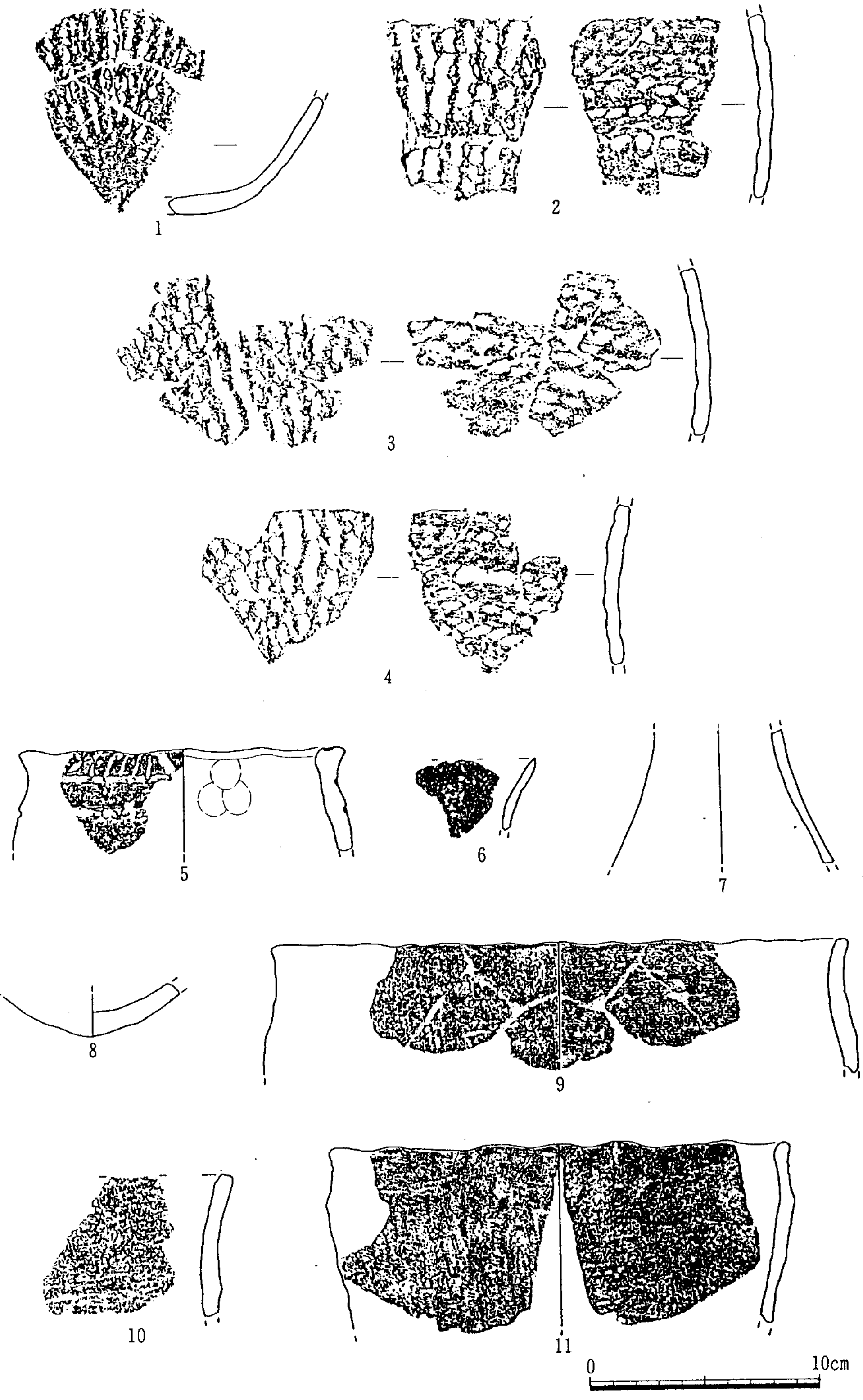


第24図　A地区第9号墓出土の納骨器

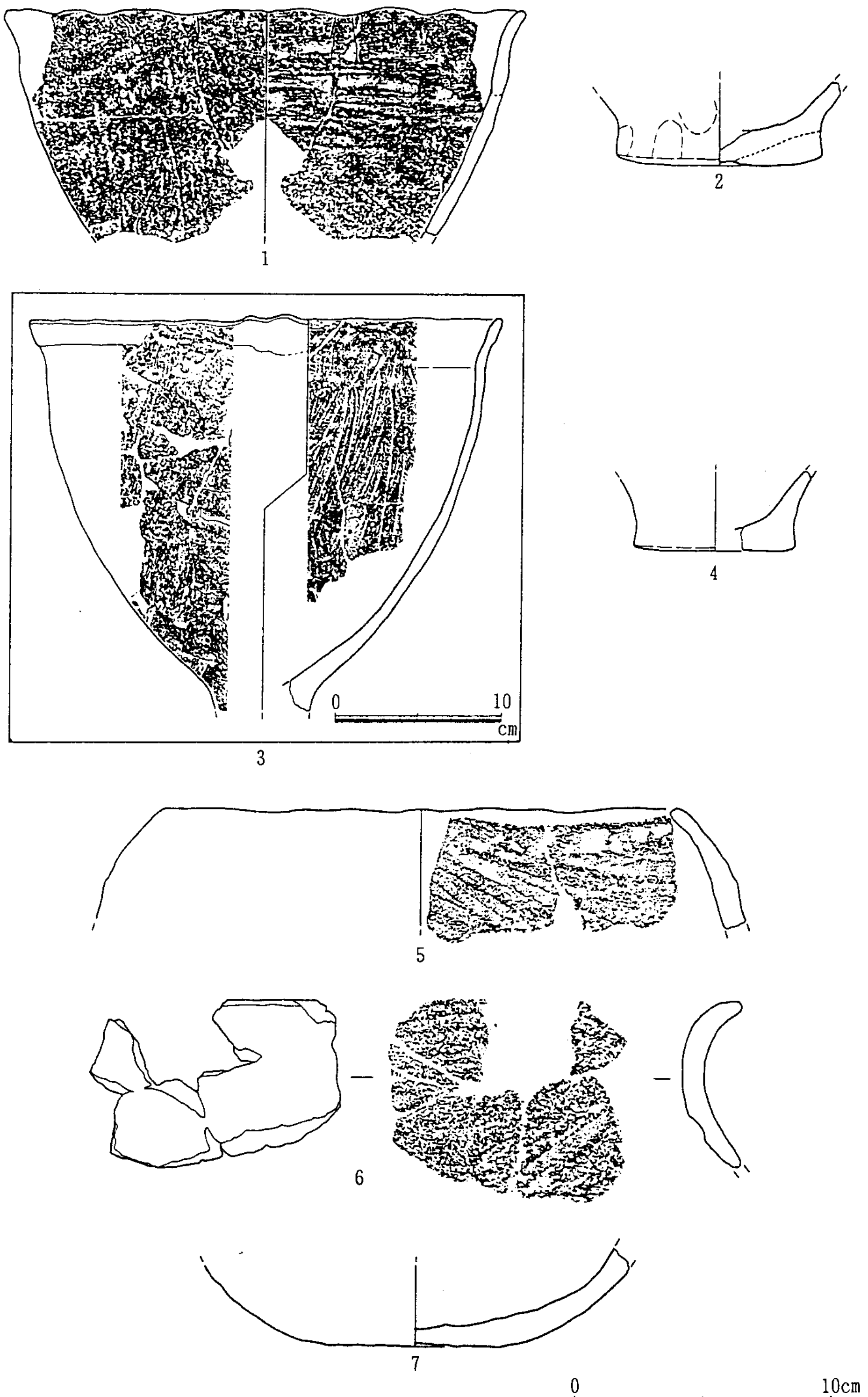
（2）土　器

土器は448点検出されたが紙面の都合もあり、その中の特徴的な資料について図示し、概述する。土器型式で観ると爪形文系土器、室川式土器、フェンサ下層式土器、グスク系土器等が出土している。以下、順に略述する。

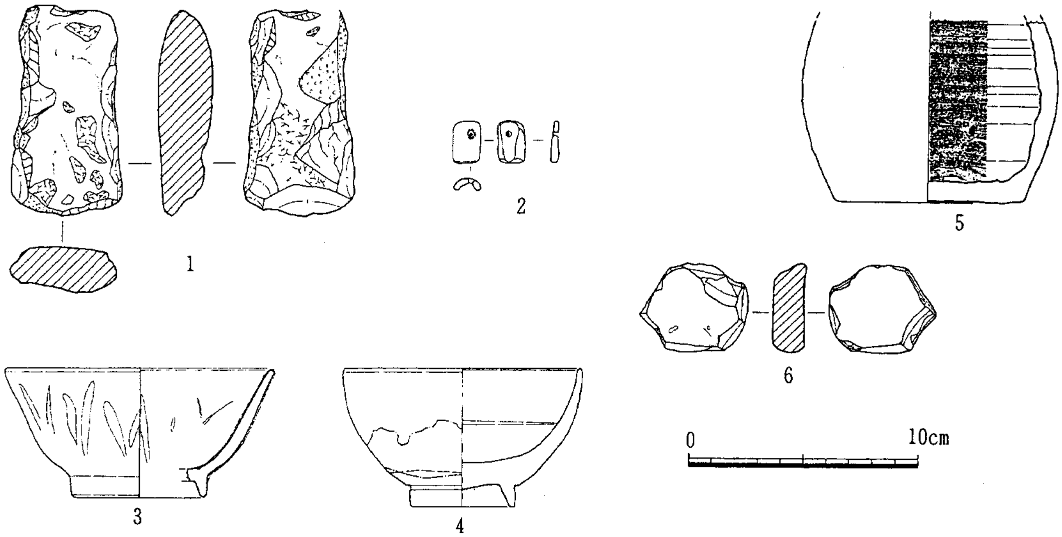
第25図1～4に示したものは爪形文系土器の中でもヤブチ式土器と呼ばれる型式に属すると思われるもので、本地区から検出された85点の爪形文系土器は全てこれと同様のものである。室川式土器と思われる資料は3点検出されたが、その中の口縁部の資料を第25図5に示した。カヤウチバンタ式状のハブラシ状肥厚部分をつくるが口唇部を強調するものである。口縁に2条、口唇に1条の単ベラ施文具の押し引き文、口縁に斜沈線が認められる。口径は推算14.2cmを測る。6・7・8は諸特徴から同一個体と思われる資料で、6は口縁破片、7は頸部破片、



第25図　A地区第９号墓出土の土器



第26図　A地区第９号墓出土の土器



第27図　A地区第９号墓出土の石器（1）、翡翠製品（2）、陶磁器（3～5）、円盤状製品（6）

８は底部破片である。前述の点から尖底の長頸壺型を推察する。時期は判然としないが、沖縄貝塚時代中期後半から同時代後期前半頃のものではないかと推察する。９・10は口縁部破片で、９については口縁部の復元を試みた。肩がやや張り、肩部から頸部にかけ若干すぼまり、口縁部がやや外反する器形が想定されるものである。口径は推算25cmを測る。10も９に近い器形が想定されるもので、肩部の上方で口縁からの肥厚帯下端を強調する。11は前記２者に比較して器面の整形が粗雑になるもので、特に外面は浅い起伏が認められる。また、口縁部は逆「く」の字状を呈し、口唇部は丸味を呈する。口径は推算20cmを測る。第26図１～４はフェンサ下層式土器、5～7はグスク系土器と思われるものである。

（3）石　　器

石器は１点検出された。その１点は第27図１に示したもので石斧と思われるものである。図の上位の部分で表面と裏面から磨きだし刃を作りだしたように見えるが、刃縁は丸味を呈し、鋭さはない。平面型からすると図の下方に刃があったことも考えられる。輝緑岩製である。長さは９cm、幅4.85cm、厚さ2.37cm、重さ168ｇを測る。

（4）石製品

翡翠製の製品が１点検出された。第27図２に示したもので半管状を呈する。大きさは長さ1.85cm、幅は1.2cm、厚さ3.5cm、重さ2.5ｇを測る。

（5）陶磁器

これに属するものは３点検出され、第27図３・４・５に示した。３は青磁碗で外体部にヘラ削りの蓮弁文、内体部にはヘラ削りの文様が認められる。大きさは口径11.8cm、底径5.9cm、高さ5.75cmを測る。４は緑釉を外体部に施釉する陶器の碗である。器形は天目茶碗状を呈する。

大きさは口径10.2cm、底径4.6cm、高さ6.2cmを測る。5は沖縄産無釉陶器の瓶あるいは壺の底部資料と思われるものである。底径は8.4cmを測る。

（6）円盤状製品

第27図6に示したもので、瓦破片を使用したものである。大きさは直径4.35cm、厚さ1.4cm、重さ26gを測る。

（7）骨製品

本墓出土の骨製品は4点で、その内訳は装飾品3点、用途不明1点である。

装飾品

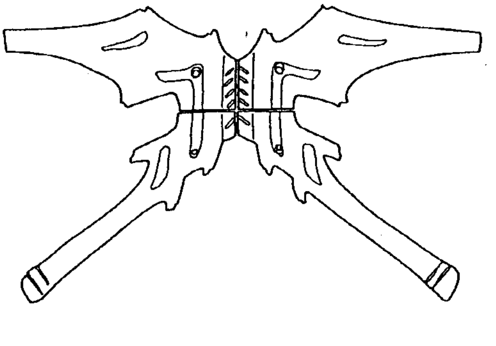
①彫刻骨器（第28図1・2）

本品は津堅キガ浜貝塚で「彫刻骨器」（bタイプ）（註2）と報告されているものに近似する資料である。

1は文様が表面のみに施されるもので、上部中央に縦位の凹線と逆L字状の凹線、下部先端には横位に3本の凹線を施した後、それと交差する沈線が3条認められる。縦位凹線のコーナー部分には2.5×1.2mmの孔を有し、そこには紐ズレの痕跡も見られる。研磨調整は丁寧である。ジュゴンの肩胛骨で製作されているため、側面観は内湾している。下部の断面は台形を呈する。残存部の大きさは長さ90.9mm、重量8.0gを測る。

2は再生品で、形状から1に類似する製品の下部資料かと推察する。資料の上部に縦位の凹線、先端部には3条の沈線が施されている。この資料も施文は表面のみである。断面は三角形を呈し、丁寧に研磨されている。残存部の大きさは長さ41.0mm、重量5.8gを測る。1・2ともにジュゴンの骨が使用されている。

尚、本資料はキガ浜貝塚出土の彫刻骨器（bタイプ）に近似することから第29図のような形状が想定される（註3）。



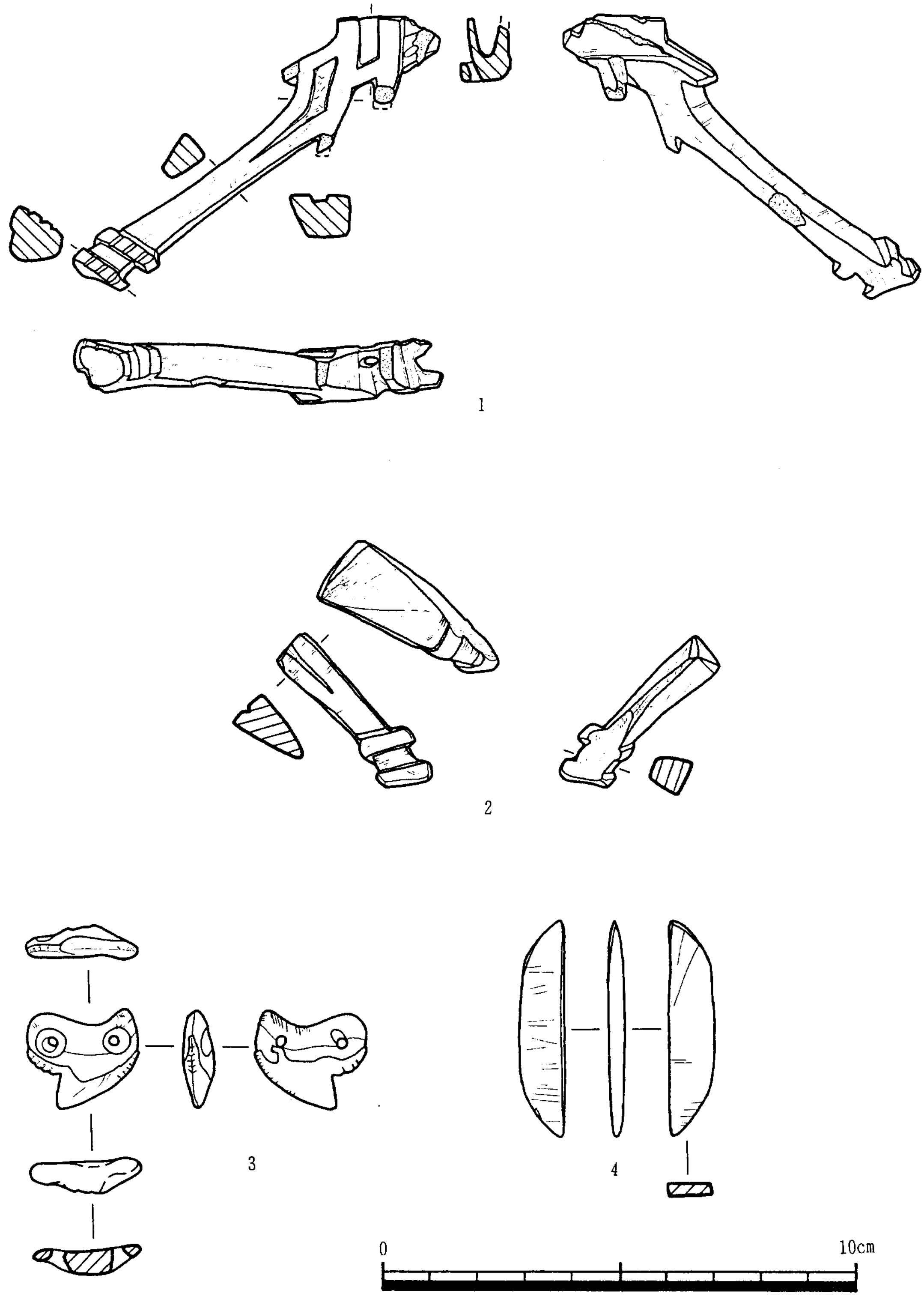
第29図　彫刻骨器復元図

②有孔サメ歯製品（第28図3）

歯根部に2孔を穿つ製品で1点検出された。エナメル部を研磨、加工する。イタチザメの歯を利用したもので完形品である。穿孔はいずれも裏面からで、2孔とも紐ズレの痕跡を残す。歯根部の裏面中央には横位の溝もみられる。本製品の大きさは最大長18.6mm、最大幅23.0mm、最大厚6.2mm、孔径は右側2.0mm、左側2.2mmで、重量は8.0gを測る。

③用途不明品（第28図4）

半月状に加工した製品で、用途不明である。研磨は丁寧になされ、刃先は鋭利に尖っている。完形品で大きさは最大長45.8mm、最大幅9.2mm、最大厚2.9mm、重量1.0gを測る。



第28図　Ａ地区第９号墓出土の骨製品１・２彫刻骨器、３有孔サメ歯製品 ４用途不明品

（8）貝製品

貝製品は総数86点が採集された。実用品と装飾品に分けられるが、そのいずれに属するのか判然としない資料については用途不明品として扱った。実用品は匙状製品（12点）、二枚貝有孔製品（23点）の２種、装飾品は貝輪（21点）、巻貝製品（12点)、イモガイ製品（４点）の３種、用途不明品はタカラガイ製品（２点)、貝符状製品（11点)、アツソデガイ有孔製品（１点）の３種である。

実用品

①匙状製品（第30図）

12点の出土があり、貝種別でみると、ヤコウガイ製（９点）、ゴホウラ製（２点）、アツソデガイ製（１点）の３種であった。ヤコウガイ製はいずれも体層部や殻口部が使用され、第29図６を除いては造りが雑なため、未製品か、極めて粗雑な製品と思われる。ゴホウラ製とアツソデガイ製の資料はほぼ完形で出土している。ゴホウラの体層部を用いたものにキガ浜貝塚（註４)、古座間味貝塚（註５)、嘉手納貝塚（註６)、地荒原貝塚（註７）等に類例がある。

表6　匙状製品出土一覧

単　位：ｍｍ／ｇ

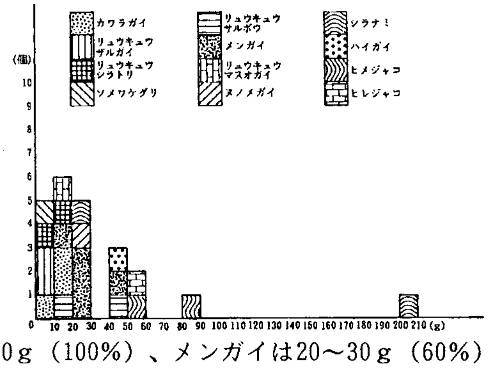
No	挿図番号	素材	法量 最大長	最大幅	重量	残存状況	使用部位	加工状況
1	第30図 1	ヤコウガイ	☆ 106.2	☆ 61.0	☆ 32.0	破損	体層部	研磨加工痕は見られない。未製品か極めて粗雑な製品と思われる。
2	〃 2	〃	☆ 71.8	☆ 60.1	☆ 37.0	〃	殻口部	右辺には１ケ所刻みが施されており、左辺に打割痕が見られる。左側中央部に研磨が見られる。
3	〃 3	〃	☆ 52.0	☆ 54.0	☆ 20.0	〃	体層部	左辺は切断後、若干の研磨が加えられているが、右辺に加工痕は見られない。
4	〃 4	〃	☆ 56.0	☆ 36.1	☆ 6.6	〃	〃	左辺に若干の研磨が見られる。内外面ともに真珠層が露出している。
5	〃 5	〃	☆ 33.0	☆ 23.0	☆ 4.2	〃	〃	外面に加工痕が見られる。内外面ともに真珠層が露出している。
6	〃 6	〃	☆ 58.0	☆ 35.0	☆ 6.6	欠損	〃	外面周縁に研磨が見られる。周縁の数カ所に孔が穿たれており、紐ズレ痕が見られる。
7	〃 7	〃	☆ 55.0	☆ 41.0	☆ 8.2	破損	〃	外面に研磨痕が見られる。内外面ともに真珠層が露出している。
8	〃 8	〃	☆ 52.1	☆ 39.0	☆ 10.0	〃	〃	両側辺に若干剥離が見られる。内外面に真珠層が露出している。
9	〃 9	〃	☆ 41.0	☆ 23.5	☆ 8.0	〃	〃	周縁部に若干剥離と研磨が見られる。その形状から貝匙の破片かと思われる。
10	〃 10	ゴホウラ	☆ 92.0	☆ 58.1	☆ 90.0	完形	〃	平面形は木の葉状を呈する。粗雑造りで周縁に打割痕が見られる。全面はやや摩耗している。
11	〃 11	〃	☆ 92.2	☆ 68.1	☆ 106.0	欠損	〃	貝全体に石灰が付着。アバタが見られることから死貝を利用していると思われる。
12	〃 12	アツソデガイ	☆ 70.0	☆ 46.0	☆ 33.9	〃	〃	貝全体が摩耗している。底部は小さなつまみ状を呈する。

《注》 ☆印は残存部の計測

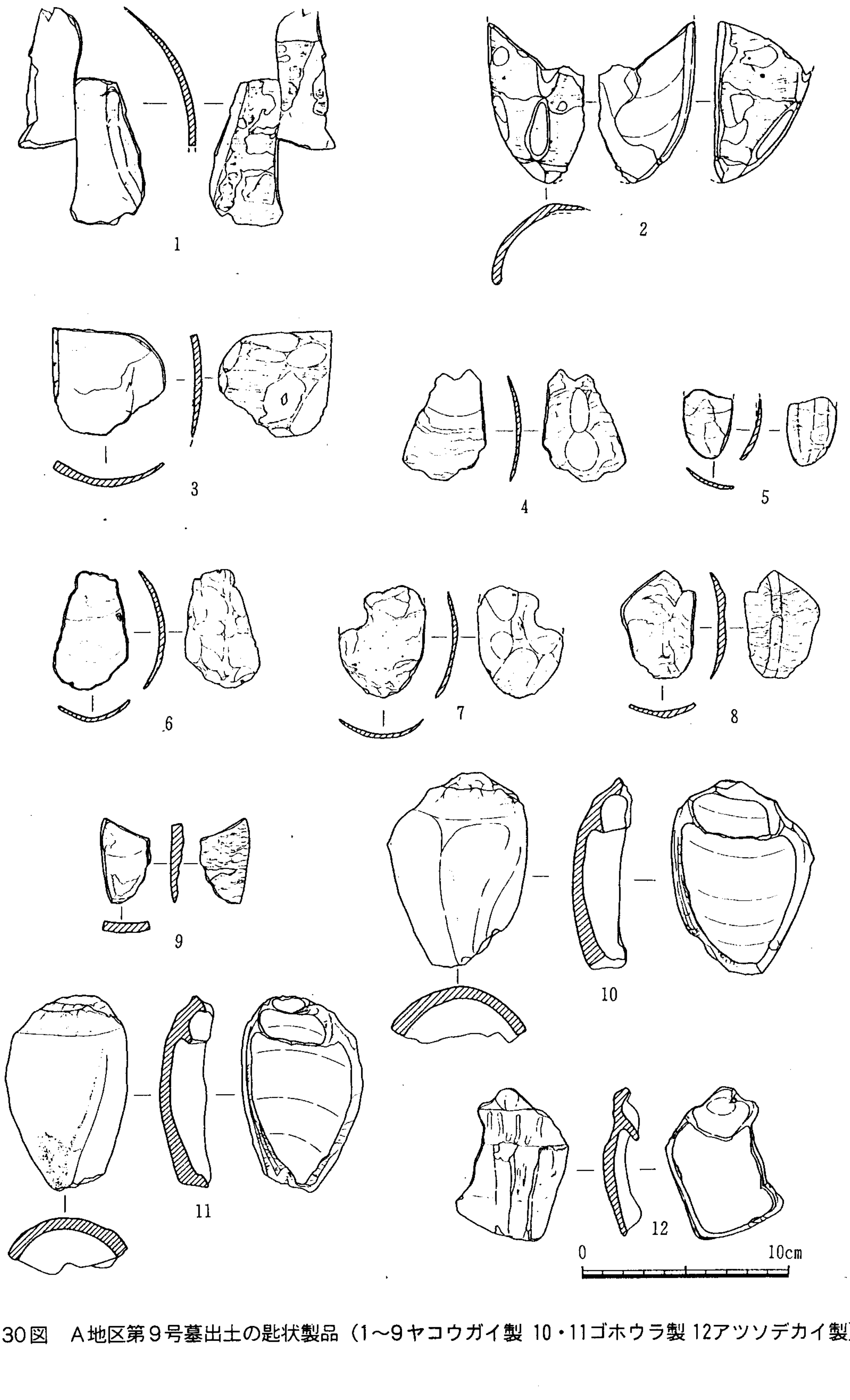
②二枚貝有孔製品（第31図）

一般に殻頂部又はその近くに穿孔するもので、リュウキュウサルボウ（２点）、カワラガイ（３点)、リュウキュウザルガイ（２点)、メンガイ（５点)、リュウキュウシラトリ（２点)、リュウキュウマスオガイ（１点)、ヌノメガイ(１点)、ソメワケグリ（１点)、ハイガイ（１点)、シラナミ（２点)、ヒメジャコ（２点)、ヒレジャコ（１点)、12種23点が出土した。第７表に重量別の出土状況を示した。

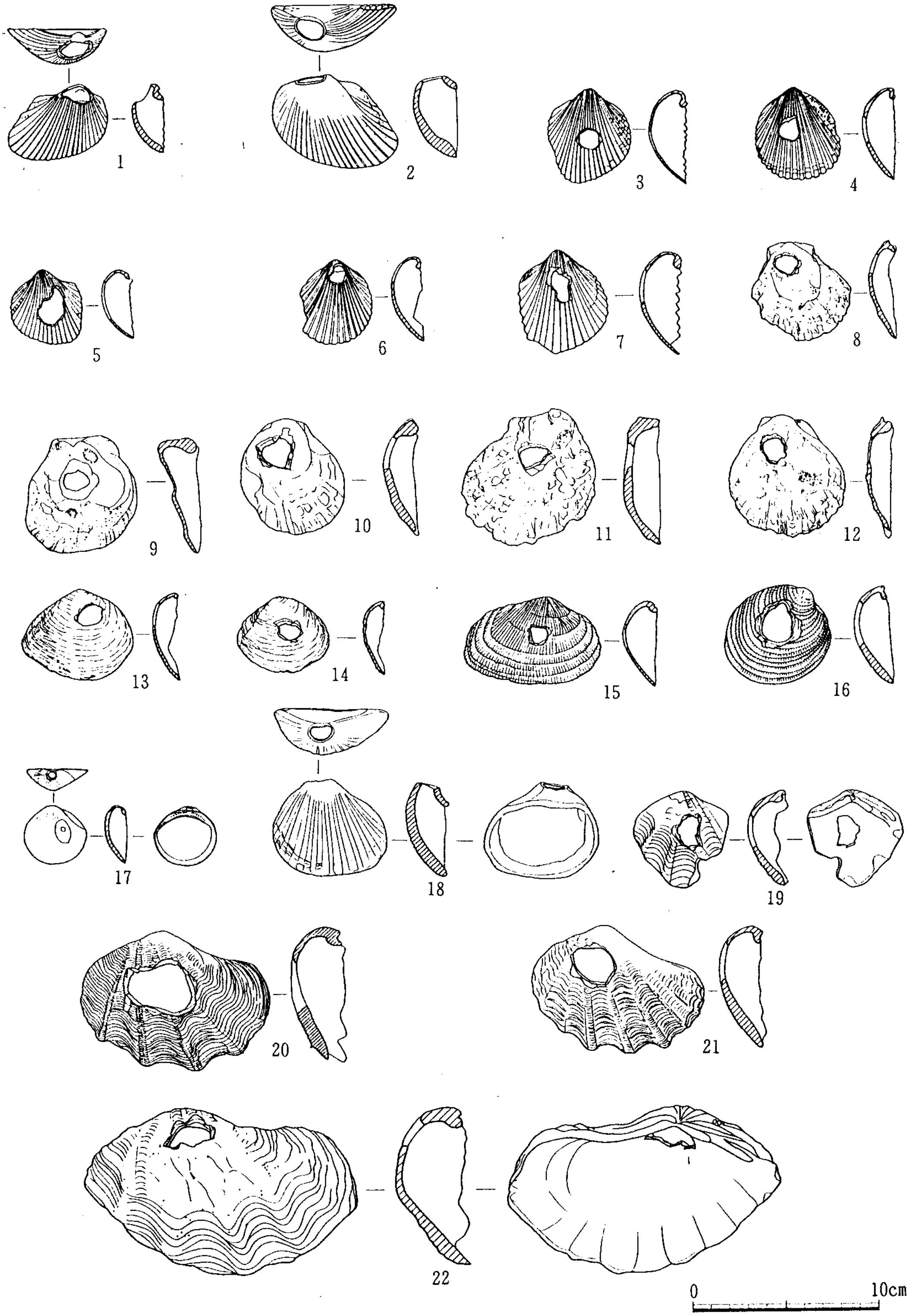
表7　二枚貝有孔製品重量分布



これによると、リュウキュウザルガイは０～10ｇ（100%）、メンガイは20～30ｇ（60%）、に集中する。リュウキュウシラトリ、ソメワケグリ、前述のリュウキュウザルガイは他の貝種



第30図　A地区第９号墓出土の匙状製品（1～9ヤコウガイ製 10・11ゴホウラ製 12アツソデカイ製）



第31図　二枚貝有孔製品

に比べて軽く、特にザルガイの場合、孔の位置がいずれも貝殻の中央に位置する。以上のことから、これらの貝は他の９種とは異なる様相を呈し、網の錘以外の用途の可能性もある。表８に観察表を示した。尚、孔の形状及び計測はカンドウ原遺跡（註８）に準じた。

表８　二枚貝有孔製品観察一覧

単　位：mm／g

No	挿図番号	貝種	左右殻	法量 最大長	最大幅	重量	孔径 縦	横	孔の形状	孔の位置	穿孔	腹縁	加工状況
1	第31図1	リュウキュウサルボウ	左	53.0	40.0	15.9	8.0	15.0	横楕円	上中	内	×	孔の縁はやや摩耗する。
2	〃 2	〃	右	66.5	50.0	41.9	11.0	15.0	〃	〃	〃	×	貝自体が水磨を受けている。
3	〃 3	カワラガイ	〃	45.0	51.0	11.8	11.0	11.0	円	中中	〃	○	複孔。腹縁に剥離痕が見られる。
4	〃 4	〃	〃	48.0	☆57.0	☆16.2	16.5	15.0	不定形	中前	〃	×	孔の表面に剥離が見られ、腹縁が一部破損している。複孔か？。
5	〃 5	〃	左	38.5	40.0	7.9	20.0	14.0	〃	中後	〃	×	貝殻に孔が施されているだけで、他に加工は見られない。複孔か？。
6	〃 6	リュウキュウザルガイ	〃	38.0	☆46.0	☆7.8	90.5	100.0	〃	上後	〃	×	腹縁は一部破損している。複孔か？。
7	〃 7	〃	右	40.6	☆50.0	☆10.0	12.0	11.0	〃	中後	〃	×	腹縁は一部破損している。複孔か？。
8	〃 8	メンガイ	〃	54.0	☆53.0	☆14.0	11.0	13.0	〃	上後	〃	×	腹縁は一部破損している。複孔か？。
9	〃 9	〃	左	58.0	62.0	26.0	11.0	14.0	円	中中	〃	×	貝全体摩耗する。腹縁部以外に石灰の付着が見られる。
10	〃 10	〃	右	56.0	62.5	27.9	16.0	16.0	〃	上後	〃	×	貝全体摩耗する。孔の表面に剥離痕が見られる。
11	〃 11	〃	左	71.0	68.0	48.4	10.5	15.5	不定形	上前	〃	×	貝殻に孔が施されているだけで、他に加工は見られない。
12	〃 12	〃	右	62.0	65.0	24.0	13.0	11.5	円	上後	〃	×	貝全体にアバタが見られることから、死貝を利用したものであろう。
13	〃 13	リュウキュウシラトリ	左	59.5	49.0	11.8	11.5	14.0	横楕円	〃	〃	×	孔の表面に剥離痕が見られる。
14	〃 14	〃	〃	49.0	41.0	6.4	90.0	11.0	〃	中後	〃	○	孔の表面に剥離痕が見られる。腹縁に僅かだが加工痕が見られる。
15	〃 15	リュウキュウマスオガイ	〃	73.0	48.0	18.0	8.9	10.9	不定形	中中	〃	×	孔の表面に剥離痕が見られる。
16	〃 16	ヌノメガイ	右	57.0	54.0	27.8	21.0	16.0	縦楕円	中後	〃	×	殻頂から背縁にかけてアバタが見られることから、死貝を利用したものであろう。
17	〃 17	ソメワケグリ	左	33.0	31.5	6.2	3.0	4.0	横楕円	殻頂	〃	×	孔の表面、ツガイ部に研磨が見られる。前背縁にスレが見られる。
18	〃 18	ハイガイ	右	61.0	51.5	42.0	8.0	12.0	〃	〃	〃	×	貝全体摩耗する。
19	〃 19	シラナミ	〃	☆51.5	☆51.5	☆20.2	16.5	12.0	不定形	中前	〃	×	腹縁部破損。貝全体摩耗する。
20	〃 20	ヒメジャコ	〃	100.2	76.1	74.0	26.5	34.0	横楕円	中中	〃	×	背縁に紐ズレ痕らしきものが見える。
21	〃 21	〃	〃	92.5	69.0	58.8	18.5	21.0	〃	上後	〃	×	孔（殻頂寄り）と背縁に紐ズレ痕らしきものが見える。
22	〃 22	シラナミ	〃	146.0	90.0	200.4	11.5	23.0	〃	上前	〃	×	腹縁部は摩耗し、一部欠損。前背縁部に紐ズレらしきものが見られる。中央部に石灰が付着。ヘビガイ・アバタが見られることから死貝を利用か？。
23	図省略	ヒレジャコ	〃	100.8	64.0	56.0	16.0	200.0	円	〃	〃	×	貝殻に孔が施されているだけで、他に加工は見られない。

《注》
1．☆印は残存部計測値。
2．孔の位置は殻頂部より上・中・下とした。
3．孔の位置の前→前背縁、中→中央部、後→後背縁とする。
4．腹縁の○→加工有り、×→加工無しとする。
5．穿孔の内→内側より穿孔とした。
6．計測はカンドウ原遺跡に準ずる。

装飾品

①貝　輪　（第32図）

アツソデガイ製（１点）、イモガイ製（１点）、サラサバテイ製（９点）、メンガイ製（１点）、オオツタノハ製（９点）の計21点出土した。いずれも体層部を利用している。表９に観察を示した。

表９　貝輪観察一覧

単　位：mm/g

No	挿図番号	素材	法量 最大長	最大幅	最大厚	重量	内径 縦	横	残存状況	加工状況
1	第32図1	アツソデガイ	69.0	17.0	5.8	16.0	☆40.1	☆40.8	破損	全体形は楕円をなす。背面を利用し、研磨は表面と周縁に施される。ヘビガイの付着が見られ、死貝を利用か？。
2	〃 2	イモガイ	63.0	25.5	5.6	20.0			完形	両端には径約3.8mm孔が穿たれる。表裏面とも研磨は丁寧に施されている。
3	〃 3	サラサバテイ	☆42.5	11.0	3.1	☆2.2	－	－	破損	周縁に顕著な剥離痕が見られる。
4	〃 4	〃	☆66.0	13.0	5.0	☆9.8	－	－	〃	表面には研磨が施され、周縁に顕著な剥離痕が見られる。
5	〃 5	〃	☆47.0	15.0	4.0	☆5.0	－	－	〃	周縁には剥離痕が見られる。
6	〃 6	〃	☆59.0	11.0	4.5	☆6.2	－		〃	周縁に剥離が見られ、外面には若干研磨が施されている。
7	〃 7	〃	☆49.1	16.1	8.0	☆8.0	－	－	〃	径約4mmの孔を有し、紐ズレ痕が見られる。表裏面ともに研磨が施されている。
8	〃 8	〃	☆31.0	15.0	2.1	☆2.2	－	－	〃	周縁に顕著な剥離痕と研磨が見られる。
9	〃 9	〃	☆37.0	20.0	4.1	☆5.0	－	－	〃	径約4mmの孔を有し、紐ズレ痕らしきものが見られる。表裏面ともに研磨が施され、裏面上部には剥離が見られる。
10	〃 10	メンガイ	☆27.0	8.2	2.0	☆1.0	－	－	〃	全体的に丸みを帯びている。周縁に若干研磨が見られる。アバタが見られることから死貝を利用したものであろう。
11	〃 11	オオツタノハ	66.6	8.6	3.5	7.8	51.0	35.1	完形	孔は研磨が丁寧に施されている。裏面にアバタが見られることから死貝を利用したものであろう。
12	〃 12	〃	80.2	11.1	2.5	14.0	59.0	41.0	〃	表裏面ともにアバタ・石灰の付着が見られる。
13	〃 13	〃	65.1	10.0	3.1	11.0	47.2	29.1	〃	孔の表裏ともに研磨が丁寧に施されている。
14	〃 14	〃	64.1	9.1	4.0	10.0	51.3	31.5	〃	孔の表裏ともに研磨が丁寧に施されている。内面にアバタが見られることから死貝を利用したものであろう。
15	〃 15	〃	65.0	46.0	3.9	8.0	50.1	33.6	〃	表面、周縁部ともに研磨が丁寧に施されている。石灰の付着が見られる。
16	〃 16	〃	☆42.2	13.0	2.5	☆2.0	－	－	破損	表面や周縁部に若干研磨が見られる。内面にアバタが見られることから死貝を利用したものであろう。
17	〃 17	〃	☆84.0	6.1	3.0	☆6.2	－	－	半欠	製品の研磨調整は丁寧で、表裏面にアバタが見られることから死貝を利用したものであろう。細身の製品である。
18	〃 18	〃	☆69.0	8.0	3.0	☆2.4	－	－	破損	研磨調整は丁寧で、製品の幅は他と比べて細身である。
19	〃 19	〃	☆46.0	10.1	3.5	☆5.0	－	－	〃	周縁に若干研磨が見られる。
20	図省略	サラサバテイ	☆37.0	10.0	4.5	☆4.0	－	－	〃	周縁に顕著な剥離痕が見られ、断面に若干研磨が施されている。
21	〃	〃	☆30.0	17.0	7.0	☆8.2	－	－	〃	周縁に若干研磨が施されている。内面には剥離が見られる。

《注》☆印は残存部計測値。

②巻貝製品（第33図１～12）

12点出土のうち、キバフデガイ（２点）、タケノコガイ（２点）、ヒメチョウセンフデガイ（１点)、ツノガイ（２点)、サツマビナガイ（５点）で、サツマビナガイが最も多い。垂飾品と思われる。表10に観察を示した。

表11　イモガイ製品観察一覧

単　位：mm／g

No	挿図番号	法量 最大長	法量 最大幅	法量 最大厚	法量 重量	孔径 縦	孔径 横	残存状況	加工状況
1	〃 14	42.0	29.1	4.0	7.8	体層上部 4.0 体層下部 4.0	 3.2 4.0	欠損	孔は５ケ所あったと思われる。現存する孔にはいずれも紐ズレ痕が見られる。研磨調整が丁寧である。アバタが見られることから死貝を利用したものであろう。
2	〃 15	☆ 37.1	26.0	5.0	☆ 7.8	体層上部 3.0 体層下部 3.3	 3.0 3.4	破損	孔は３ケ所あったと思われる。現存する孔はいずれも２度にわたって穿孔されている。破損しているが、現存の形より同図16と類似の形状が想定できる。研磨調整は丁寧である。
3	〃 16	☆ 102.1	47.0	4.0	☆ 28.0	第１孔 2.7 第２孔 3.2 第３孔 3.9 第４孔 3.6	 2.7 3.5 3.1 3.9	欠損	第１孔・第２孔・第３孔は２度にわたって穿孔されている。第４孔は外からのみ穿孔。右側は荒目の鋸歯状に加工されており、下部は欠損している。研磨調整が丁寧である。アバタが見られることから死貝を利用したものであろう。

《注》
１．☆印は残存部の計測
２．第５図16の孔は上位から第１孔、第２孔・・・とした。

③札状製品（第33図13）

大型タカラガイの外唇を加工したもので１点得られた。歯の形を残しているが、研磨調整は丁寧である。孔は裏面より穿孔され、右側、歯の部分には抉りが入っている。最大長53.0mm、最大幅19.2mm、最大厚5.0mm、重量8.0ｇ、孔径7.1×7.0mmを測る。

④イモガイ製品（第33図14～16）

大型のイモガイの体層部を用いたもので、3点得られた。垂飾品と思われる。表11に観察を示した。

表10　巻貝製品出土一覧

単　位：mm/g

No	挿図番号	素材	法量 最大長	法量 最大幅	法量 最大厚	法量 重量	孔径 縦	孔径 横	残存状況	加工状況
1	第33図 1	キバフデガイ	56.0	21.5	3.0	11.0	3.2	2.9	完形	縦方向に丁寧な研磨調整が施されている。螺塔付近には紐ズレ痕が見られる。
2	〃 2	タケノコガイ	66.0	16.0	0.9	6.0	－	－	〃	両面に粗雑な研磨調整が施されている。未製品か？。
3	〃 3	キバフデガイ	47.5	20.0	2.9	7.0	螺塔部 3.9 体層上部 3.1 体層下部 3.1	 6.9 7.1 3.1	〃	粗雑な研磨調整が施され、体層部の上部、下部、螺塔付近には孔が穿たれている。
4	〃 4	ヒメチョウセンフデガイ	☆62.0	19.0	☆ 2.5	☆12.0	－	－	破損	製品の制作途中であると思われる。切り口には研磨が施されている。
5	〃 5	ツノガイ	27.5	12.0	1.5	2.2	体層上部 5.2 体層下部 8.1	 5.5 8.1	完形	特に加工痕はないが、垂飾品として用いられた可能性がある。
6	〃 6	〃	31.0	11.6	1.5	3.0	体層上部 6.0 体層下部 8.5	 6.0 9.0	〃	研磨され、外面の肋が消えている。垂飾品に用いられた可能性がある。
7	〃 7	サツマビナガイ	37.0	18.0	2.0	6.2	6.0	5.0	〃	殻頂部は穿孔され、研磨が施されている。
8	〃 8	タケノコガイ	☆27.0	11.0	☆ 1.0	☆ 1.0	－	－	破損	体層部のみを残す。研磨調整は雑である。
9	〃 9	サツマビナガイ	31.0	16.0	2.0	6.0	6.0	6.5	完形	殻頂部は穿孔され、研磨が施されている。アバタが見られることから死貝を利用したものであろう。
10	〃 10	〃	32.0	15.0	2.5	4.2	2.0	2.0	〃	殻頂部が穿孔されているだけで他に加工痕は見られない。
11	〃 11	〃	35.0	17.0	3.0	6.0	6.0	5.5	〃	殻頂部は穿孔され、研磨が施されている。研磨は体層部まで及ぶ。
12	〃 12	〃	31.0	16.0	2.5	4.0	8.0	8.0	〃	貝全体に研磨が施されており、殻頂部は穿孔されている。アバタが見られることから死貝を利用したものであろう。

《注》☆印は残存部の計測

用途不明品

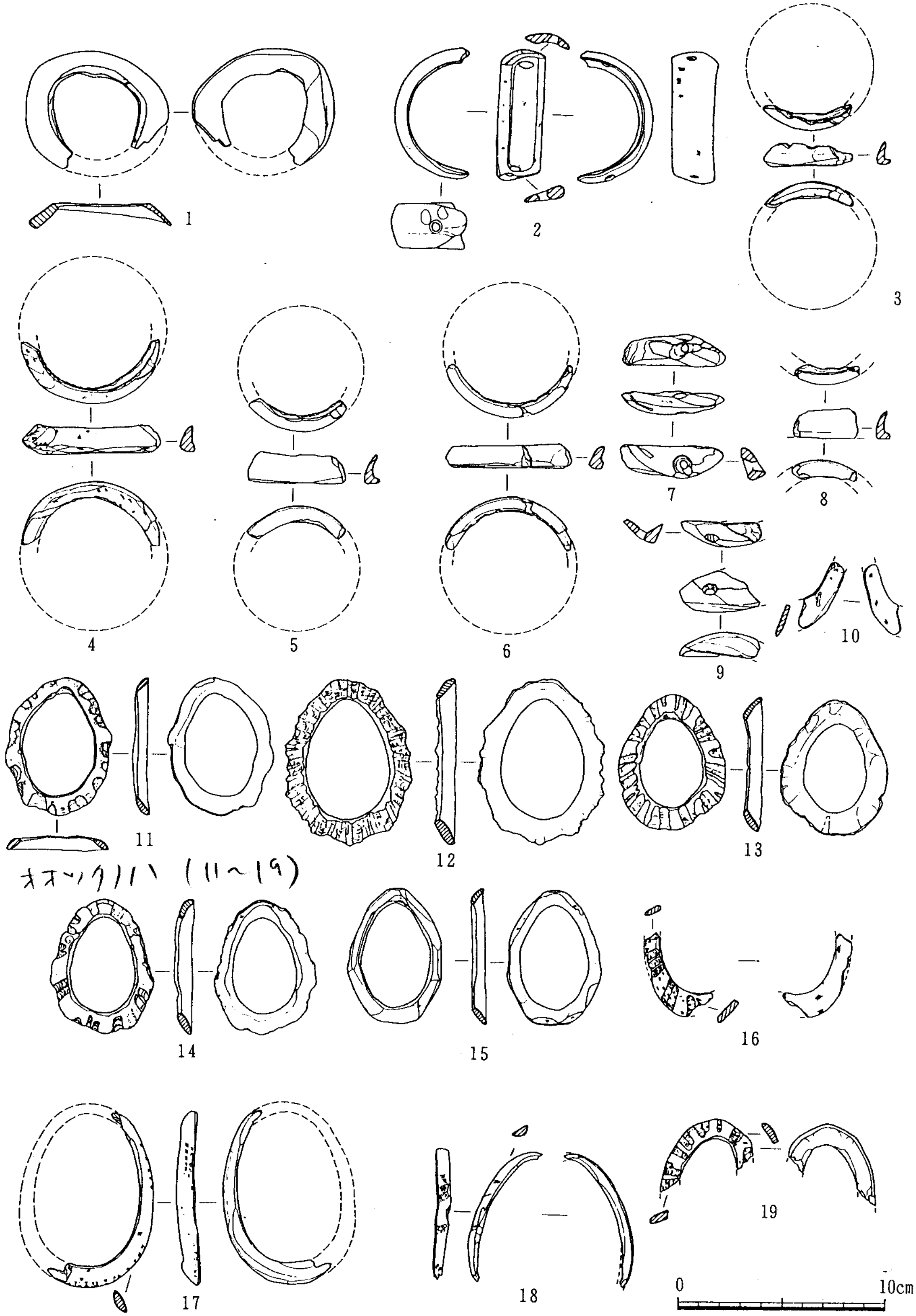
①タカラガイ製品（第34図１・２）

タカラガイの背面に孔を施すもので、ヤクシマダカラ1点、ハナビラダカラ1点の計2点得られた。

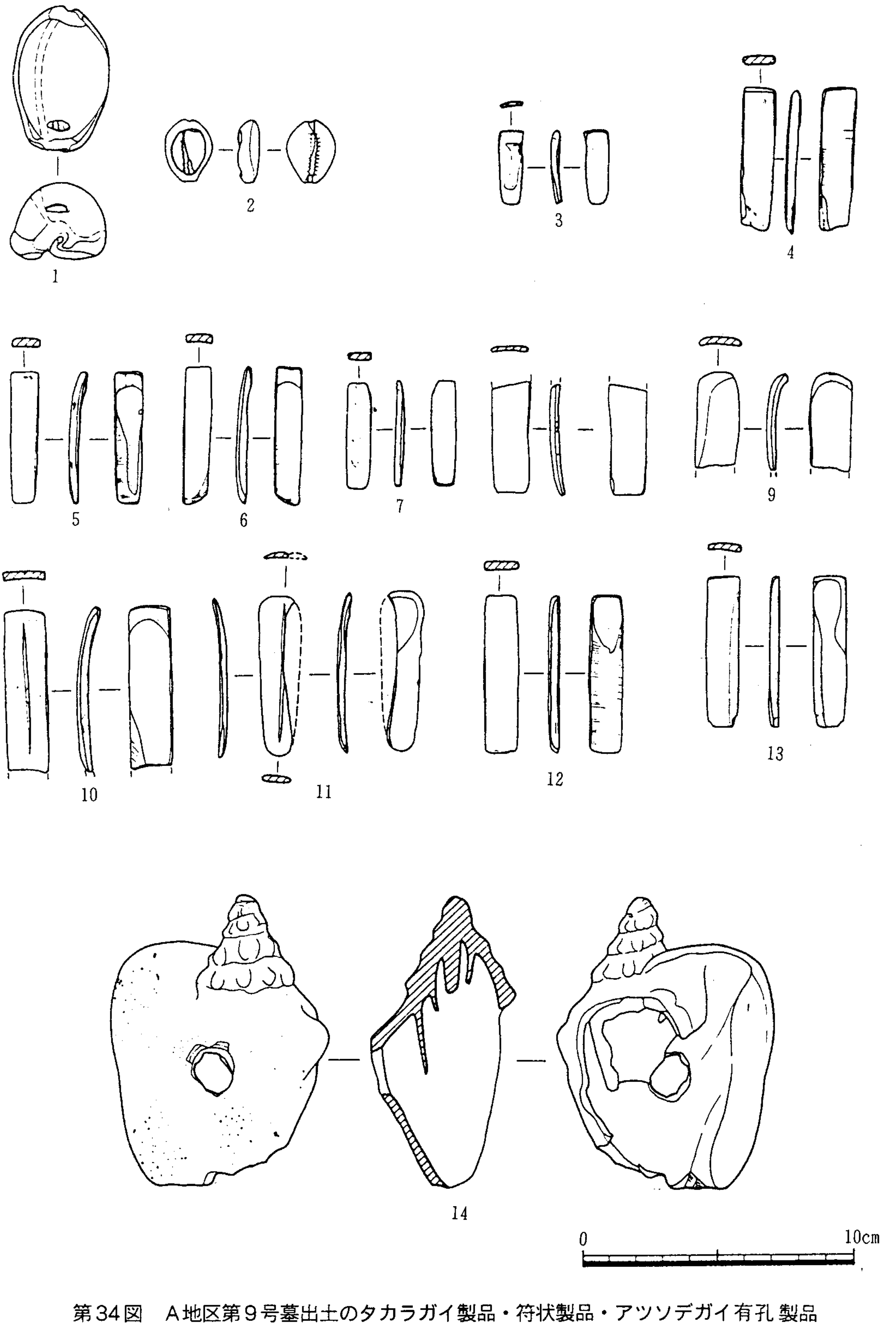
１はヤクシマダカラで、孔を殻底部寄りに外から穿孔。完形品で、殻高55.0mm、孔径5.5×8.0mm、重量26.0ｇを測る。２はハナビラダカラで、背面に孔を穿つ。その周囲は若干研磨が施されている。完形品で、殻高23.0mm、孔径16.5×12.0mm、重量2.0ｇを測る。

②符状製品（第34図３～13）

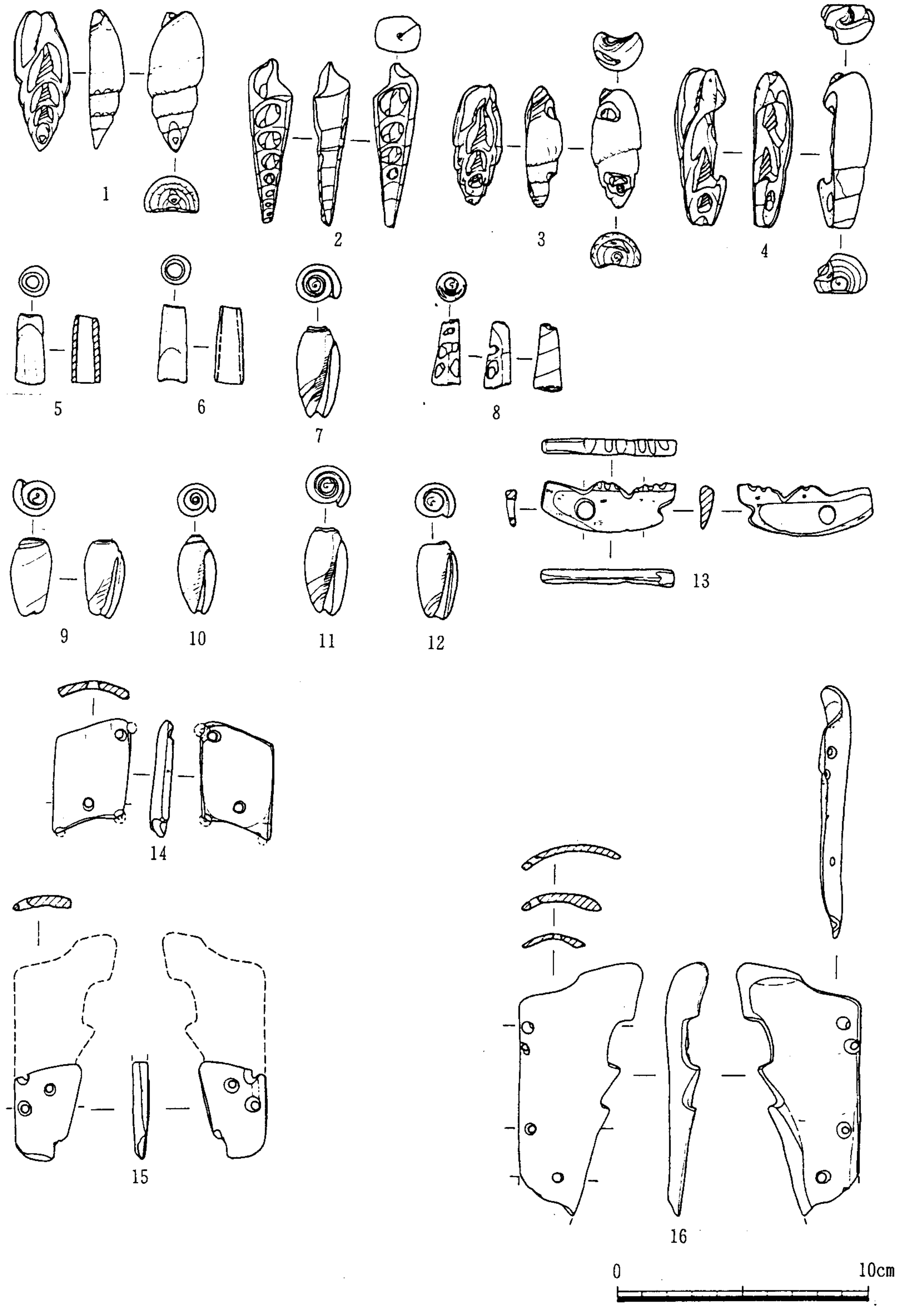
貝を符状に加工したもの。貝種は不明である。製品の形状と研磨の方向は一致する。11点の出土である。表12に観察を示した。



第32図　A地区第９号墓出土の貝輪



第34図　A地区第９号墓出土のタカラガイ製品・符状製品・アツソデガイ有孔製品



第33図　A地区第９号墓出土の巻貝製品（1～12）・札状製品（13）・イモガイ製品（14～16）

表12　符状製品観察一覧

単　位：mm／g

No	挿図番号	法量 最大長	最大幅	最大厚	重量	残存状況	加工状況
1	第34図 3	27.0	8.2	2.0	1.0	完形	横断面は台形を呈し、丁寧に研磨を施している。
2	〃 4	52.2	11.7	2.5	3.0	〃	研磨調整が施されており、特に上部は研磨によって薄くなっている。
3	〃 5	49.0	10.4	3.5	3.8	〃	研磨調整が施されており、特に上部は研磨によって薄くなっている。
4	〃 6	50.6	10.0	3.0	3.0	〃	研磨調整が施されており、特に上下部とも研磨よって薄くなっており、下部は刃状を呈している。石灰付着。
5	〃 7	39.0	10.0	2.5	1.0	〃	研磨調整が施されており、下部は研磨によって薄くなっている。石灰が付着している。
6	〃 8	☆41.0	15.0	2.0	☆ 2.0	破損	研磨調整が施されているが、周縁部は雑である。
7	〃 9	☆34.2	15.1	2.5	☆ 2.2	〃	上部から左側辺にかけて研磨が施されている。
8	〃 10	☆59.1	16.0	3.0	☆ 6.8	〃	研磨調整が施されており、表面の中央に縦位の刻みが施されている。
9	〃 11	59.0	☆10.1	2.5	☆ 2.0	〃	研磨調整が施されており、表面の中央に縦位の刻みが施されている。石灰が付着している。
10	〃 12	58.1	12.2	3.5	5.0	完形	研磨調整が施されており、上下部は研磨によって薄くなっている。
11	〃 13	56.0	12.0	2.5	4.0	〃	研磨調整が施されており、特に上下部は研磨によって薄くなっている。

《注》
1．☆印は残存部計測値。

③アツソデガイ製有孔製品（第33図14）

本製品は体層部の一部が欠損しており、背面には径1.5mmの粗雑な孔が認められるだけで、他に加工は認められない。重量は174gを測る。

（9）獣魚骨

本墓で採取された獣骨はイノシシ（右下犬歯1点、左下犬歯1点、左上顎骨1点、右下顎第三臼歯1点）、イヌ（上顎犬歯1点、下顎犬歯1点、切歯1点）、ネズミ（犬歯1点、右下顎骨1点、右肩甲骨1点、上腕骨2点、左寛骨1点、大腿骨2点、脛骨5点）、ヘビ（脊椎2点）が得られた。魚骨はブダイ（左上咽頭骨1点）、エイ（脊椎2点）、不明（3点）で、その外にカニの爪が2点採集されている。

第10号墓

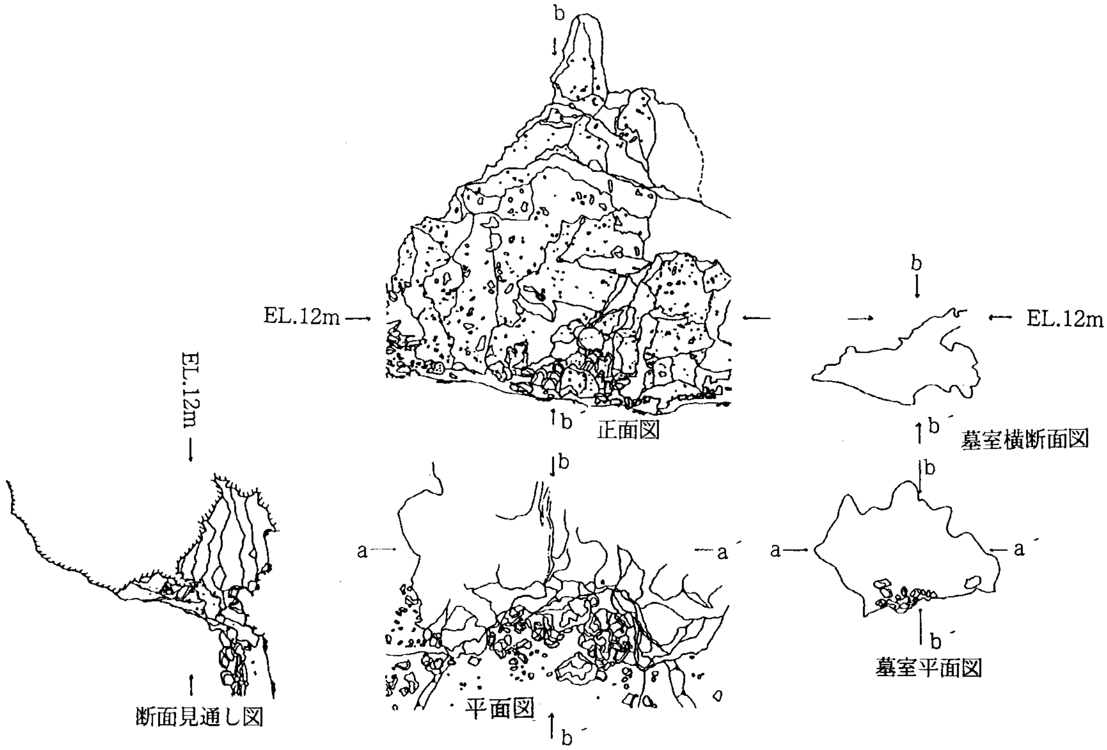
1　構　　造（第35図1）

第9号墓のある岩の北面する岩陰を掘り込んで造られるもので、墓口前面は比較的広い平場である。墓口には石灰岩礫の配置が認められるが、岩陰の状況等から入口の下半分のみに礫を積み上げるタイプであろう。墓室は正面観が三角形状をなし、奥行き1.4m、幅2.9mで、高さは中央部で0.8mを測る。

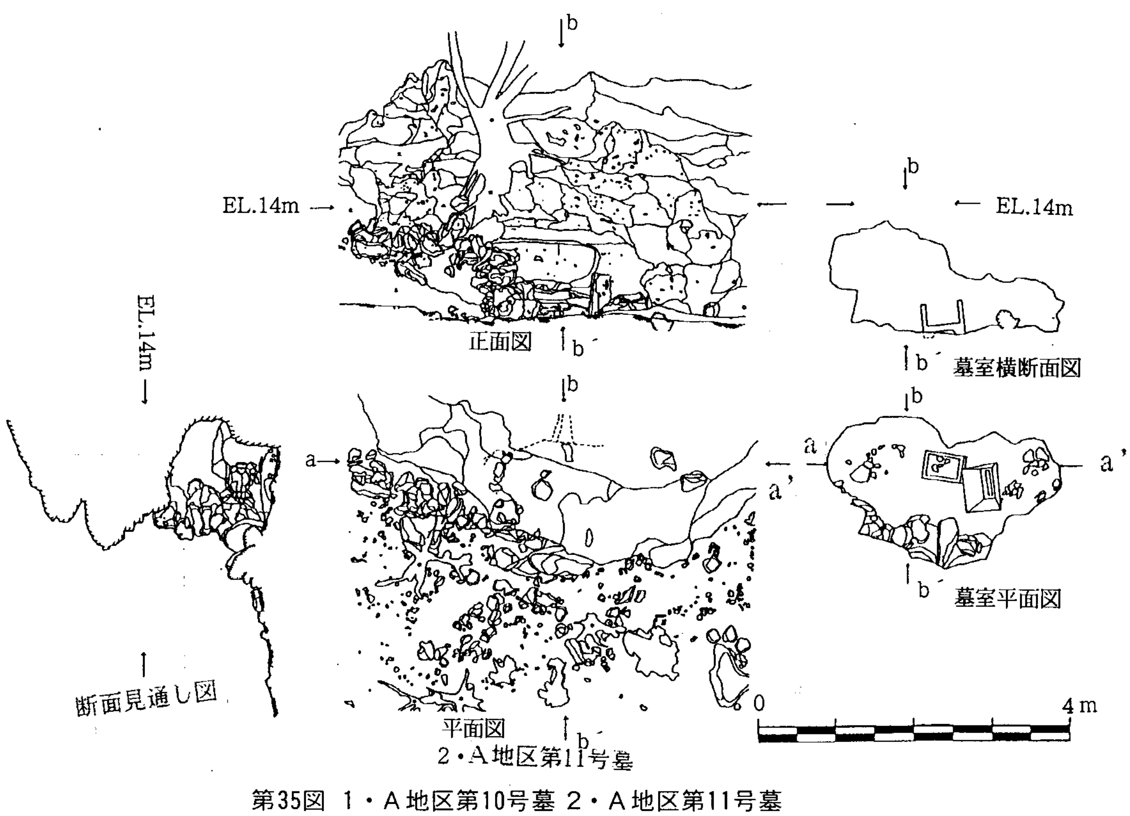
2　出土遺物

（1）納骨器（第36図）

本墓出土の納骨器は第Ⅰ類、第Ⅱ類b、第Ⅴ類の3種が得られている。1は第Ⅰ類に属するもので、口縁部が僅かに外反する短頸の壺形土器である。内外面ともヘラ仕上げされ平滑な面で、器色は灰褐色を呈する。第Ⅱ類bは2に示すもので、口縁部は外反し胴部の張りの弱い器形である。3～6は日用品の転用と考えられるもので、3は底部に孔を有する花鉢で、口縁部は「Γ」形をなす。5は肩部に耳の付く壺形で、外面に茶褐色の釉が掛けられる。6は胴下部を欠損する壺形で、口縁部を下にして使用されるものであろう。



1・A地区第10号墓

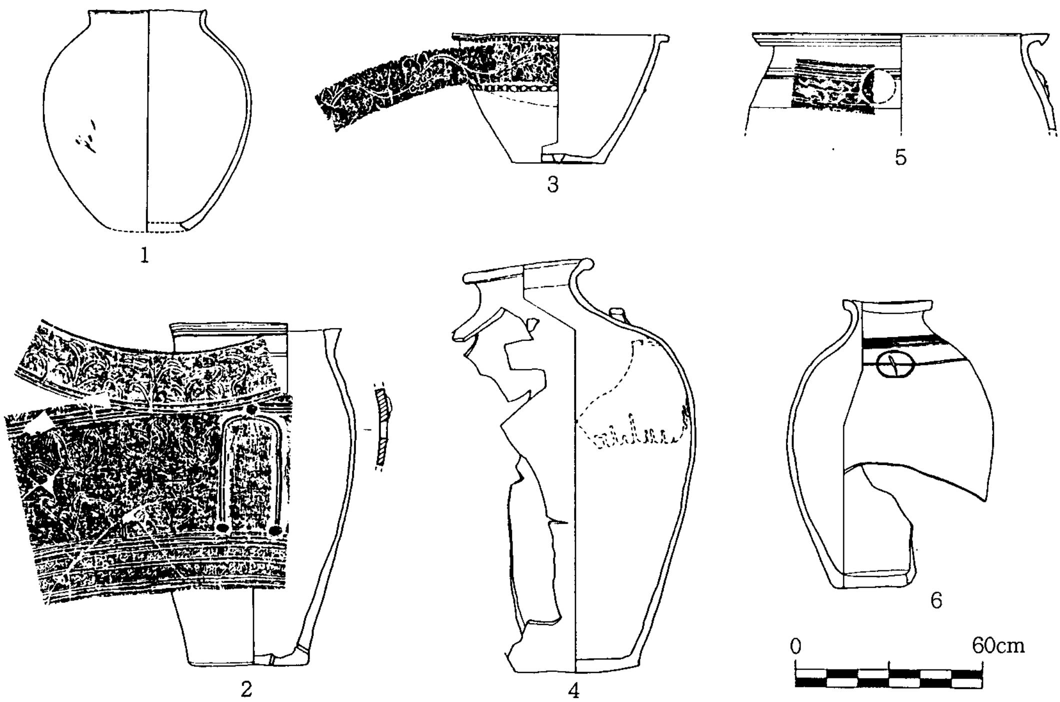


2・A地区第11号墓

第35図 1・A地区第10号墓 2・A地区第11号墓

表13　A地区第10号墓出土納骨器観察表

挿図番号	分類	資料 蓋	資料 身	法量 a	法量 b	法量 c	文様	銘書の有無
第36図1	I			19.0	35.0	13.0		無
〃 2	II－b		○	27.6	54.7	19.1	肩部に唐草状の文様、胴部には簡略された家の貼付けとハスの花、胴下部に横線と波状文を施す。	〃
〃 3	V			32.4	20.3	14.6	口縁部と胴上部に縄目状の凸帯、頸部には花文が描かれる。	〃
〃 4	〃			20.6	65.6	19.5		〃
〃 5	〃			46.4	－	－	頸部に円形の貼付け文、横線と櫛描きの波状文を施す。	〃
〃 6	〃			14.0	45.8	－	肩部に7条の横線、胴上部には1条の横線を施した後円文を描き、その中に横線と交差する沈線を施文する	〃



第36図　A地区第10号墓出土の納骨器

第11号墓

1　構　　造（第35図2）

崖下の壁面を掘削する墓で、A地区では最も高い所に位置する。墓口前面は第10号墓と一連の平場である。墓口の両側と上部のみ板状の石灰岩礫でつくり、墓口以外は自然礫が野面積みされる。墓室は横に広く掘削され奥行き1.5m、幅3.0mで、高さ左側1.3m、右側0.6mである。奥壁左にはタナを設置している。

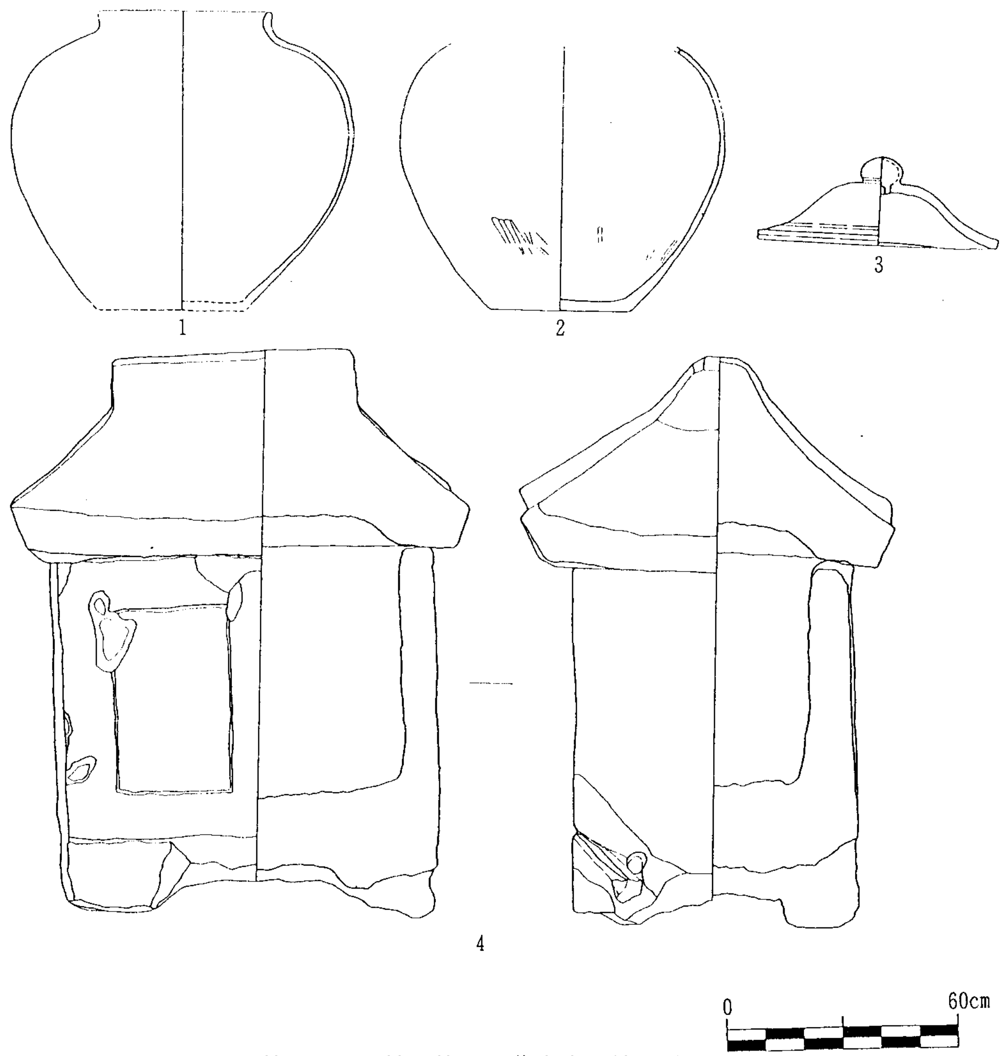
2　出土遺物

（1）納骨器（第37図）

1・2は土器で、口縁部が僅かに外反する短頸の壺形である。内外面ともヘラ仕上げされる。3は第II類aの蓋と考えられるもので、鍔の径に比して高さが低く、緩やかな器形である。頂部のつまみは断面円形をなす。4は第III類aの資料で、サンゴ石灰岩製の入母屋型式の石厨子である。蓋の内面と身の内面及び外底面には造形の際のノミ痕を明瞭に残す。

表14　A地区第11号墓出土納骨器観察表

挿図番号	タイプ	資料 蓋	身	法量 a	a'	b	c	c'	銘書の有無
第37図 1	Ⅰ			22.1		39.0	19.0		無
〃 2	〃			−		−	17.6		〃
〃 3	Ⅱ−a？	○		−		11.2	31.0		〃
		○		58.3	47.8	25.0	−		〃
			○	48.5	36.0	47.0	46.6	36.3	〃

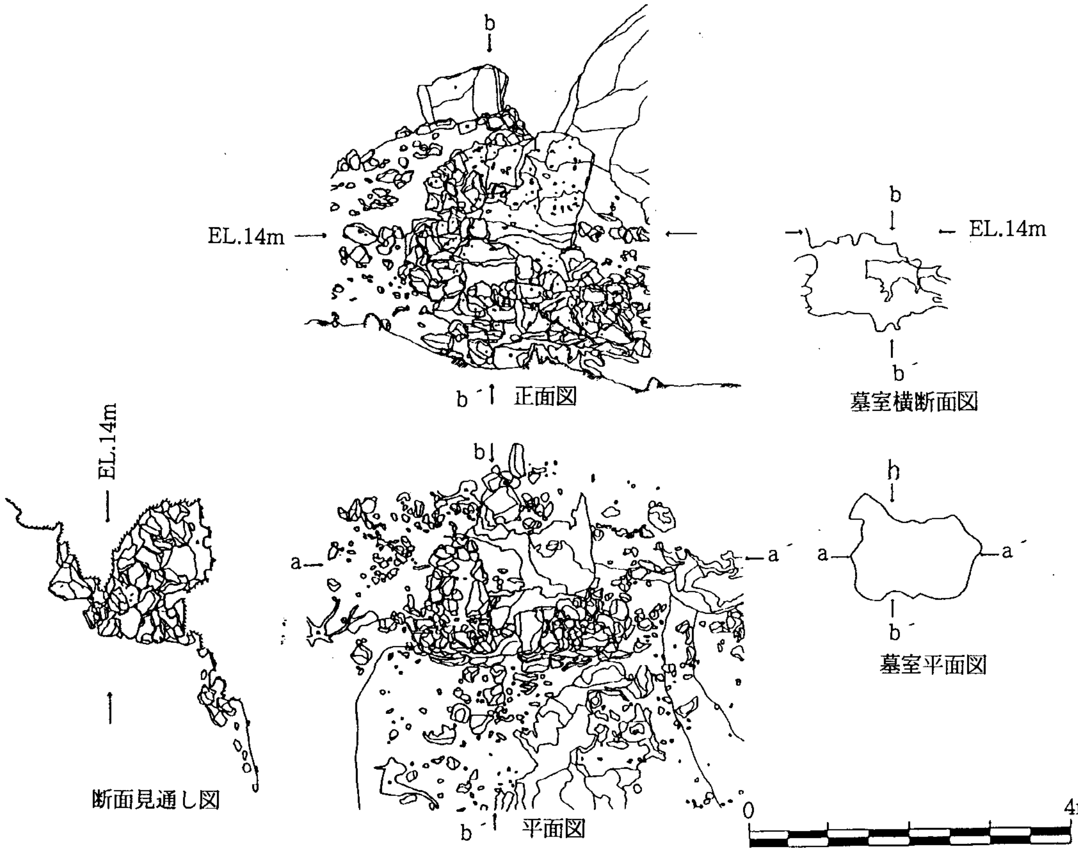


第37図　A地区第11号墓出土の納骨器

第12号墓

1　構　　造（第38図）

斜面上部に位置する岩陰を掘り込み、その周囲に石灰岩礫を野面積みするものである。墓口



第38図　Ａ地区第12号墓

は加工された礫で構成され、墓口の前には石灰岩礫が階段状に配される。墓室は奥行き1.8ｍ、幅1.4ｍ、高さ1.8ｍで、平面観は略方形状をなす。

2　出土遺物

（1）納骨器（第39図）

1・4は第Ⅱ類ａに属する資料で、1は笠状をなす蓋である。4は丸く仕上げられた口縁部は内湾する甕型で、胴の最大径は胴上部に位置する。胴上部には器面を囲繞する2条の横線を間隔を開けて施し、モチーフ化された家を横線内に貼り付けている。貼り付けの左側には「大」字が彫られる。2・3・5は第Ⅱ類ｂの資料である。2・3は蓋の上部から鍔にかけて比較的急傾斜で、鍔は水平方向に造られる。2のつまみの頂部は平坦になされる。5は第Ⅱ類ｂの資料で、口縁部は「く」字状に外反し、胴部の張りの弱い器形である。

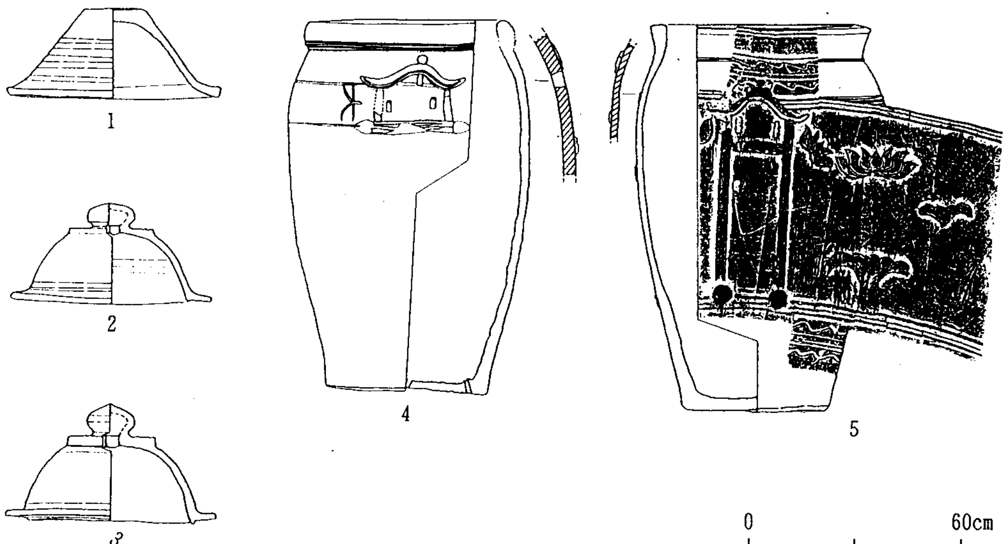
（2）その他の遺物

瑠璃釉の小盃、翡翠製品、キセルの吸い口とがん首が検出された。第40図に示したもので、1は瑠璃釉小盃、2は翡翠製品、3は緑釉陶器製のがん首、4は陶器製の吸い口である。

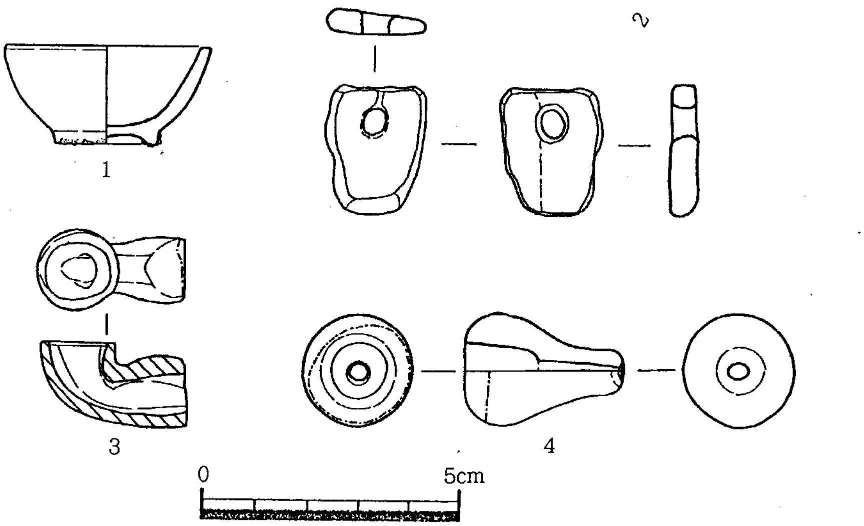
表15

表15　Ａ地区第12号墓出土納骨器観察表

挿図番号	分類	資料 蓋	資料 身	法量 a	法量 b	法量 c	銘書の有無
第39図 1	Ⅱ－ａ	○		8.0	12.3	30.4	無
〃 2	Ⅱ－ｂ	○		11.8	14.0	28.2	〃
〃 3	〃			12.2	16.2	29.8	〃
〃 4	Ⅱ－ａ		○	30.2	54.1	20.0	〃
〃 5	Ⅱ－ｂ		○	29.2	51.8	22.6	〃



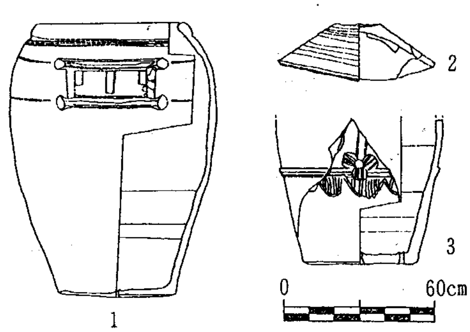
第39図　A地区第12号墓出土の納骨器



第40図 A地区第12号墓出土の瑠璃釉盃（1）、翡翠製品（2）、キセルの吸い口（3）・がん首（4）

A地区表採の納骨器（第41図）

本項で記述する資料はA地区で採集されたものの、検出墓の不明なものである。1・2は第Ⅱ類aに属する身（1）と蓋（2）の資料である。1は玉縁



第41図　A地区表採の納骨器

状をなす口縁部が内傾するもので、胴上部に簡略化された家の貼り付けが施される。口径28.0cm、器高54.2cm、底径22.5cmを測る。２は笠状をなす蓋で、焼成時に変形し、内面上部には擂鉢の破片が付着している。３は第Ⅱ類の胴下部と考えられるが、判然としないものである。横位の帯の下位に葉状の沈線文、上位には３弁の花文と上方へ伸びる帯がみられ、その左側に沈線が認められるが構図は不明である。

B地区

本地区は昭和63年７月から発掘調査を実施した嘉門貝塚（第２次）の調査区域内に所在するもので、調査の便宜上城間古墓群と合わせて調査を行った。

墓は隣接する２基の亀甲墓で、石灰岩台地を掘削して造られる半地下式の墓で、マユとヤジョーマーイのみ切り石が使われる。2基の墓は中央で側壁を共用し、後背はそれぞれの墓のヤジョーマーイの高さまで石積みされる。第１号墓は第２号墓より高く造築される。

第１号墓

1　構　　造（第42図）

東側に位置するもので、亀甲墓の構成要素が意匠され内外部とも規格された造りである。ヤジョーマーイは石灰岩礫をチジの周囲に縁取りし、漆喰で被覆される。ウーシ、クワウーシ、ヌンチャとも備わり、クワウーシの上方にはミジハイもある。マユは切り石で構成されるが、何枚用いたかは漆喰のため不明である。ツラ、ソデイシ、庭および庭囲いは石灰岩を削り出して造形され、右側の庭囲い上部のみ石灰岩礫が積まれる。門はないが、庭の北西隅に石灰岩を削り出した階段を取り付けている。ウサミデーは１段で、左奥にカビアンジが配される。

墓室は羨道から60cm下に1.4×1.5ｍのシルヒラシ、タナは左右に１段、奥に３段が造られ、他の施設は認められない。広さは奥行き2.7ｍ、幅2.5ｍで、高さは墓口側で1.6ｍ、奥で0.9ｍである。天井の横断面はアーチ状になされる。

2　出土遺物

（1）納骨器（第43図）

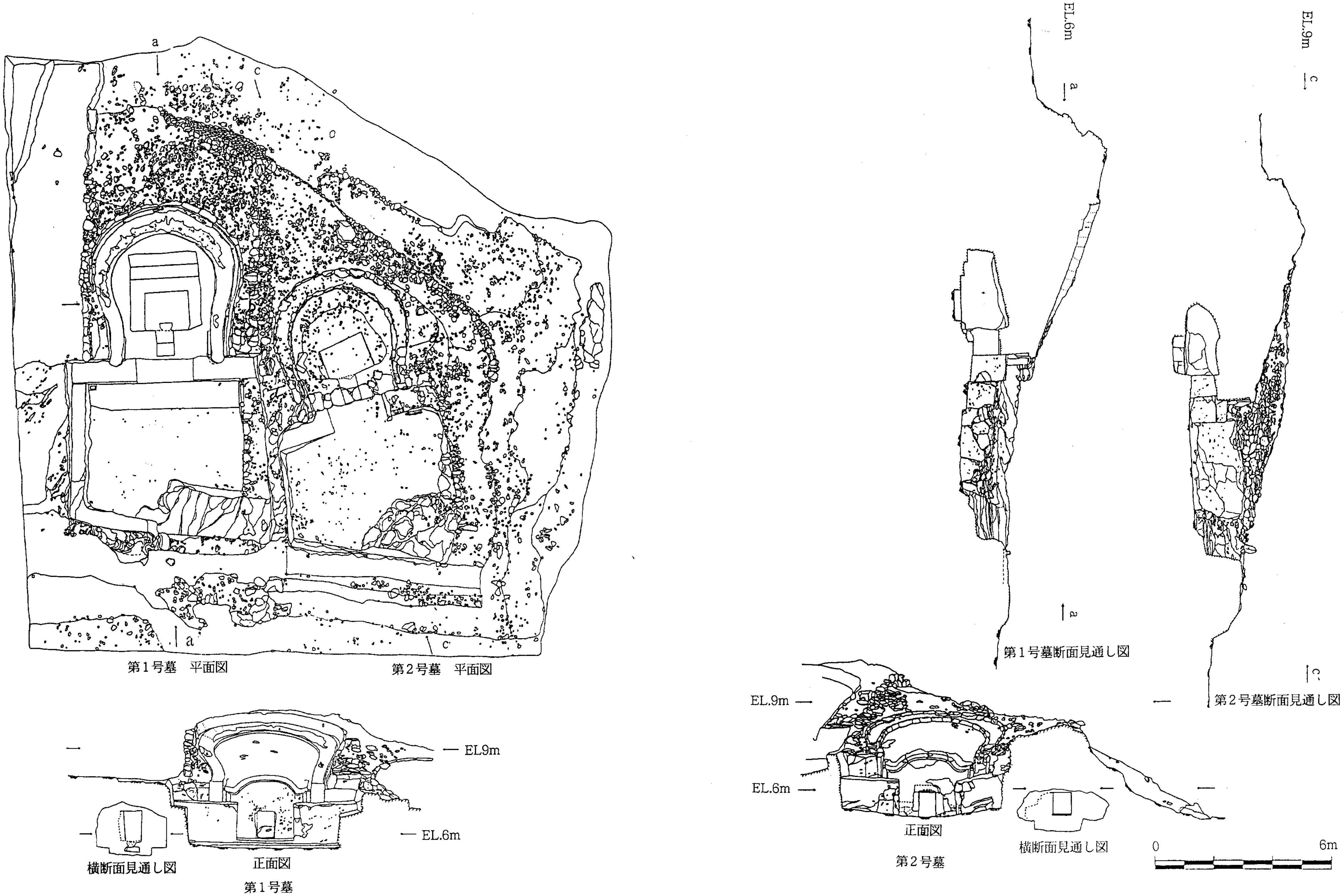
第Ⅲ類ｂの家型の厨子甕が得られている。上部の龍尾を欠損したもので、俗にソーベージーシと称されるものである。全体に白化粧を施した後、黄色釉とコバルトで彩色される。

（2）陶磁器

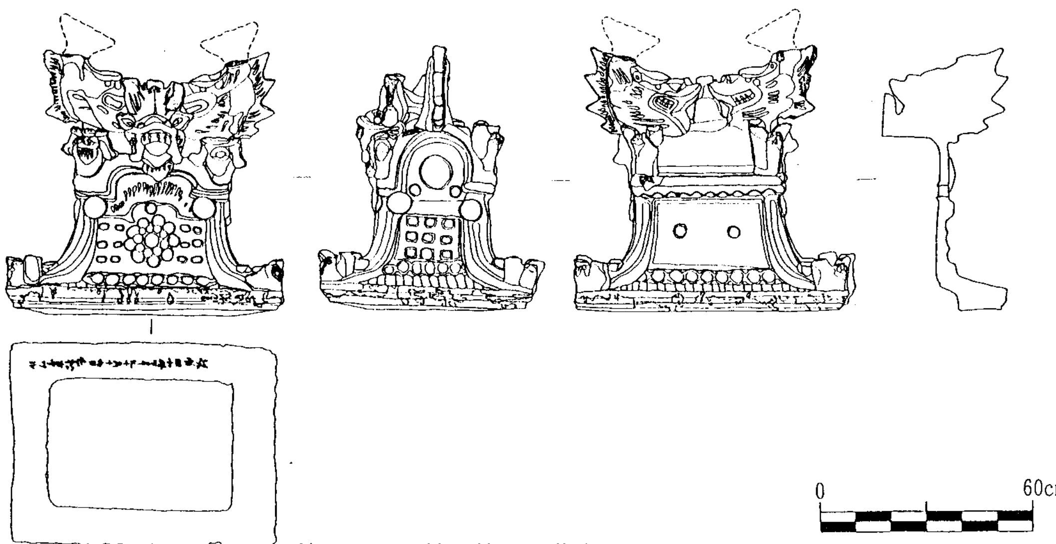
これに属するものは白磁、染付、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、陶質土器の資料が検出された。以下、順に略述する。

①白磁・染付

白磁は１点のみ検出された。第44図１に示したものである。大きさは口径4.7cm、底径1.8cm、高さ2.1cmを測る。染付も１点のみの検出で、２に示した碗の底部破片である。底径は4.3cmを測る。



第42図　B地区第1・2号墓



第43図　B地区第1号墓出土の納骨器

②沖縄産施釉陶器

沖縄産施釉陶器にもいくつもの種類があるが本地区で検出された種類全てを図示するようにした。第44図3は灰釉碗の底部資料で、内・外底部は露胎にする。底径は6.3cmを測る。4は灰釉と褐釉を掛け分けする碗の底部資料である。しかし、内底では輪状に釉を掻き取る。その他、内体下方には鉄釉による輪状の文様が認められる。畳付には白土の付着が認められる。内底の輪状露胎の外周にも白土の付着が認められる。これは重ね焼きによる痕跡と推察する。底径は6.6cmを測る。5・6は白化粧して施釉する碗で、5は外体部に褐釉で円を描き、その周囲に呉須による班点文をめぐらせるものである。底径は6.4cmを測る。6の底径は6.6cmを測る。7・8は褐釉と白化粧施釉を掛け分けするもので、7は鉢、8は碗になるものである。7は口径17.5cm、8は底径4.4cmを測る。9は褐釉を施釉する盃である。形状等から油甕の蓋と推察する。褐釉陶器はその他に3点検出されたが破片のため器種等は不明である。そのため図は省略した。

③沖縄産無釉陶器

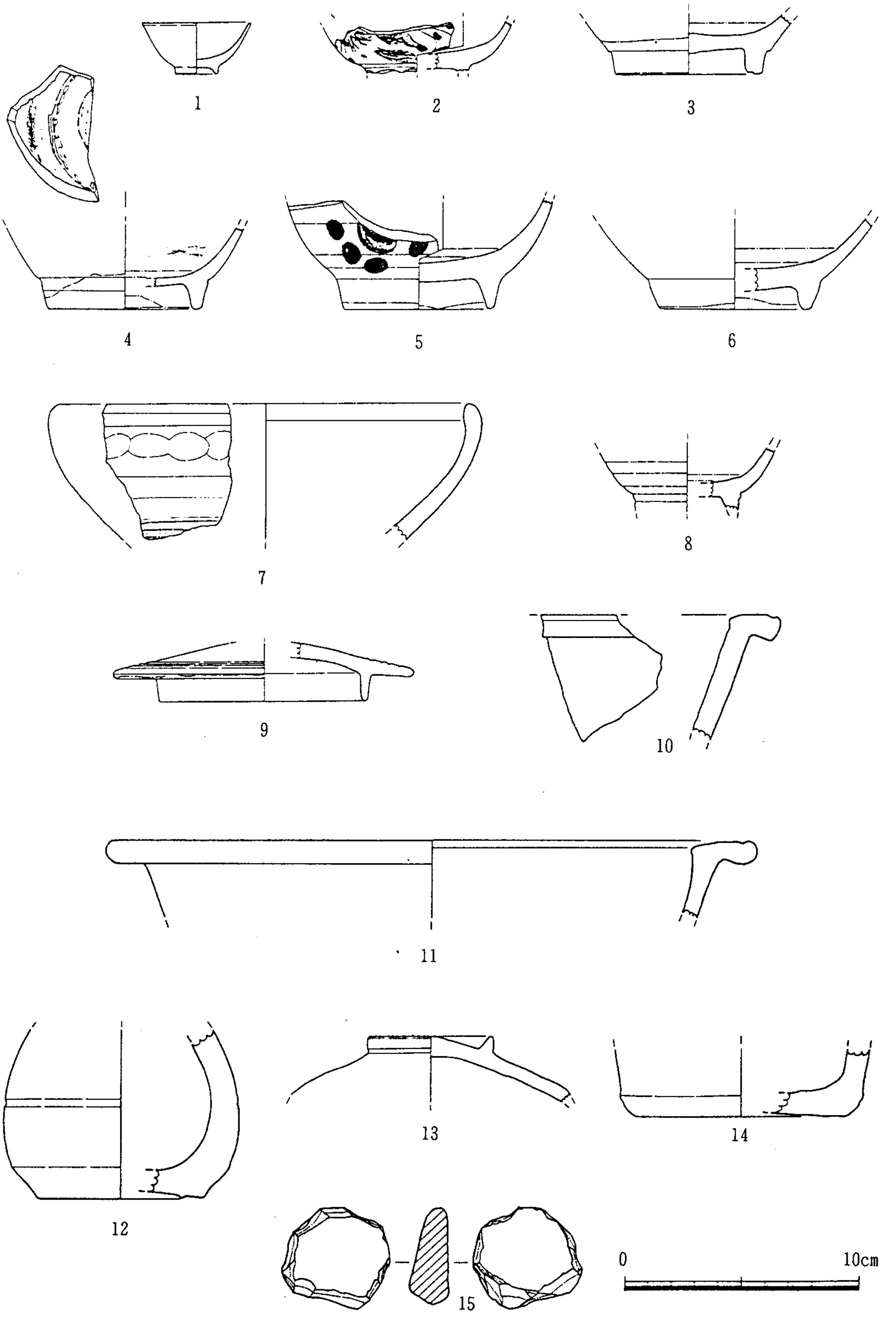
第44図10・11は鉢の口縁部破片である。11については口縁部の推定復元を試みた。口径は27.8cmを測った。12は無釉陶器の瓶が想定される胴部から底部にかけての資料である。底径は7cmを測る。沖縄産無釉陶器はその他に底部破片2点が検出された。その中の1点は擂鉢の底部である。

（3）陶質土器

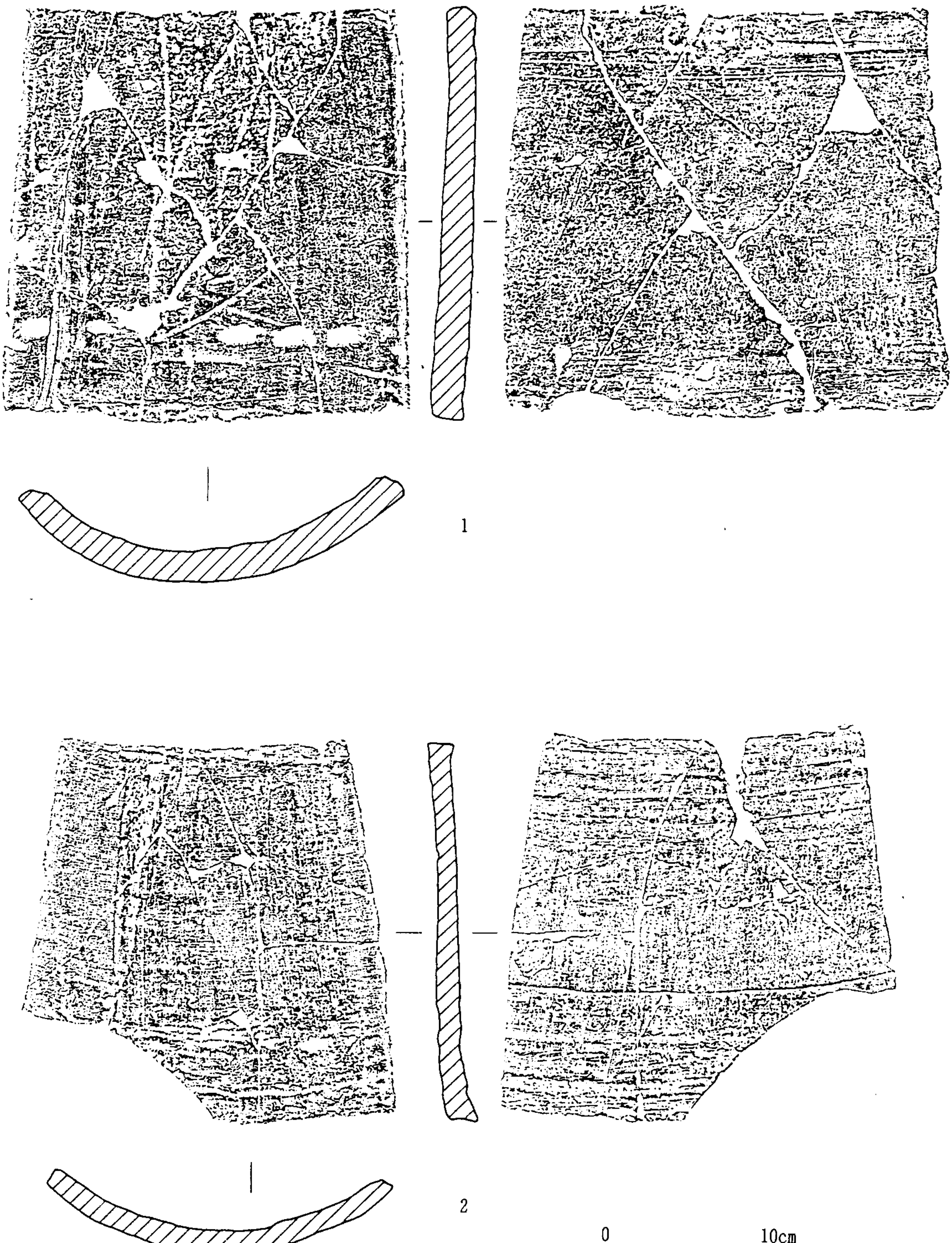
第44図13・14は陶質土器で、13は土ナベのフタと思われるものである。14は底部の資料で、円柱状の器形が推察されるが判然としない。底径は10.4cmを測る。

（4）円盤状製品

これに属するものは3点検出されたが、図示した1点を除いては未だ円形にないものであった。15は焼き締め陶器を素材としたもので、直径4.5cm、厚さ1.5cm、重さ40gを測る。



第44図　B地区第1号墓出土の陶磁器（1～12）陶質土器（13・14）円盤状製品（15）



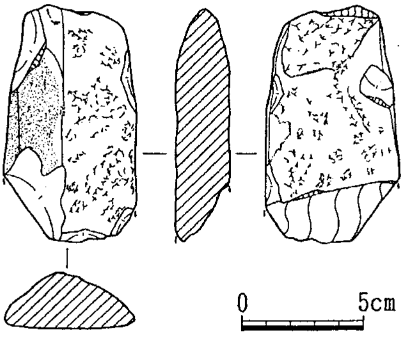
第45図　B地区第１号墓出土の瓦

(5) 瓦

瓦は平瓦のみ4点検出され、その中でも1枚の大きさが推察できる資料2点を第45図に示した。2点とも赤色を呈する瓦である。1の大きさは長さ24.8cm、幅24cm（下方）、幅22.5cm（上方)、重さ950gを測る。2の大きさは長さ22.7cm、幅16.5cm（下方）、幅22cm（上方の推定）、重さ950gを測る。

（6）石　器

第46図に図示した1点が検出された。形状からすると石斧に近似するが、全体に水摩を受けている。しかし、同石器の石質（輝緑岩）は浦添市付近では産出しないこと、一部に人為的剥離が認められることから、隣接して所在する嘉門貝塚の遺物の可能性も考える。大きさは長さ9.5cm、幅は5.4cm、重さは180gを測る。



第46図　B地区第1号墓出土の石器

第2号墓

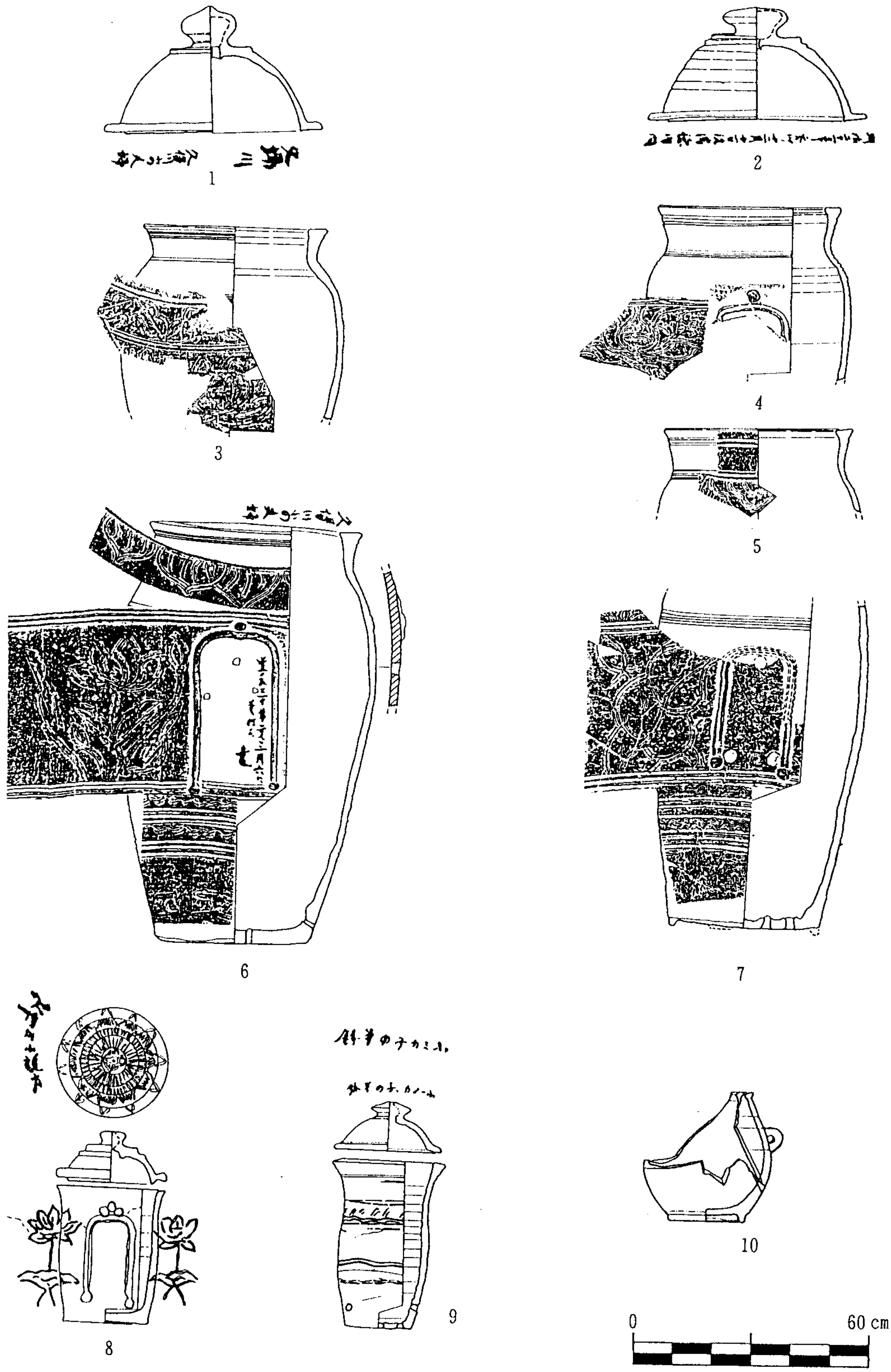
1　構　　造（第42図）

第1号墓と同じく石灰岩を掘削して造形される墓である。チジを囲むヤジョーマーイは石灰岩礫でなされ、漆喰は大部分が剥落している。チジは土が全面露出し、漆喰の小破片が散在する。ウーシ、クワウーシは存在するが、ヌンチャはみられない。マユは4個の切り石で構成される。ツラ、庭囲いとも垂直に加工されているが、風化のため所々壁面が剥落している。ウサミデーとカビアンジはみられない。庭の右側壁は岩盤の上部に礫をつみ、庭の北西隅に岩盤を削り出した石段がある。墓室の平面形は略円形を呈し、奥行き2.5m、幅2.8m、高さは中央部で1.5mを測る。シルヒラシは1.2×1.6mで、タナは周囲に1段が造られる。

2　出土遺物

（1）納骨器（第47・48図）

本墓からは第Ⅰ類を除く4類が採集された。第Ⅲ章の調査の経過で既述したとおり、露出作業中に検出された人骨入りの納骨器については所有者に引き取られており、報告するものは所有者から譲渡された厨子甕である。1・2は第Ⅱ類bの蓋で、上部から鍔にかけて急傾斜し、鍔は水平方向になされる。2の宝珠は平坦に造られる。3～7は第Ⅱ類bの身の資料でいずれも頸部で「く」字状に屈曲するもので、3・4は肩部の張る器形である。4点とも口唇部は幅広い。7は外底に3つの脚がついている。8・9は円筒形の骨壺で、8は口縁部は僅かに外反する。身と蓋は白化粧を施し、蓋の外面は青色塗料が塗られる。9は口縁部が外反するもので、器外面にはマンガンが掛けられる。10は壺形の陶器で、口縁部の半分を欠損する。第47図に示すものは第Ⅲ類bの資料で、俗にソーベージーシと称されるものである。1は身と蓋がセット



第47図　B地区第2号墓出土の納骨器

になるもので、２・３は合口の大きさや釉の違いから別個体になるものである。

表16　B地区第２号墓出土納骨器観察表

挿図番号	分類	資料 蓋	資料 身	法量 a	a'	b	c	c'	文様	銘書の有無	銘書の内容
第47図 1	Ⅱ－b	○		10.4		15.9	27.6			有	久場川／久場川の夫婦
〃 2	〃	○		11.2		14.1	27.6			有	明治二十一年亥旧ノ十二月十一日 洗骨徳内間
〃 3	〃		○	23.0		－	－		肩部に鋸歯文と唐草様の文様、胴部に蓮華文。	無	
〃 4	〃		○	23.2		－	－		肩部に葉状変形文様、胴部に簡略化された家を貼付その両側に蓮華文。	〃	
〃 5	〃		○	23.8		－	－		肩部に葉状文の変形文様。	〃	
〃 6	〃		○	26.5		53.2	14.0		肩部に葉状文、胴部には簡略化された家とその両側に蓮華文を施す。	有	道光三十年亥三月六日 とく内間妻
〃 7	〃		○	－		－	19.0		胴部は簡略化された家とその両側に蓮華文、胴下部は横線と波状文。	無	
〃 8	Ⅳ	○		6.2		6.2	14.0		中心部から放射状に文様を施す。文様は金色と銀色の塗料を使用。	有	久場川小親方
			○	13.8		17.3	10.6		簡略化された家の貼付とその両側に線彫りの蓮華文。	無	
〃 9	〃	○		3.2		6.2	13.4		胴上部に斜行の沈線と波状文、胴下部には波状文を施す。	有	鉢半の子カミ小
			○	14.2		21.5	8.2			有	鉢半の子カミ一小
〃 11	Ⅴ		○	11.8		16.6	10.0			無	
第48図 1	Ⅲ－b	○				43.2	38.0	29.8	正面に５弁の花文と屋根にシャチホコと獅子頭が配される。	〃	
			○	37.9		47.7	30.8	22.3	正面中央には簡略化された家と花文を配し、その両側には蓮華文と合掌法師像。側面も後者と同じ文様。	有	口座鉢正 死亡昭和八年旧口五月二十八日 口口二十二口口子一
〃 2	〃	○		－		43.9	46.2	34.6	正面には花弁を弧状に配し、屋根には龍頭と獅子頭が施される。	無	
〃 3	〃		○	48.7	36.1	45.5	36.5	26.3	正面には花文と蓮の花に座する合掌法師像を施す。側面にも同様な文様がみられる。	有	死亡昭和十年旧十月口口日 口口口興座鉢半 洗骨昭和十六年／旧九月二十四日

（2）陶磁器

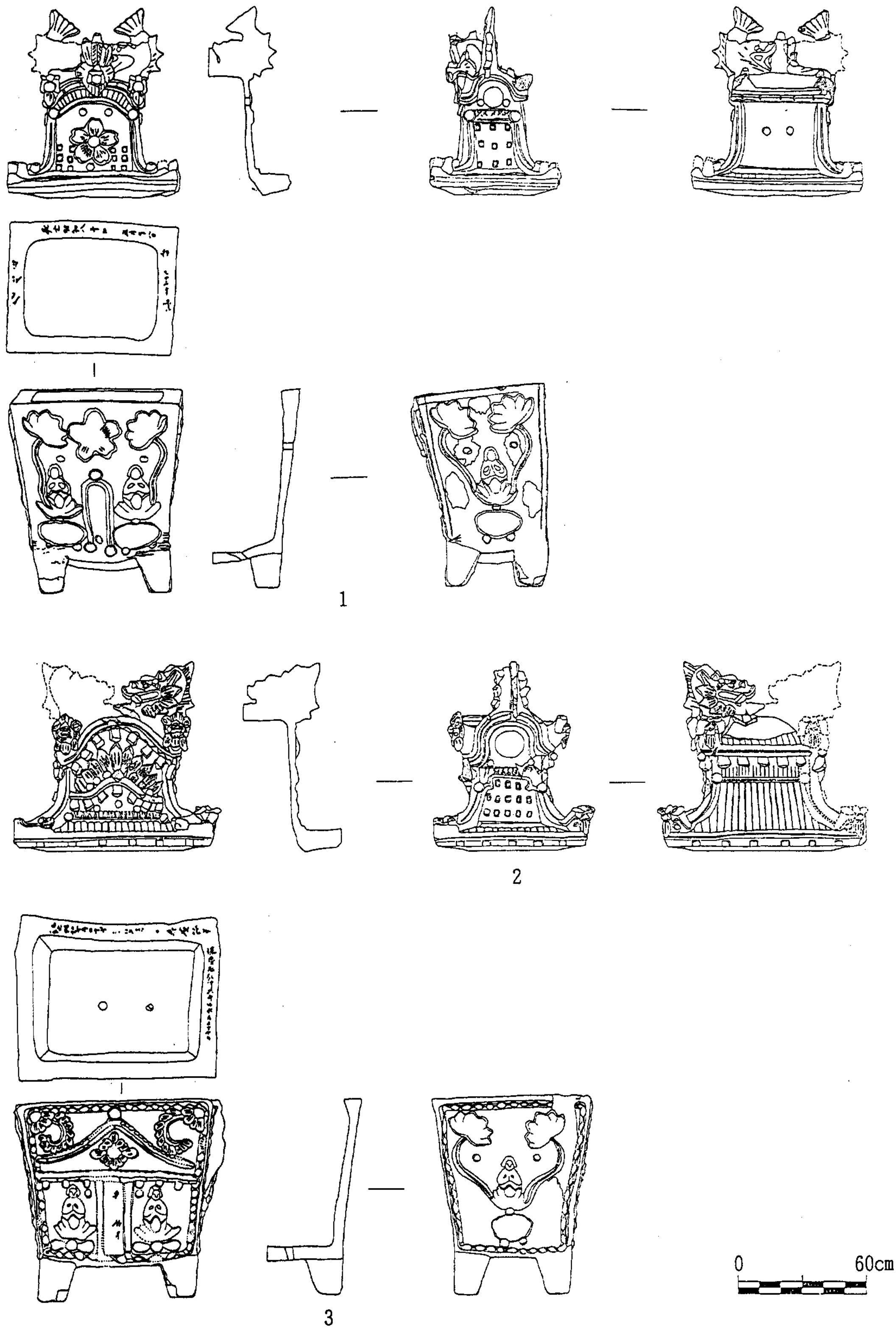
これに属するものは、染付１点、青磁１点、沖縄産施釉陶器17点、沖縄産無釉陶器６点、陶質土器５点、現代磁器６点の36点が検出された。以下、前述の36点の中から特徴的な資料に15点について略記する。

第49図１は梵字文を外体部のほぼ全面に描いていたと思われる碗の底部破片である。底径は4.1cmを測る。２は青磁碗の底部資料で、内底には印花文が認められる。高台は竹節高台で高台の内側まで施釉する。底径は5.4cmを測る。３は灰釉碗の底部破片である。体部下から口縁にかけて直線的に開く。釉は内外体の下方中途まで施釉し、底部下方は露胎にする。畳付部分には白土をぬったようすが観察できる。底径は推算6.6cmを測る。４・６・９は沖縄産の褐釉陶器である。４は甕の口縁部破片で、口径は12.6cmを測る。６は取手付きナベの口縁部破片と思われるもので、口径は19.2cmを測る。９は脚付き急須の底部破片と思われる資料で、底径は推算９cmを測る。５・７は褐釉と白粧施釉の掛け分けの鉢と思われる資料である。５は口縁部破片で口径は推算22cmを測った。７は底部破片で底径は6.8cmを測る。８も鉢の底部破片と思われるもので、褐釉を施釉する資料である。底径は推算6.7cmを測る。10は小碗で、外体部では面取をする。底径は推算４cmを測る。11は小皿の口縁部破片と思われるもので、内体部に呉須の「×」状文の横連続が認められる。12は香炉の胴部破片と思われるもので、肩部には褐釉の文様が認められる。

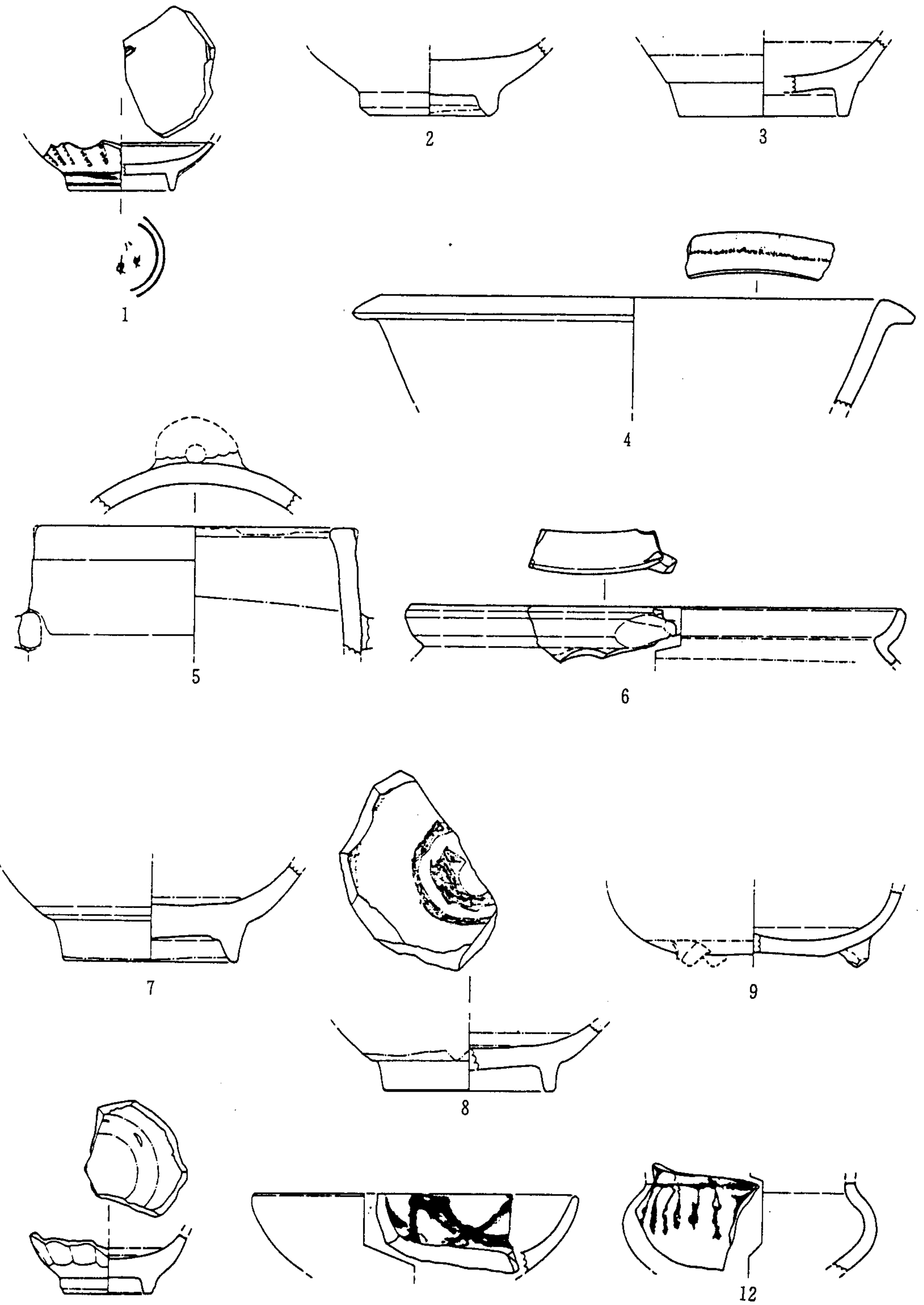
第50図１～３に図示したものは沖縄産無釉陶器の壺型の口縁部破片である。１は口径12cm、２は口径15cm、３は口径17.2cmを測る。４も沖縄産無釉陶器で鉢あるいは甕の底部と思われるものである。底径は15.2cmを測る。

（3）陶質土器

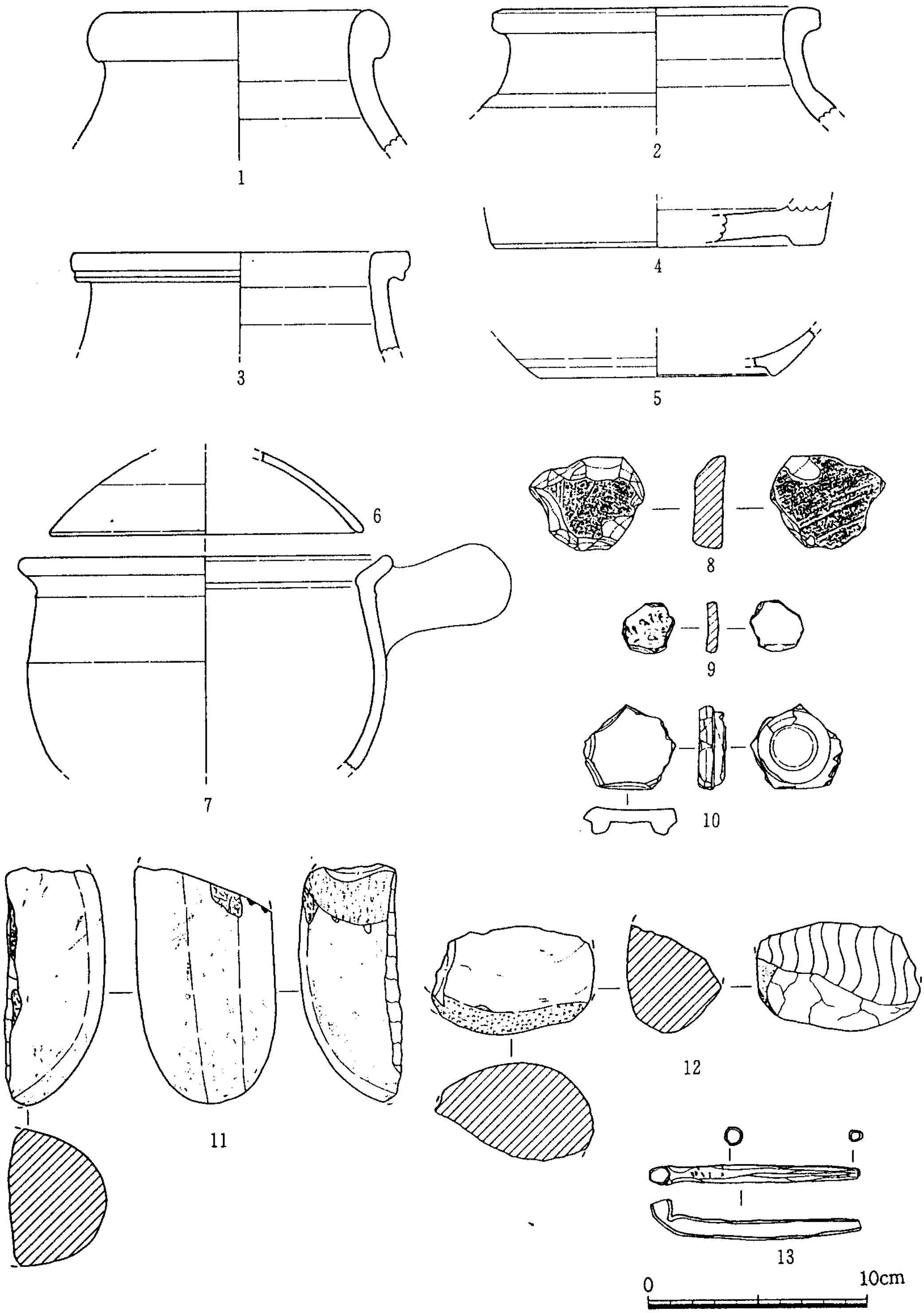
第50図５～７に図示したものは陶質土器で、５は碁笥底状につくる底部資料である。底径は



第48図　B地区第２号墓出土納骨器



第49図　B地区第２号墓出土の陶磁器



第50図　B地区第2号墓出土の陶磁器(1～4)、陶質土器(5～7)、円盤状製品(8～10)、石器(11・12) 青銅製品(13)

表17　貝類遺存体出土状況

科目	種名	番号	棲息地	A地区第5号墓			A地区第6号墓			A地区第7号墓			A地区第9号墓			A地区第10号墓			A地区第11号墓			A地区第12号墓			B地区第1号墓			B地区第2号墓			A地区 No1			合計		
				完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片
アクキガイ科	ガンゼキボラ	1	I-4-a											1																					1	
	ツノレイシ	2	I-3-a	1																														1		
アマオブネ科	アマオブネ	3	I-1-b												4																					4
	イシダタミアマオブネ	4	I-0-a										1																					1		
	オオマルアマオブネガイ	5	II-1-b															1																		1
フデガイ科	チョウセンフデ	6	I-2-c			1																														1
フジツガイ科	ホラガイ	7	I-4-a			2									17			1												1						21
	シオボラ	8	I-2-c											1																					1	
イモガイ科	アンボンクロザメ	9	I-2-c											2	2																				2	2
	ヤナギシボリイモ	10	I-2-c		2	1								1	2																				3	3
	ミカドミナシ	11	I-2-c											1	1																				1	1
	ニシキミナシ	12	I-2-c											2	2																				2	2
	ゴマフイモ	13	I-2-c			1																														1
	サラサミナシ	14	I-2-c											1													1								1	1
	マダライモ	15	I-1-a	1																														1		
	クロミナシ	16	I-2-c																														1			1
	イボシマイモ	17	I-2-a		1	2								1																					2	2
	アカシマミナシ	18	I-2-c		1																														1	
	ヤキイモ	19	I-2-c												4													1						1		4
	キヌカツギ	20	I-2-a	1											1																			1		1
	サヤガタイモ	21	I-1-a	1																														1		
	クロフモドキ	22	I-2-c		1																														1	
	サラサミナシガイモドキ	23	I-2-c		1																														1	
	イモガイ科 不明	24				4								1	6																				1	10
イトマキボラ科	イトマキボラ	25	I-2-a			4							1	1	11	1																		2	1	15
	チトセボラ	26	II-4-a			1																														1
ナツメガイ科	ナツメガイ	27	II-2-c													1																		1		
オニコブシガイ科	コオニコブシ	28	I-2-a										1																					1		
オニノツノガイ科	オニノツノガイ	29	I-2-c		2	6								17	1																				19	7
	クワノミカニモリ	30	I-1-a										1																					1		
リュウテンサザエ科	チョウセンサザエ	31	I-3-a		1	5								11	19																				1		12	25
	カンギク	32	II-1-b												1																					1
	ヤコウガイ	33	I-4-a			1									6																					7
ニシキウズ科	サラサバテイ	34	I-4-a		1	18		1						7	59												1			3					9	81
	ニシキウズ	35	I-2-a	1	2	5							2	3	2																			3	5	7
	ギンタカハマ	36	I-4-a		1	3								1																					2	3
	クマノコガイ	37	II-1-b												1																					1
ソデガイ科	マガキガイ	38	I-2-c	3	11	4							1													1								4	12	4
	スイジガイ	39	I-2-c																								1									1
	クモガイ	40	I-2-c		5	17						1		3	44															5					8	67
	イボソデガイ	41	I-2-c																									1						1		
タカラガイ科	ホシダカラ	42	I-2-c			4									3																					7
	ヤクシマダカラ	43	I-2-a		2	2																						1						1	2	2
	クチムラサキダカラ	44		1																														1		
	ハナビラダカラ	45	I-1-a										1												1			2						4		
	ハナマルユキ	46	I-3-a		2	1																					1								2	2
	ナツメダカラガイモドキ	47	I-2-a																																	
	ホソヤクシマダカラ	48	I-4-a			1																														1
	タカラガイ科 不明	49												1	1																				1	1
ウミニナ科	ウミニナ	50	II-1-b											2																					2	
エゾバイ科	シマベッコウバイ	51	II-1-b											1																					1	
陸産マイマイ類	シュリマイマイ	52	V-8											1	18																		6		1	24
	オキナワヤマタニシ	53	V-7										1	4	15						2													1	4	17
	オキナワヤマタカマイマイ	54	V-8											1	1																		3		1	4
	ウスカワマイマイ	55	V-9																														5			5
	パンダナマイマイ	56	V-8		1													2		1		1													2	2
	アフリカマイマイ	57	V-9		5	19									1			1			2														5	23
	ツヤキセル	58	V-8										2																					2		
	陸産マイマイ 不明	60																																		
巻貝不明						2									2																					4
小計				9	39	104		1				1	11	64	224	2		5		1	4	1			1	1	4	4		9			16	28	106	367
アメフラシガイ科	タツナミガイ	61	I-1-a										3																					3		
フネガイ科	リュウキュウサルボウ	62	II-2-c			2							6 4	1	5										1									6 4	1	7
	エガイ	63	I-2-a		1	1									2																				1	3
	ハイガイ	64	III-2-c										1		1																			1		1
イガイ科	リュウキュウヒバリガイ	65	I-1-a										1																					1		
	不明	66											1																					1		
マルスダレガイ科	ユウカゲハマグリ	67	II-2-c			1																														1
	ヌノメガイ	68	II-2-c	1	2 3	11								1	3														1					1	4 3	14
	ホソスジイナミガイ	69	II-1-c	1 2									2 2																		1			3 5		
ニッコウガイ科	モチヅキザラガイ	70	I-2-c		1	1									8																				1	9
	ヒメニッコウガイ	71	II-2-c												1																					1
	サメザラガイ	72	I-2-c			1							1 3		2			1																1 3		4
	リュウキュウシラトリガイ	73	II-1-c	2		1							2 1	3	19																			4 1	3	20
ツタノハ科	オオベッコウガサ	74	I-1-a										1		7																		1	1		8
リュウキュウマスオガイ科	リュウキュウマスオガイ	75	II-1-c		1	1							1	1 1	3																			1	2 1	4
	マスオガイ	76	II-2-c	1	1	1							1 2	1	7																			1 3	1 1	8
シャコガイ科	ヒメジャコ	77	I-2-a		3 3	3							4	8 6	145																			4	11 9	148
	シラナミ	78	I-2-a		3	1							5 8	16 14	45			1																5 8	19 14	47
	シャゴウ	79	I-2-a		1	3								1 1	3																				1 2	6
	ヒレジャコ	80	I-2-c	1		3							1	1	4																			1 1	1	7
	不明	81	I-2-c			31									116			2									3			1						153
シジミガイ科	シレナシジミ	82	III-0-c										1 3	3 5	4																			1 3	3 5	4
チドリマスオガイ科	イソハマグリ	83	I-1-c	1 1									14 22	1 2	4																1			15 24	1 2	4
ウグイスガイ科	ミドリアオリガイ	84	I-1-a										1	1	1																			1	1	1
	クロチョウガイ	85	I-4-a											1																					1	
ウミギクガイ科	メンガイの一種	86		1	1 1	5							8 4	1 2	25													1		1				9 5	2 3	31
ザルガイ科	カワラガイ	88	II-2-c		2 3	4							3 3	2	12																			3 3	4 3	16
	リュウキュウザルガイ	89	II-2-c	1		1							1 1	1 2	2																			1 2	1 2	3
	リュウキュウアオイガイ	90	I-1-a											1	2																				1	2
二枚貝不明	化石	91											1																					1		
	不明	92				2									5																					7
小計				4 8	14 12	73							52 60	41 36	426			4							1		3	1	1	2	2		1	57 70	56 48	509
ハイブウニ科	ハイブウニ	93	I-3-a			1																							1						1	1
合計				21	65	178	0	1	0	0	0	1	123	141	650	2	0	9	0	1	4	1	0	0	2	1	7	5	2	11	2	0	17	155	211	877

貝生息地の分類

	外洋～内湾		水深		底質
I	外洋・サンゴ礁域	0	潮間帯上部（Iではノッチ、IIではマングローブ）	a	岩板
		1	潮間帯中・下部	b	転石
II	内湾・転石地域	2	亜潮間帯上縁部（Iではイノー）	c	岩礫底、砂泥底、砂底
		3	干潮（Iにのみ適用）	d	マングローブ植物上
III	河口干潟・マングローブ域	4	礁斜面およびその下部	e	淡水の流入する礫底
IV	淡水域	5	止水		
		6	流水		
V	陸域	7	林内		
		8	林内・林縁部		
		9	林縁部		
		10	海浜域		
VI	その他	11	打ち上げ物		
		12	化石		

個体数算出は下記のように行った。

1．巻貝は殻頂部を有する貝と殻頂は欠損しているが3/4以上残存している完形に近い貝を1個体とした。
また、リュウテンサザエ科の貝は殻数／蓋数を示し、その多い方を最小個体数とした。

2．二枚貝は殻頂を有する貝を左右それぞれ集計し、その多い方を最小個体数とした。

3．巻貝・二枚貝とも、個体数を算出できる貝はなく、殻頂が欠損し破損の著しい貝だけが出土した場合に限り、1片でも数片でも1個体とした。

10.8cmを測る。6はナベのフタと思われる資料で口径は14.4cmを測る。7は把手付き土ナベで口径は17.2cmを測る。

(4) 円盤状製品

第49図8～10に示したものは円盤状製品とされているものである。8は沖縄産無釉陶器を素材に利用したもので、大きさは長径5.3cm、厚さ1.2cm、重さ35gを測る。9は型紙刷り文様の認められる磁器を素材としたもので、大きさは長径2.5cm、厚さ0.8cm、重さ4gを測る。10は現代磁器の底部資料を利用したもので、大きさは長径4cm、厚さ1.6cm、重さ22gを測る。その他にも13点検出されたが紹介を省略する。

(5) 石　器

石器は2点検出された。第49図11・12に示したもので、いずれもすり石と思われるものである。11の大きさは長さ11cm、幅5cm、厚さ6.2cm、重さ486gを測る。結晶片岩製である。12は叩き石としても利用されたと思われるもので、大きさは長さ4.5cm、幅7.2cm、厚さ5.4cm、重さ240gを測る。

(6) 青銅製品

第49図13に示した1点のみ検出された。単管からできたキセルで、大きさは長さ9.6cm、管の直径0.8cm、重さ16gを測る。

第2節　貝類依存体

今回の調査で採集された貝類依存体は30科91種が得られた。検出墓でみるとA地区第9号墓が最も多い。出土状況については表17に示すとおりである。

第Ⅴ章　総　括

前章までに調査の成果について略記してきた。地区ごとにまとめを行い、若干の考察を加え結びとしたい。

城間古墓群は本市西側の駐留軍施設の牧港補給地区内に所在し、戦後に移転が行われ大部分が空墓となっている。今回、調査対象となったのはA地区12基、B地区2基の併せて14基である。

A地区は海岸低地から石灰岩低台地へ移行する斜面で、斜面の前面は現在は道路、施設等がみられるが、試掘調査の結果から現地表面から約1.5mは埋め土、それ以下は白色の砂層で、斜面の前面が砂丘であったことが確認された。

本地区で確認された古墓は12基で、形態から岩陰囲い込み墓(3基)、岩陰掘り込み墓(5基)、掘り込み墓(4基)の3種であった。大部分の墓が移転等のためか往時の形態を残すものはなかった。従って、岩陰掘り込み墓と掘り込み墓の墓口が全面密閉するものか、半密閉するものか明確でないものが多かった。その中で、第6号墓は形態・規模が他の墓とは異なり、亀甲墓に類似する造りであった。第11号墓（掘り込み墓）と12号墓（岩陰囲い込み墓）の墓口は長方形の石灰岩礫でなされるものもあった。

出土遺物は厨子甕等の納骨器、陶磁器、陶質土器、円盤状製品、瓦、青銅製品、古銭、金属器、翡翠製品、キセルのがん首と吸い口、土器、石器、貝製品、骨製品、獣魚骨、貝類遺存体等であった。納骨器は土器、甕型厨子甕、家型厨子甕、近世の骨壺、日用品である水甕やミソ甕を転用したものが得られた。土器は胴部の張る短頸の壺型で、県内の古墓からの出土が知ら

れるものである。甕型厨子甕はボージャータイプ、マンガン掛け甕型厨子甕、マンガン掛け庇つき甕型厨子甕が検出され、マンガン掛け甕型厨子甕の出土が多かった。家型厨子甕は石製と陶器製がみられ、後者は俗にソーベージーシと称されるものである。陶磁器は15～16世紀の青磁皿から近世の磁器までの多様な資料が採集されたが、中でも沖縄産施釉陶器の出土が多い。陶質土器はナベ、鉢、碗、蓋等で量的には少なかった。金属器は第8号墓から銘入りの盃が採集されている。翡翠製品は第9・12号墓から採集された。

土器、貝製品、骨製品は第9号墓からの出土で、土器は沖縄貝塚時代早期（縄文時代早期相当）の爪形文系土器（指頭押圧文）、同前期（縄文時代後期相当）の室川式土器、同後期のフェンサ下層式土器（古墳～奈良・平安時代相当）、グスク系土器が採集された。量的には全体でも少なく、その中で爪形文系土器とフェンサ下層式土器が比較的多かった。本墓の発掘調査で層序は不明瞭であったが、爪形文系土器は下位からの出土が多い。骨製品は蝶型骨器と有孔サメ歯製品が得られている。貝製品は実用品2種35点と装飾品5種36点、用途不明2種13点で、実用品以外の製品の出土が多く目立つ。また、本墓からは表17に示す貝類依存体が採集されている。 B地区はサンゴ石灰岩台地を掘削して造形される2基の亀甲墓で、その意匠が反映された造りである。出土遺物は納骨器（マンガン掛け甕型厨子甕、陶器製家型厨子甕、骨壺、転用品）、陶磁器、陶質土器、円盤状製品、青銅製品、瓦、石器等が得られている。

最後にA地区で確認された12基の古墓は第Ⅱ章で既述したように階段状をなす斜面の下段に3基、中段に5基、上段に4基が確認され、墓の立地、出土遺物等から上段に位置する墓は時間的に古いと考えられた。墓を使用していた人々については納骨器の銘書から浦添市字城間の方々の墓域であったようである。

第9号墓からは近世の納骨器と先史時代遺物の出土があり、本墓の性格については床面からは明らかに近世に属する人骨と納骨器の出土から、近世において墓として使用されたことは窺える。また、出土した先史時代遺物の土器をみてみると爪形文系土器、室川式土器、フェンサ下層式土器、グスク系土器が得られており、各時期においてはどのような性格を有していたのか不明である。調査では発掘する地点が巨岩等の制約のため全面の調査は実施できず、その結果、炉跡、遺物包含層等いずれも確認できなかった。後述するように人骨については古人骨と考えられるものもあるが時期は特定できなかった。

《註》
1. 上原　静「グスク時代・近世出土の円盤状製品」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第10号　読谷村教育委員会歴史民俗資料館編 1986年
2. 沖縄県教育委員会「津堅島キガ浜貝塚発掘調査報告書」『沖縄県文化財調査報告書第17集』 1978年3月
3. 平成2年3月8日　金子浩昌氏の指導による。
4. 1に同じ
5. 沖縄県教育委員会「古座間味貝塚範囲確認調査」『沖縄県文化財調査報告書第30集』1982年3月
6. 新田重清・嵩元政秀「嘉手納貝塚発掘調査報告書」琉球文化財調査報告書第17集『文化財要覧』1960年
7. 沖縄県具志川市教育委員会編「地荒原貝塚-個人住宅建築工事に係る発掘調査報告書-」1986年3月
8. 沖縄県教育委員会編「カンドウ原遺跡－潅・排水にかかる緊急発掘調査」『沖縄県文化財調査報告書第58集』1984年3月

1・A地区遠景

2・A地区近景

3・A地区伐採後の状況

4・A地区第2号墓の露出作業状況

5・A地区第1号墓　発掘前

6・A地区第1号墓　発掘後

7・A地区第1号墓　墓室の遺物出土状況

8・A地区第2号墓　発掘前

図　　　　版

1・A地区第2号墓　発掘後

2・A地区第2号墓　前庭部遺物散乱状況

3・A地区第3号墓　発掘前

4・A地区第3号墓　墓室

5・A地区第3号墓　発掘後

6・A地区第4号墓　発掘前

7・A地区第4号墓　発掘後


1・A地区第5号墓　発掘前


2・A地区第5号墓　発掘後


3・A地区第6号墓　発掘前


4・A地区第6号墓　発掘後


5・A地区第6号墓　墓室の遺物出土状況


6・A地区第6号墓　墓室の遺物出土状況


7・A地区第7号墓　発掘前


8・A地区第7号墓　前庭部発掘状況

1・A地区第８号墓　発掘前

2・A地区第８号墓　発掘後

3・A地区第９号墓（西側より）

4・A地区第９号墓（北側より）

5・A地区第９号墓　墓室の状況

6・A地区第９号墓　完掘後

7・A地区第10号墓　発掘前

8・A地区第10号墓　発掘後


1・A地区第10号墓　墓室の遺物出土状況


2・A地区第11号墓　発掘前


3・A地区第11号墓　発掘後


4・A地区第11号墓　墓室の遺物出土状況


5・A地区第12号墓　発掘前


6・A地区第12号墓　発掘後


7・A地区第12号墓　墓室の遺物出土状況


8・第12号墓　前庭部の遺物出土状況

1・B地区第1.2号墓　近景

2・B地区第1.2号墓　発掘前

3・B地区第1号墓　参道

4・B地区第1.2号墓　作業状況

5・B地区第1.2号墓　発掘後

6・B地区第2号墓　西側側壁

7・B地区第1.2号墓　後壁

8・B地区第1号墓　発掘前


1・B地区第1号墓　発掘後


2・B地区第1号墓　発掘後


3・B地図第1号墓　墓室


4・B地区第1号墓　墓室（タナ）


5・B地区第2号墓　発掘後


6・B地区第2号墓　石段


7・B地区第2号墓　墓室の遺物出土状況


8・B地区第2号墓　墓室の遺物出土状況

沖縄県浦添市城間古墓群出土の近世人骨

松下孝幸・分部哲秋・佐伯和信・小山田常一

沖縄県浦添市城間古墓群出土の近世人骨

松下孝幸*・分部哲秋*・佐伯和信*・小山田常一**

【キーワード】：沖縄県浦添市、近世人骨、風葬骨、四肢骨、高身長

は じ め に

沖縄県浦添市字城間に所在する城間（グスクマ）遺跡は米軍施設の建設に伴ない、発掘調査が1987年（昭和62年）に行なわれた。この地域は石灰岩の浅い洞穴や岩陰が存在し、風葬墓が営まれており、その中におびただしい人骨が存在していた。遺跡が米軍基地内にあったため、人骨や遺構に手が付けられず、ほとんど終戦時の様相を留めており、人骨も大きな撹乱を免れていた。しかし、人骨の保存状態は概して良くなく、人骨の残存部位もかなり偏っており、頭蓋はほとんど存在していなかったが、四肢骨の量は多く、本遺跡で沖縄県の近世人の基準値のひとつを設定できる量に達している。

沖縄県では近年の発掘調査で、縄文時代や弥生時代相当期の人骨が出土しており、その特徴が次第に明らかになりつつある。しかし、沖縄県人の形質変化を明らかにするためには、単に古い時代の人々ばかりではなく、グスク時代人や近世人の特徴を解明することも必要で、このように古い時代から現代までを通しての研究がなされて初めて、本県人の形質変化やその成立を明らかにすることが可能になる。

また、人骨の残存部分から残存体数を推定することはかなり困難な作業ではあったが、出土体数は最も基本的で、基礎的資料であることから多大の時間と労力を費やし、今回検出した体数を推定することができた。なお、本人骨の形質人類学的な資料価値はかなり高く、今後の研究にとっては貴重な資料となるものである。残存人骨の人類学的観察や計測を行ない、周辺地域の比較資料と若干の検討を行なったので、その結果などを報告しておきたい。

資 料

本遺跡から出土した人骨は個体ごとに判別できる状態ではなかったので、各骨種ごとの数を算出した。表1は成人骨の、表2は幼少児骨の残存骨の数と体数である。なお、9号墓の歯は最も数の多かった上顎左側の中切歯の数で、9号墓からは上顎左側の中切歯が64本検出された

* Takayuki MATSUSHITA, Tetsuaki WAKEBE, Kazunobu SAIKI
Department of Anatomy, Nagasaki University school of Medicine
〔長崎大学医学部解剖学第二教室（主任：内藤芳篤教授）〕
** Jouichi OYAMADA
Department of Oral Anatomy, Nagasaki University school of Dentistry
〔長崎大学歯学部口腔解剖学第二講座（主任：六反田篤教授〕

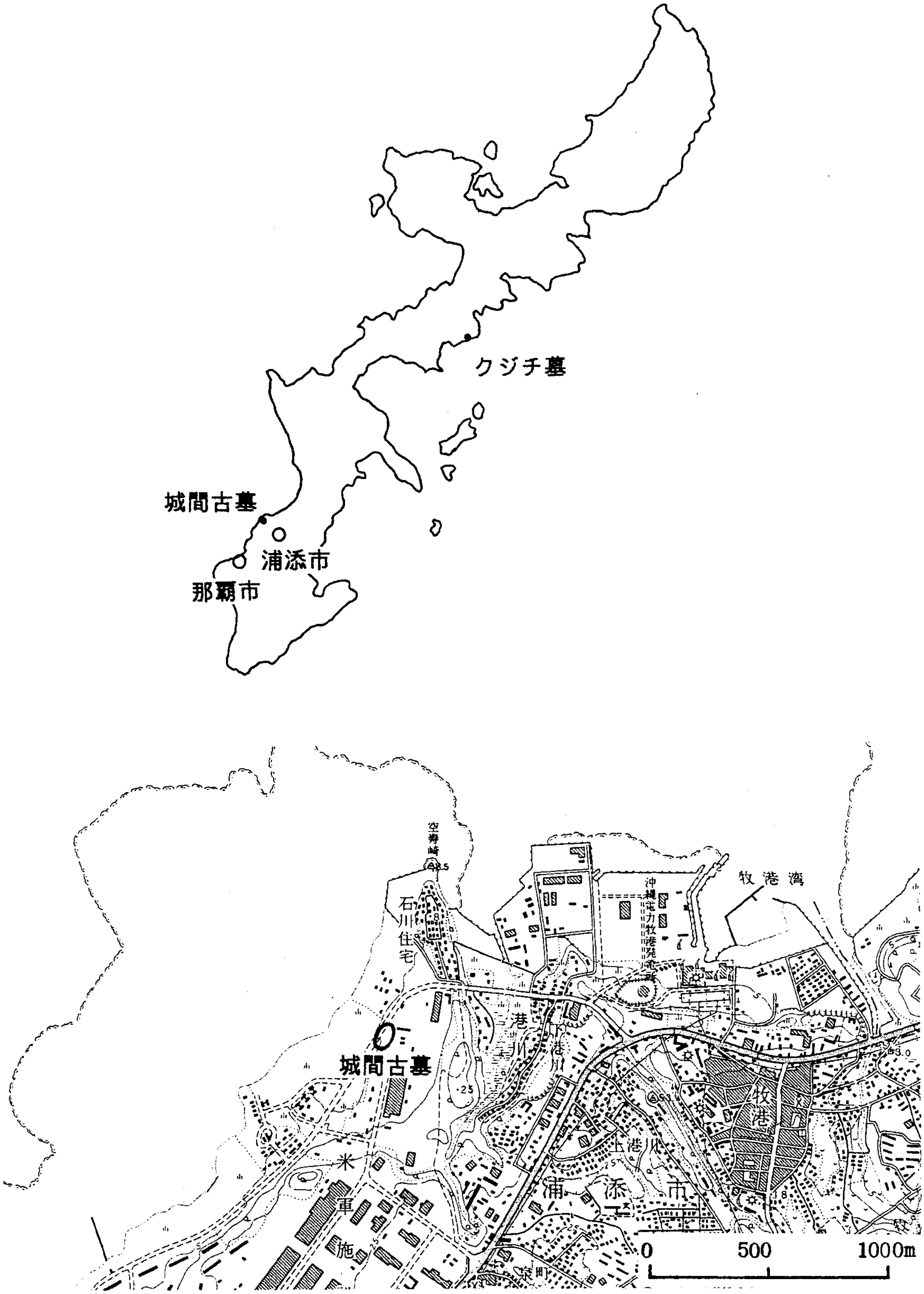


図１．遺跡の位置(Fig.1. Location of Gusukuma site,Urasoe City,
Okinawa Prefecture)

表1　出土成人骨一覧（Table 1. List of adult skeletons）

	頭蓋									上肢										下肢										歯	体数
	前頭骨	後頭骨	側頭骨		頬骨		上顎		下顎	上腕骨		橈骨		尺骨		鎖骨		肩甲骨		大腿骨		脛骨		腓骨		寛骨		膝蓋骨			
			右	左	右	左	右	左		右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左		
1号墓	1	2	1	1																			1								2
2号墓	2	1	1	2		1	1	1																							2
6号墓									1			1		1	1	1					1	2	1	1		1	2			1	3
8号墓		1							1	2	1		1	1	1		1			2	2		3		1				2	1	5
9号墓	21	16	23	26	18	21	13	13	56	47	44	30	27	35	26	12	12	23	17	21	22	19	25	18	22	11	15	23	34	64	64
9号墓西	1	2	4	1					1		2					2		3	1	2	1				1						4
9号墓南		1		1																1											2
9号墓東		1								1																					1
9号墓L	1	2		1		1	1	1	6		1	1	1	1				1													6
9号墓1層																														1	1
9号墓2層																														1	1
10号墓	1		3	4	1		2	2	2	2	4	3	3	3	3	3	3			5	5	6	5	4	6	1	2	4	4	6	6
10号墓東										1																					1
11号墓																															1*
12号墓	1	1	1				1				1	1	1	1	1					1	1	1			1					2	2
A地区																				1											1
試掘1	3	2	3	2	1	1		1	4	11	4	1	2	5	4			1		2	2	1	4	5	6	2			1	2	11
試掘10										1			1							1	1	1									2
礫層	3		1	1	2		2	1	2			1	1		2		1		1	1	1		1							3	3
合計	34	29	37	39	22	24	20	19	73	65	57	38	37	47	38	18	17	28	19	37	36	30	40	28	37	15	19	27	41	81	118

＊骨種を同定できない骨片

表2　出土幼小児人骨一覧（Table 2. List of child skeletons）

	頭蓋									上肢										下肢										歯	体数
	前頭骨	後頭骨	側頭骨		頬骨		上顎		下顎	上腕骨		橈骨		尺骨		鎖骨		肩甲骨		大腿骨		脛骨		腓骨		寛骨		膝蓋骨			
			右	左	右	左	右	左		右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左		
6号墓			1								2									1											2
8号墓							1	1		1	1	1	2	2	2				1	3	1	2	1	1	1	1	2				3
9号墓	2							1	2	2	2	2	1		2					3		2	1				1	1	4	6	6
9号墓L							1																								1
10号墓	3						1	1		1										1		1			1					1	3
試掘1										1		1								1	1										2*
礫層															1															1	1
合計	5		1				3	3	2	5	5	4	3	2	5				1	9	2	5	2	1	2	1	3	1	4	8	18

＊大腿骨で幼児と小児Ⅰの個体を確認できたので２体とした。

ことを意味している。また、表３は残存体数の性別の内訳である。ただし、９号墓の体数は歯から算出したものであるが、歯の性別決定は困難であったので、その次に多い上顎骨から推定したところ、男性21個、女性29個、性別不明は６個で、また、上腕骨から推測すれば、右側47本のうち男性は22本、女性は23本、左側44本中男性は21本、女性は22本となり、結局、９号墓からは少なくとも、22体の男性と29体の女性を検出したことになる。

すなわち、今回の調査では少なくとも成人骨が118体、そのうち男性骨が44体、女性骨は50体、幼少児骨は18体で、合計136体分の人骨が検出された。

この136体の人骨は、別稿で述べられているように、考古学的所見より、近世に属する人骨群であると考えられる。しかし、なかには骨質が厚く、古い形質が認められるものもあるようであるが、各骨毎に所属時代を確定することは現状では困難である。従って、本報告書では一応近世人骨として一括して平均値を算出した。少し特異な人骨に関しては、今後さらに研究、検討を重ね、別の機会に報告することにしたい。

計測方法は、Martin-Saller(1957)によった。また、脛骨の横径はオリビエの方法で計測し、歯種の同定は小山田が行なった。なお、本稿は成人骨に関しては松下、佐伯が、幼少児骨は分部がそれぞれ分担した。

未成人骨の年令は、歯が残存しているものについては、藤田（1965）による現代人の歯の崩

表3 出土体数（Table 3. Number of materials）

	成人			幼小児	合計
	男性	女性	不明		
1号墓	1	0	1	0	2
2号墓	0	0	2	0	2
6号墓	1	2	0	2	5
8号墓	2	3	0	3	8
9号墓	22	29	13	6	70
9号墓西	2	1	1	0	4
9号墓南	1	0	1	0	2
9号墓東	1	0	0	0	1
9号墓L	3	2	1	1	7
9号墓1層	0	0	1	0	1
9号墓2層	0	0	1	0	1
10号墓	3	3	0	3	9
10号墓東	1	0	0	0	1
11号墓	0	0	1	0	1
12号墓	1	1	0	0	2
A地区	0	1	0	0	1
試掘 1	4	7	0	2	13
試掘10	1	1	0	0	2
礫層	1	0	2	1	4
合 計	44	50	24	18	136

出時期を用いて、現代と弥生時代のそれが大差ないと仮定したうえで推定し、歯が残っていないものについては、化骨の状態と骨の大きさからおよその年令を推定した。年令区分は、佐賀県大友遺跡出土の幼少児骨（分部、1981）の報告と同様の区分とし、幼児が0－5才（生後1ケ月未満は新生児、1歳未満は乳児）、小児Ⅰ期が6－11才、小児Ⅱ期が12－15才、成年が16－20才である。

なお、今回比較資料として用いたのは、沖縄県のクジチ近世人（松下・他、1988）、鹿児島県松之尾中・近世人（松下、1981）、成岡・西ノ平中・近世人（松下・他、1983）、与論島の近世・近代人（松下・他、1988）、与論島の近代人（大山、1956、平田、1958、広沢、1959）、熊本県天草の桑島近世人（脇、1970、立志、1970）で、その他に推定身長に関しては九州の弥生人群を用いた。

所　見

1．頭　蓋

頭蓋の保存状態は悪く、また残存量も少ない。残存している頭蓋には明らかに現代か近代のものが含まれているが、観察できたものは概して骨壁が厚く、縫合も簡単であり、古い時代のものも存在する可能性があるようである。外耳道は右側19例、左側22例の観察ができたが、骨腫を認めたものは1例も存在しない。

頭蓋に関しては、比較的保存が良かった「9号墓－1号頭蓋」と「試掘1－1号頭蓋」について記載する。

9号墓－1号頭蓋（男性、熟年）

脳頭蓋のみである。骨壁は著しく厚く、堅牢で、重い。外後頭隆起の発達は良さそうで、乳様突起は大きく、長い。また、眉間と眉上弓の隆起は強い。外耳道骨腫の有無は不明である。縫合は三主縫合とも内板は癒合閉鎖していたのではないかと思われるが、外板はまだ部分的に開離している。

脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が187mm、頭蓋最大幅は142mmで、頭蓋長幅示数75.94となり、頭型はmesokran（中頭）の下限に属している。

性別は、眉間と眉上弓の隆起が強く、外後頭隆起の発達も良さそうなことから男性と推定し、年令は、縫合の癒合程度から、熟年と推定した。

試掘1－1号頭蓋（女性、壮年）

これも骨壁は著しく厚く、堅牢で、重量感がある。外後頭隆起の様態は不明である。乳様突起はきわめて小さい。眉上弓の隆起は弱く、前頭結節の発達は良好である。左側外耳道の観察が可能であるが、外耳道が異常に狭くなっており、鼓室部が融解したような様態を呈している。縫合は、三主縫合のうち矢状縫合とラムダ縫合は内外両板とも開離しているが、冠状縫合は内板が癒合し、外板はわずかに開離状態である。

脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が計測できる程度で、その値は170mmで、後頭骨は頭頂部で下方へおれている。また、観察したところでは頭蓋最大幅は大きそうで、従って頭型は短頭型と考えられる。

性別は、眉上弓の隆起が弱く、前頭結節の発達が良好であることから女性と推定した。また、年齢は縫合の状態から壮年と考えられる。

2．四 肢 骨

（1）上肢骨

①　上腕骨

男性は太くて頑丈で、三角筋粗面の発達も良好なものが存在するが、平均値的には骨体の太さはそれほど大きくはない。長さもあまり長くないようであるが、なかには長いことが予想さ

れるものも存在する。女性は男性とはかなり対照的に細かいものが目立つ。

男性の計測値は、最大長が298.33mm（左）骨体最少周は62.64mm（右)、61.80mm（左)、中央周は67.46mm（右）、66.44mm（左）で、長厚示数は20.86（左）である。また、中央最大径は23.73mm（右)、23.53mm（左)、中央最小径は17.09mm（右)、17.25mm（左）で、骨体断面示数は71.88（右)、73.93（左）となり、骨体は扁平である。

女性の計測値は、最大長が283.00mm（左）骨体最少周は55.35mm（右)、53.87mm（左)、中央周は57.69mm（右)、56.47mm（左）で、長厚示数は19.80（左）である。また、中央最大径は20.00mm（右)、19.60mm（左)、中央最小径は14.69mm（右)、14.40mm（左）で、骨体断面示数は73.58（右)、73.74（左）となり、女性の骨体も扁平である。

（2）下 肢 骨

①大腿骨

男女とも骨体の径はやや細く、また、粗線の発達も悪いが、なかには骨体に柱状性が認められるものも存在する。なお、骨体上部は扁平である。

計測値は、最大長が419mm（右）、骨体中央周は85.00mm（右）、82.92mm（左）で、長厚示数は21.20（右）である。骨体中央矢状径は27.18mm（右)、26.00mm（左）、横径は26.00mm（右)、26.54mm（左）で、骨体中央断面示数は105.49（右)、98.31（左）となり、右側の示数値はやや大きいものの、左側は100.00よりも小さくなり、粗線や骨体両側面の後方への発達はきわめて悪い。また、上骨体断面示数は73.58（右）、74.41（左）となり、骨体上部は両側とも扁平である。

女性の計測値は骨体中央矢状径が23.25mm（右）、23.63mm（左）、横径は22.94mm（右)、23.78mm（左）で、骨体中央断面示数は101.61（右)、100.05（左）となり、粗線や骨体両側面の後方への発達はやはり良くない。骨体中央周は73.07mm（右)、74.38mm（左）で、骨体は細い。また、上骨体断面示数は75.70（右)、76.13（左）となり、男性ほどではないが、やはり骨体上部は扁平である。

②脛 骨

男性の計測値は、脛骨最大長が341.50mm（右)、333mm（左）で、長さは短く、骨体周は78.64mm（右)、79.60mm(左)で、最小周は72.90mm(右)、73.77mm(左)、骨体は細く、長厚示数は20.79(右)、22.82(左)である。中央最大径は28.80mm(右)、29.55mm(左)、中央横径は20.29mm(右)、20.90mm（左）で、中央断面示数は70.17(右)、70.81(左)となり、骨体は近世人としてはやや扁平である。

女性の計測値は、脛骨最大長が300.00mm（左）、骨体周は70.60mm（右）、71.71mm（左）、最小周は64.60mm（右）、65.40mm（左）で、骨体は細いが、長さが短いので、長厚示数は23.19（左）とやや大きい。中央最大径は26.00mm（右)、26.13mm（左）、中央横径は18.30mm（右）、18.86mm（左）で、中央断面示数は70.61（右）、71.13（左）となり、男性同様、骨体は近世人

としてはやや扁平である。

3．推定身長値

四肢長骨の最大長から算出した推定身長は表11に示すとおりである。Pearsonの式から算出した推定値では、男性は上腕骨からは156.98cm（左側）、橈骨からは162.25cm（右側）、160.18cm（左側）、大腿骨からは160.08cm（右側）、脛骨からは159.81cm（右側）、159.92cm（左側）となり、上腕骨からは低めに、右側橈骨からは高身長になるが、左側橈骨、大腿骨および脛骨からはほぼ同じ値で、160cm程度である。一方、女性は上腕骨からは149.42cm（左側）、橈骨からは150.93cm（右側）、152.77cm（左側）、脛骨からは146.63cm（左側）となる。左側脛骨からは低身長になるが、上腕骨と橈骨からは150cm程度となり、やはり高身長傾向がうかがえる。すなわち、男女とも高身長を示す値が出ており、薩南諸島の弥生人のような著しい低身長ではない。

4．抜歯・先天的欠損

上顎骨歯槽突起の観察を行なったが、抜歯の疑いがあるものは存在しなかった。しかし、下顎については両側の中切歯を抜去した疑いの強いものが1例（9－52、女性）存在し、この下顎骨は骨質も堅牢で、新しい時期を予想させる特徴は認められない。また、歯槽の状態から下顎の中切歯が両側とも先天的に欠損していたのでないかと思われるのが1例（9－7、女性）存在した。

5．病理学的所見

脛骨と腓骨には病変が認められたが、数は前者の方が多く、骨組織の粗密化や異常な肥厚が認められ、慢性炎症性疾患を思わせる特徴がみられた。このような所見は沖縄県の宜野座村のクジチ墓や鹿児島県の松之尾遺跡から出土した近世人骨、中・近世人骨に認められたものと同じものである。また、上腕骨には骨折が、下顎骨には歯周疾患などが認められた。これらの病的所見に関しては、稿を改めて別の機会に報告したい。

考　　　察

1．頭　　蓋

頭蓋に関しては、頭型を明らかにできたものがわずか男女各1例づつあっただけである。男性の頭蓋長幅示数は75.94となり、中頭の下限を示している（表4）。宜野座村のクジチ近世人は83.90で、短頭型である。与論島や鹿児島県本土でも中・近世人は中頭型か長頭型であるのに反し、沖縄ではクジチ近世人が短頭であったことから、本県では頭型でも特異な状況にあるのかもしれないと考えた。しかし、本例が中頭の下限であることから、近世人の頭型に関しては沖縄県での地域差を検討するなど、もう少し詳しく研究する必要がある。

一方、女性は計測できなかったが、観察できた1例は短頭に傾いていた。クジチ近世人の、頭蓋長幅示数は78.96、与論島の近世・近代人は80.51、与論島近代人は78.03、松之尾中・近世

人は74.74であり、南島でも変異がやや大きいようである。

表4 脳頭蓋計測値（男性、mm）（Table 4. Comparison of male calvarial measurements and indices）

		城間 近世人 (松下・他)		クジチ 近世人 (松下・他)		与論島 近世・近代人 (松下・他)		与論島 近代人 (大山)		松之尾 中・近世人 (松下)		成岡・西ノ平 中・近世人 (松下・他)		桑島 近世人 (脇)		天福寺 近世人 (中橋)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	頭蓋最大長	1	187	3	174.00	46	184.11	37	185.33	11	185.18	1	177	13	180.13	38	182.6
8.	頭蓋最大幅	1	142	3	145.67	46	142.26	38	142.84	12	138.42	1	135	13	131.02	38	138.6
17.	バジオン・ブレグマ高		–	1	140	34	137.32	33	136.48	7	137.43		–	11	135.88	33	139.2
8/1	頭蓋長幅示数	1	75.94	3	83.90	45	77.32	37	77.31	11	74.91		–	13	72.74	37	76.0

2．四肢骨

①上腕骨

まず、上腕骨から左側の計測値の平均値を周辺地域の近世人などと比較検討してみた。表5に示すように、上腕骨最大長は298.33mmで、桑島近世人、与論島近世人より大きいが、クジチ近世人の307.50mmよりは小さく、西北九州近・現代人と大差なく、成岡・西ノ平近世人の平均値にほぼ一致する。中央周は66.44mmで、松之尾中・近世人よりは大きいが、成岡・西ノ平近世人、桑島近世人よりは小さく、与論島近世人、西北九州近・現代人に近く、クジチ近世人にほぼ一致する。また、骨体最小周は61.80mmで、成岡・西ノ平近世人、桑島近世人、西北九州近・現代人および与論島近世人よりは小さく、松之尾中・近世人、クジチ近世人に近い。長厚示数は20.86となり、松之尾中・近世人よりはわずかに大きく、桑島近世人および西北九州近・現代人よりは小さく、比較的クジチ近世人、与論島近世人に近い。骨体断面示数は73.93で、成岡・西ノ平近世人よりも大きいが、その他の資料よりは小さく、骨体は扁平である。すなわち、平均値的には男性上腕骨は長さの割には骨体の径は細く、この点は同じ沖縄県のクジチ近世人と同じ傾向を示しているが、骨体はより扁平である。

表5 上腕骨計測値（男性、右、mm）（Table 5. Comparison of measurements and indices of male right humeri）

		城間 近世人 (松下・他)		クジチ 近世人 (松下・他)		与論島 近代人 (広沢)		松之尾 中・近世人 (松下)		成岡・西ノ平 中・近世人 (松下・他)		桑島 近世人 (立志)		西北九州 近・現代人 (八木)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	上腕骨最大長	3	298.33(左)	2	307.50	15	295.03	6	299.83		–	11	293.17	72	296.35
2.	上腕骨全長	3	294.67(左)	2	306.00	15	290,70	6	297.00		–	11	291.23	72	290.35
5.	中央最大径	15	23.53(左)	6	22.83	15	23.47	6	21.33	1	24	16	22.00	72	23.56
6.	中央最小径	16	17.25(左)	6	17.17	15	17.60	6	15.83	1	17	16	16.69	72	17.68
7.	骨体最小周	15	61.80(左)	7	61.86	15	63.53	17	60.24	1	66	15	66.22	72	65.53
7(a).	中央周	16	66.44(左)	6	66.83	15	67.33	6	62.00	1	71	15	71.28	72	68.78
6/5	骨体断面示数	14	73.93(左)	6	75.50	15	75.07	6	74.44	1	70.83	16	75.90	72	75.06
7/1	長厚示数	3	20.86(左)	2	20.01	15	21.52	6	19.32		–	10	22.39	72	22.10

一方、女性の計測値は上腕骨最大長が283.00mmで、表6では最も長い。中央周は57.69mmで、これは桑島近世人よりは小さいが、その他の平均値とは大差なく、この値はかなり安定している。骨体最小周は55.35mmで、桑島近世人の57.7mmよりわずかに小さく、また、クジチ近世人の52.00mmよりもわずかに大きい以外は、与論島近世人、松之尾中・近世人、成岡・西ノ平近世人

および西北九州近・現代人と大差ない。すなわち近世人女性の上腕骨の周径は比較的安定しているようである。長厚示数は19.80で、これは表6では最小値となり、女性上腕骨はきゃしゃであることがうかがえる。骨体断面示数は73.58となり、クジチ近世人の69.20より大きいが、桑島近世人、与論島近世人よりは小さく、松之尾中・近世人、西北九州近・現代人と大差ない。すなわち、女性上腕骨は長さがやや長く、骨体がその割には細く、骨体は比較的扁平な上腕骨である。

表6 上腕骨計測値（女性、右、mm）(Table 6. Comparison of measurements and indices of female right humeri)

		城間 近世人 (松下・他)		クジチ 近世人 (松下・他)		与論島 近代人 (広沢)		松之尾 中・近世人 (松下)		成岡・西ノ平 中・近世人 (松下・他)		桑島 近世人 (立志)		西北九州 近・現代人 (八木)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	上腕骨最大長	2	283.00(左)		−	17	272.39		−		−	6	274.9	44	273.35
2.	上腕骨全長	2	277.50(左)	1	251	17	268.80		−		−	6	272.9	44	268.60
5.	中央最大径	13	20.00	4	20.25	17	20.06	4	19.75		−	6	18.5	44	20.20
6.	中央最小径	13	14.69	4	14.00	17	15.18	4	14.50		−	6	14.4	44	14.91
7.	骨体最小周	20	55.35	3	52.00	17	54.41	4	54.25	1	55	6	57.7	44	55.93
7(a).	中央周	13	57.69	4	57.50	17	57.71	4	57.75		−	6	60.9	44	58.48
6/5	骨体断面示数	13	73.58	4	69.20	17	75.85	4	73.49		−	6	78.27	44	73.84
7/1	長厚示数	2	19.80(左)		−	17	20.10		−		−	6	21.00	44	20.47

②大腿骨

表7は周辺地域の近世人骨などとの比較表である。最大長は1例のみの値が419mmで、表2に掲げたどの比較群よりも長い。骨体中央周は82.92mmで、桑島近世人の80.61mmよりは大きく、成岡・西ノ平近世人の90.33mm、クジチ近世人の86.17mmよりは小さく、与論島近世人、松之尾中・近世人、西北九州近・現代人とほぼ大差ない。長厚示数は21.20で、この1例は表7の中では最大値を示してはいるが、それほど大きな値ではない。骨体中央断面示数は98.31となり、成岡・西ノ平近世人の98.12に最も近く、その他の資料よりは小さい。また、上骨体断面示数は74.41で、表7中では最小値となり、骨体上部の扁平性がかなり強いことがうかがえる。すなわち、男性大腿骨は骨体が細く、柱状性は認められないが、骨体上部は扁平な大腿骨で、同じ沖縄県のクジチ近世人と同じ傾向が指摘できる。

表7 大腿骨計測値（男性、右、mm）(Table 7. Comparison of measurements and indices of male right femora)

		城間 近世人 (松下・他)		クジチ 近世人 (松下・他)		与論島 近代人 (平田)		松之尾 中・近世人 (松下)		成岡・西ノ平 中・近世人 (松下・他)		桑島 近世人 (立志)		西北九州 近・現代人 (栄田)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	最大長	1	419		−	22	406.95	11	411.73		−	10	412.18	52	412.75
2.	自然位全長	1	415		−	22	403.41	11	408.00		−	10	407.12	52	409.02
6.	骨体中央矢状径	13	26.00(左)	6	27.67(左)	23	26.87	11	26.55	3	28.00	14	26.29	52	27.79
7.	骨体中央横径	13	26.54(左)	6	27.00(左)	23	25.83	11	25.64	4	29.00	14	24.66	52	25.81
8.	骨体中央周	13	82.92(左)	6	86.17(左)	23	83.96	11	82.64	3	90.33	14	80.61	52	83.46
9.	骨体上横径	11	30.82(左)	5	30.80(左)	23	29.61		−	4	33.25	14	29.58	52	28.21
10.	骨体上矢状径	11	22.91(左)	5	24.40(左)	23	24.35		−	2	26.00	15	23.01	52	27.02
8/2	長厚示数	1	21.20		−	22	20.97	11	20.28		−	10	20.12	52	20.43
6/7	骨体中央断面示数	13	98.31(左)	6	102.52(左)	23	104.23	11	104.03	3	98.12	14	107.09	52	108.04
10/9	上骨体断面示数	11	74.41(左)	5	79.27(左)	23	82.71	14	77.35	2	79.08	14	77.60	52	96.54

一方、女性の計測値は表8に示しているように、骨体中央周は73.07mmで、成岡・西ノ平近世人、クジチ近世人、与論島近世人、桑島近世人よりも小さく、松之尾中・近世人、西北九州近・

現代人にかなり近い。骨体中央断面示数は101.61で、成岡・西ノ平近世人、松之尾中・近世人よりも大きいが、桑島近世人、西北九州近・現代人よりも小さく、比較的クジチ近世人、与論島近世人に近い。また、上骨体断面示数は75.70で、松之尾中・近世人の73.73よりはわずかに大きいが、その他の資料よりは小さく、男性同様骨体上部の扁平性は強い。すなわち、女性大腿骨も男性と同じ傾向が認められ、骨体は細く、柱状性も弱く、骨体上部は扁平で、クジチ近世人と比較すれば、より骨体が細く、骨体上部の扁平性が強い。

表8 大腿骨計測値（女性、右、mm）(Table 8. Comparison of measurements and indices of female right femora)

		城間 近世人 (松下・他)		クジチ 近世人 (松下・他)		与論島 近代人 (平田)		松之尾 中・近世人 (松下)		成岡・西ノ平 中・近世人 (松下・他)		桑島 近世人 (立志)		西北九州 近・現代人 (栄田)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
6.	骨体中央矢状径	16	23.25	4	24.50	12	24.00	3	22.67	1	23	7	24.27	30	24.23
7.	骨体中央横径	17	22.94	4	24.75	12	23.50	3	23.67	1	27	7	22.79	30	22.93
8.	骨体中央周	15	73.07	4	77.75	12	76.03	3	73.67	1	81	7	76.59	30	73.13
9.	骨体上横径	14	26.43	3	27.67	12	26.58		−		−	6	27.02	30	24.67
10.	骨体上矢状径	14	20.00	3	22.67	12	22.33		−		−	6	21.37	30	24.67
6/7	骨体中央断面示数	16	101.61	4	99.00	12	103.24	3	96.25	1	85.19	7	107.13	30	106.07
10/9	上骨体断面示数	14	75.70	3	81.92	12	82.57	3	73.73		−	6	78.97	30	100.74

③脛　骨

大腿骨の場合と同じように比較検討してみた。表９に示しているように、脛骨最大長は341.50mmで、桑島近世人の340.42mmに近く、与論近世人、松之尾中・近世人、西北九州近・現代人よりも長い。骨体周は78.64mmで、クジチ近世人、与論島近世人に近く、その他の資料よりは小さい。最小周は72.90mmで、成岡・西ノ平近世人の70mmよりは大きいが、その他の資料とは大差ない。長厚示数は20.79で、表９では最小値を示し、骨体は頑丈なものではない。また、中央断面示数は70.17で、近世人としては小さな値を示し、表９でも最も小さな示数値である。すなわち、男性脛骨は長径が長く、その割には骨体が細く、近世人としては骨体が比較的扁平な傾向を示している。

表9 脛骨計測値（男性、右、mm）(Table 9. Comparison of measurements and indices of male right tibiae)

		城間 近世人 (松下・他)		クジチ 近世人 (松下・他)		与論島 近代人 (平田)		松之尾 中・近世人 (松下)		成岡 西ノ平 中・近世人 (松下・他)		桑島 近世人 (立志)		西北九州 近・現代人 (久松)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	脛骨全長	2	332.00		−	20	327.60	7	317.14		−	14	336.47	72	331.88
1a.	脛骨最大長	2	341.50		−	23	333.90	7	324.57		−	15	340.42	72	339.12
8.	中央最大径	15	28.80	3	28.67(左)	24	28.63		−	1	29(左)	19	27.02	72	28.52
8a.	栄養孔位最大径	14	32.57	2	34.50(左)	24	33.83		−	1	31(左)		−	72	31.02
9.	中央横径	14	20.29	3	21.33(左)	24	21.09		−	1	23(左)	19	20.18	72	21.55
9a.	栄養孔位横径	13	21.77	2	23.00(左)	24	24.39		−	1	24(左)		−	72	24.71
10.	骨体周	14	78.64	3	79.67(左)	24	78.83		−	1	81(左)	19	80.36	72	80.45
10a.	栄養孔位周	13	87.23	2	91.50(左)	24	90.12		−	1	88(左)	19	88.95	72	89.10
10b.	最小周	10	72.90	2	74.00(左)	24	72.05		−	1	70(左)	18	73.47	72	71.64
9/8	中央断面示数	14	70.17	3	74.87(左)	24	73.95		−	1	79.31(左)	19	74.89	72	75.76
9a/8a	栄養孔位断面示数	13	66.90	2	66.68(左)	24	72.03		−	1	77.42(左)		−	72	79.81
10b/1	長厚示数	2	20.79		−	20	21.65		−		−	14	22.04	72	21.76

一方、女性の計測値は表10のとおり、脛骨最大長が305.50mmで、表10の中では最も短い。骨

体周は71.71mmで、桑島近世人よりは小さいが、その他の資料とは大差なく、また、最小周は65.40mmで、西北九州近・現代人よりはわずかに大きいが、桑島近世人の69.06mmよりは小さく、その他の資料と大差ない。長厚示数は23.19と、かなり大きな値となり、いずれの比較資料よりも大きく、骨体の径の割には長さが短いことがうかがえる。また、中央断面示数は71.13で、男性と同じように近世人としてはこの示数値は小さく、成岡・西ノ平近世人および桑島近世人の平均値に近く、その他の資料よりは小さい。すなわち、女性脛骨は、長さが短く、その割には骨体がやや太く、また、骨体が近世人としてはやや扁平傾向を呈しているようである。

表10　脛骨計測値（女性、右、mm）(Table10. Comparison of measurements and indices of female right tibiae)

		城間 近世人 (松下・他)		クジチ 近世人 (松下・他)		与論島 近代人 (平田)		成岡・西ノ平 中・近世人 (松下・他)		桑島 近世人 (立志)		西北九州 近・現代人 (久松)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	脛骨全長	2	300.00(左)		—	12	308.16		—	4	321.65	40	301.89
1a.	脛骨最大長	2	305.50(左)		—	11	315.68		—	4	326.05	40	309.02
8.	中央最大径	16	26.13(左)	7	25.29	13	25.23	2	26.50	5	25.66	40	25.02
8a.	栄養孔位最大径	10	29.20(左)	4	29.25	12	29.67	2	31.00		—	40	28.22
9.	中央横径	14	18.86(左)	7	19.14	13	19.07	2	18.50	5	18.54	40	19.68
9a.	栄養孔位横径	9	20.44(左)	4	20.75	12	21.83	2	21.50		—	40	21.66
10.	骨体周	14	71.71(左)	7	70.29	13	70.38	1	70	5	75.76	40	70.11
10a.	栄養孔位周	9	80.22(左)	4	79.75	13	81.69	2	82.50	5	82.08	40	79.03
10b.	最小周	10	65.40(左)	3	65.33	13	66.67	1	66	5	69.06	40	63.61
9/8	中央断面示数	14	71.13(左)	7	75.98	13	76.19	2	70.36	5	72.50	40	78.72
9a/8a	栄養孔位断面示数	9	69.29(左)	4	71.15	12	73.74	2	69.96		—	40	76.90
10b/1	長厚示数	2	23.19(左)		—	12	21.62		—	4	21.79	40	21.17

3．推定身長値

各四肢骨の最大長から推定身長値を他の資料と比較検討してみた（表11）。男性は、上腕骨から算出すれば、低身長に、橈骨、大腿骨、脛骨からは160cm程度になり、わずかに高身長である。大腿骨からの推定値をみると、与論島の近世・近代人、松之尾中・近世人よりは大きいが、二塚山弥生人、横隈狐塚弥生人、土井ケ浜弥生人よりも小さく、福岡県の天福寺近世人の平均値に近く、クジチ近世人と同じように本近世人もけっして低身長ではない。

表11　推定身長値（男性、右、cm）(Table 11. Comparison of estimated male statures)

		城間 近世人 (松下・他)		クジチ 近世人 (松下・他)		与論島 近世・近代人 (松下・他)		松之尾 中・近世人 (松下)		天福寺 近世人 (中橋)		二塚山 弥生人 (松下)		横隈狐塚 弥生人 (松下)		土井ケ浜 弥生人 (財津)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
Pearsonの式	上腕骨	3	156.98(左)	2	159.63		—		—		—	2	157.46	5	158.33	16	157.50
	橈骨	3	162.25	1	163.45(左)		—		—		—	2	160.34(左)	5	163.38(左)	23	162.73
	大腿骨	1	160.08		—	8	158.25	11	158.71	24	159.4	7	164.27	8	162.41	18	162.81
	脛骨	2	159.81		—		—		—		—	4	164.32	9	160.74	10	162.05
藤井の式	上腕骨	3	157.34(左)	2	159.04		—		—		—		—	5	157.78		—
	橈骨	3	159.66	1	161.61(左)		—		—		—		—	5	161.54(左)		—
	大腿骨	1	158.39		—	8	155.99		—		—		—	8	161.45		—
	脛骨	2	158.35		—		—		—		—		—	9	159.33		—

一方、女性では表12のとおり、脛骨から算出すれば、やや低身長値となるが、上腕骨、橈骨

からは150cm程度の値が出る。すなわち、推定身長値は146cmから150cm程度と考えられ、女性もそれほど低身長値を示さない。

このように、沖縄県の近世人の身長値に関しては、宜野座村のクジチ近世人と浦添市の城間近世人はけっして小さくなく、むしろ高身長傾向さえ示している。

表12 推定身長値（女性、右、cm）（Table 12. Comparison of estimated female statures）

		城間近世人（松下・他）		与論島近世・近代人（松下・他）		天福寺近世人（中橋）		二塚山弥生人（松下）		横隈狐塚弥生人（松下）		土井ケ浜弥生人（財津）	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
Pearsonの式	上腕骨	2	149.42(左)		–		–	1	158.23	1	154.10	18	149.92
	橈骨	2	150.93		–		–	1	159.79		–	20	152.67
	大腿骨		–	6	148.70	20	146.5	2	148.90	2	148.31	16	149.97
	脛骨	2	146.63(左)		–		–	2	152.63	4	149.86	12	151.92
藤井の式	上腕骨	2	149.21(左)		–		–	1	156.27	1	153.44		–
	橈骨	2	148.20		–		–	1	156.49		–		–
	大腿骨		–	6	148.41		–	2	148.63	2	147.96		–
	脛骨	2	145.24(左)		–		–	2	150.69	4	148.11		–

4．城間近世人の特徴

以上、検討してきた本近世人の特徴を表13にまとめた。

表13 城間近世人の特徴（Table 13. Characteristics of Gusukuma skeletons）

項目	男性	女性
頭型	長頭に傾いた中頭	短頭
顔面頭蓋	不明	不明
上腕骨	短く、扁平	長く、細く、扁平
大腿骨	短く、非柱状、細い	非柱状、細い
	骨体上部扁平	骨体上部扁平
脛骨	短く、扁平傾向	短く、扁平傾向
推定身長	わずかに高身長	著しく低くはない

要約

沖縄県浦添市城間にある城間（グスクマ）古墓群の発掘調査が1987年（昭和62年）に行なわれ、風葬墓から多数の古人骨が検出された。長年の風化作用が著しく、人骨の保存状態は概して良くなく、頭蓋の量は少なかったが、四肢骨の量は多く、本遺跡での沖縄県の近世人の特徴を明らかにすることができた。その結果は、次のように要約することができる。

1．今回検出された人骨は、少なくとも成人骨118体（男性骨44体、女性骨50体）、幼少児骨は

18体で、合計136体分である。量が最も多かったのは９号墓で、これからは上顎左側の中切歯が64本確認できた。

2．これらの人骨群は大部分が近世に属するものと考えられるが、一部時代が古そうなものも認められた。しかし、各骨毎に時代を明らかにすることは困難なので今回は一応、近世人骨として一括して平均値を算出した。

3．頭蓋はほとんど計測できなかったが、男性では１例のみ脳頭蓋の計測が可能で、頭蓋最大長は187mm、頭蓋最大幅は142mmで、頭蓋長幅示数は75.94となり、頭型はmesokran（中頭）の下限に属していた。また、女性の頭型を推測できるものが１例あり、これは短頭型に傾いていた。顔面頭蓋の特徴はまったく不明である。

4．上腕骨は、男性は太くて頑丈で、三角筋粗面の発達も良好なものもあったが、平均値的には骨体はやや細い。女性は男性とはかなり対照的に細いものが多い。また、骨体は男女とも扁平である。

5．大腿骨は男女とも骨体の径がやや細く、粗線の発達も悪い。また、骨体上部は扁平である。

6．男性脛骨は長さが短く、骨体は細い。女性脛骨も長さがかなり短く、その割には骨体がやや太い。また、男女とも中央断面示数は70.00をわずかに越える程度で、骨体は近世人としては扁平傾向を呈している。

7．推定身長値は男性で160.08cm（大腿骨、Pearson式）で、わずかに高身長で、女性も高身長傾向を示し、著しい低身長とは考えられない。

8．外耳道骨腫は存在しない。

9．下顎の両側中切歯を抜去した疑いの強いものが１例（９－52、女性）、下顎の両側中切歯の先天的欠損を疑わせるものが１例（９－７、女性）存在した。

10．脛骨、腓骨に病変が、上腕骨などに骨折の跡が認められた。

11．沖縄県での近世人骨の調査とその研究は宜野座村のクジチ墓に次いで今回が2回目である。クジチ近世人の研究では「短頭性」や「高身長」などの予想外の所見にぶつかり、その様相の複雑さを改めて認識させられた。今回では顔面頭蓋の特徴がまったくわからなかったが、男性の「長頭性」、女性の「短頭性」、「高身長」という特徴を見い出した。また、本例からも沖縄県の近世人の体格が著しく悪かったという所見は得られず、クジチ近世人と同じようにむしろ大きかったことを予想させる所見であった。

《謝辞》

擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた浦添市教育委員会文化課の諸先生方に感謝致します。

表14　脳頭蓋計測値（mm）（Skull）

		城間９号墓 頭蓋１ 男性	城間９号墓 頭蓋４ 男性	城間試掘１ 頭蓋１ 女性
1.	頭蓋最大長	187	−	170
8.	頭蓋最大幅	142	−	−
17.	バジオン･ブレグマ高	−	−	−
8/1	頭蓋長幅示数	75.94	−	−
5.	頭蓋底長	−	−	−
9.	最小前頭幅	−	−	−
10	最大前頭幅	116	−	−
11.	両　耳　幅	−	−	−
12.	最大後頭幅	109	109	−
13.	乳　突　幅	100	102	−
7.	大後頭孔長	−	37	−
16.	大後頭孔幅	−	29	−
16/7	大後頭示数	−	78.38	−
23.	頭蓋水平周	−	−	−
24.	横　弧　長	−	−	−
25.	正中矢状弧長	−	−	−
26.	正中矢状前頭弧長	129	−	−
27.	正中矢状頭頂弧長	127	−	131
28.	正中矢状後頭弧長	−	−	−
29.	正中矢状前頭弦長	113	−	−
30.	正中矢状頭頂弦長	116	−	118
31.	正中矢状後頭弦長	−	−	−
29/26	矢状前頭示数	87.60	−	−
30/27	矢状頭頂示数	91.34	−	90.08
31/28	矢状後頭示数	−	−	−
45.	頬骨弓幅	−	〔134〕	−

表15　下顎骨計測値（mm、度）（Mandible）

		城間 男性					城間 女性				
		n	M	σ	min.	−max.	n	M	σ	min.	−max.
65.	下顎関節突起幅		—					—			
65(1).	下顎筋突起幅		—					—			
66.	下顎角幅		—					—			
67.	前下顎幅	5	49.40	1.14	48	− 51	5	44.60	1.52	43	− 47
68.	下顎長		—					—			
68(1).	下顎長		—					—			
69.	オトガイ高	9	33.00	4.15	29	− 41	12	27.67	1.82	25	− 30
69(1).	下顎体高(右)	12	29.83	2.37	26	− 34	8	26.38	2.88	21	− 29
	(左)	14	29.71	2.31	26	− 33	13	26.15	2.37	22	− 29
69(2).	下顎体高(右)	11	26.46	1.86	22	− 28	6	25.17	2.48	22	− 29
	(左)	9	25.67	0.99	24	− 27	7	22.86	1.35	21	− 25
70.	枝　高(右)	1	56					—			
	(左)	1	55					—			
70(1).	前枝高(右)	2	60.50		58	− 63		—			
	(左)		—					—			
70(2).	最小枝高(右)	5	50.60	3.51	46	− 55		—			
	(左)	1	48					—			
70(3).	下顎切痕高(右)	1	10					—			
	(左)		—					—			
71.	枝　幅(右)	3	36.00		32	− 39		—			
	(左)	1	31					—			
71a.	最小枝幅(右)	2	38.00		37	− 39		—			
	(左)	1	31					—			
71(1).	下顎切痕幅(右)	1	33					—			
	(左)		—					—			
79.	下顎枝角(右)	2	132.50		126	−139		—			
	(左)	1	127					—			
69(2)/69	下顎高示数(右)	3	84.56		70.27−	93.10	4	87.24	3.03	82.76−	89.29
	(左)	2	86.44		86.21−	86.67	4	83.04	7.30	75.86−	92.00
71/70	下顎枝示数(右)		—					—			
	(左)	1	56.36					—			
71a/70(2)	下顎枝示数(右)	2	76.03		67.27−	84.78		—			
	(左)	1	64.58					—			
70(3)/71(1)	下顎切痕示数(右)	1	30.30					—			
	(左)		—					—			

表16　鎖骨計測値（mm）（Clavicle）

		城間 男性					城間 女性				
		n	M	σ	min.	−max.	n	M	σ	min.	−max.
1.	鎖骨最大長　(右)	1	148					—			
	(左)		—					—			
2.	骨体彎曲高　(右)	4	8.75	3.95	4	− 12		—			
	(左)		—					—			
2a.	骨体彎曲高　(右)	3	31.67		29	− 35		—			
	(左)		—					—			
2(1).	肩峰端彎曲高(右)	1	28					—			
	(左)		—					—			
3.	骨体彎曲弦長(右)	4	98.00	9.56	85	−108		—			
	(左)		—					—			
4.	中央垂直径　(右)	6	9.83	0.76	9	− 11	4	9.00	1.41	7	− 10
	(左)	2	11.00		10	− 12	7	8.71	0.95	8	− 10

			n	M	σ	min. - max.	n	M	σ	min. - max.
5.	中央矢状径	(右)	6	11.83	1.73	9 - 14	4	10.25	0.50	10 - 11
		(左)	2	12.00		12 - 12	7	11.14	1.46	9 - 13
6.	中央周	(右)	6	37.00	1.78	34 - 39	3	32.67		28 - 35
		(左)	2	38.00		38 - 38	7	33.00	3.16	29 - 38
6/1	長厚示数	(右)	1	25.68				−		
		(左)		−				−		
2a/1	彎曲示数	(右)	1	23.65				−		
		(左)		−				−		
4/5	鎖骨断面示数	(右)	6	85.02	16.98	69.23−111.11	4	87.73	12.65	70.00−100.00
		(左)	2	91.67		83.33−100.00	7	79.03	11.23	69.23−100.00
2(1)/1	肩峰端彎曲示数	(右)	1	18.92				−		
		(左)		−				−		

表17　肩甲骨計測値（mm）（ScaPula）

			城間 男性				城間 女性			
			n	M	σ	min. - max.	n	M	σ	min. - max.
11.	烏口突起最大長	(右)	1	42			1	32		
		(左)		−			1	40		
12.	関節窩長	(右)	2	34.50		33 - 36	3	32.00		29 - 35
		(左)	1	38			2	31.50		30 - 33
13.	関節窩幅	(右)	4	26.75	1.89	24 - 28	3	23.33		20 - 26
		(左)	1	28			2	20.50		19 - 22
14.	関節窩深	(右)	2	4.00		4 - 4	3	3.00		2 - 4
		(左)	1	4			2	3.50		3 - 4
13/12	関節窩長幅示数	(右)	2	73.87		72.73− 75.00	3	69.89		65.71− 75.00
		(左)	1	73.68			2	65.00		63.33− 66.67
14/12	関節窩彎曲示数	(右)	2	11.62		11.11− 12.12	3	9.34		6.25− 11.43
		(左)	1	10.53			2	11.06		10.00− 12.12

表18　上腕骨計測値（mm）（Humerus）

			城間 男性				城間 女性			
			n	M	σ	min. - max.	n	M	σ	min. - max.
1.	上腕骨最大長	(右)		−				−		
		(左)	3	298.33		290 −314	2	283.00		275 −291
2.	上腕骨全長	(右)		−				−		
		(左)	3	294.67		287 −310	2	277.50		270 −285
3.	上端幅	(右)		−				−		
		(左)	3	50.67		48 - 52	2	44.00		43 - 45
3(1).	横上径	(右)		−				−		
		(左)	3	53.33		50 - 56	1	46		
4.	下端幅	(右)	5	61.80	1.10	60 - 63	2	52.50		50 - 55
		(左)	7	60.00	1.73	57 - 62	4	56.75	4.27	51 - 60
5.	中央最大径	(右)	11	23.73	1.62	21 - 27	13	20.00	1.35	18 - 23
		(左)	15	23.53	2.04	20 - 27	15	19.60	1.72	17 - 23
6.	中央最小径	(右)	11	17.09	0.94	15 - 18	13	14.69	1.32	12 - 16
		(左)	16	17.25	2.21	14 - 24	15	14.40	1.40	12 - 17

			n	M	σ	min.	−max.	n	M	σ	min.	−max.
7.	骨体最小周	(右)	14	62.64	2.67	58	− 67	20	55.35	3.20	48	− 60
		(左)	15	61.80	3.69	57	− 69	15	53.87	4.50	46	− 59
7(a).	中央周	(右)	11	67.46	3.61	60	− 73	13	57.69	3.97	50	− 63
		(左)	16	66.44	4.36	59	− 75	15	56.47	4.50	49	− 63
8.	頭周	(右)		−					−			
		(左)	3	142.00		136	−146	2	121.50		120	−123
9.	頭最大横径	(右)		−					−			
		(左)	3	43.33		41	− 45	2	36.50		36	− 37
10.	頭最大矢状径	(右)		−					−			
		(左)	3	46.00		44	− 47	2	40.00		39	− 41
11.	滑車幅	(右)	7	21.86	1.07	20	− 23	2	18.50		17	− 20
		(左)	7	22.29	1.38	21	− 24	3	18.33		17	− 21
12.	小頭幅	(右)	6	17.83	0.43	17	− 18	2	16.50		16	− 17
		(左)	8	17.00	2.33	15	− 22	4	15.75	1.26	14	− 17
12(a).	滑車幅および小頭幅	(右)		−					−			
		(左)		−					−			
12(b).	小頭幅	(右)		−					−			
		(左)	1	17					−			
13.	滑車深	(右)	7	26.29	2.81	22	− 31	1	23			
		(左)	9	25.78	1.64	24	− 29	3	22.00		20	− 25
14.	尺骨頭窩幅	(右)	7	26.29	2.36	23	− 30	2	24.50		24	− 25
		(左)	8	28.13	2.53	25	− 32	4	27.00	3.27	23	− 31
15.	尺骨頭窩深	(右)	7	12.29	0.95	11	− 14	2	11.00		11	− 11
		(左)	8	12.25	1.58	9	− 14	4	12.00	0.82	11	− 13
6/5	骨体断面示数	(右)	10	71.88	3.74	66.67	− 77.27	13	73.58	6.11	60.87	− 80.00
		(左)	14	73.93	7.72	60.87	− 92.31	15	73.74	7.17	60.00	− 85.00
7/1	長厚示数	(右)		−					−			
		(左)	3	20.86		19.59	−21.97	2	19.80		19.59	− 20.00

表19 橈骨計測値（mm）（Radius）

			城間					城間				
			男性					女性				
			n	M	σ	min.	−max.	n	M	σ	min.	−max.
1.	最大長	(右)	3	233.33		225	−241	2	208.50		208	−209
		(左)	2	227.00		222	−232	2	214.00		211	−217
1b.	平行長	(右)	3	230.00		222	−237	2	205.00		205	−205
		(左)	2	224.00		221	−227	2	211.50		209	−214
2.	機能長	(右)	3	221.33		212	−230	2	198.50		197	−200
		(左)	3	216.33		209	−222	2	203.50		202	−205
3.	最小周	(右)	10	41.30	2.21	38	− 44	10	36.30	4.67	31	− 47
		(左)	13	41.46	3.25	36	− 49	9	35.56	3.12	31	− 40
4.	骨体横径	(右)	14	16.64	1.39	14	− 19	16	14.06	1.18	12	− 16
		(左)	16	16.56	1.59	14	− 20	12	14.58	1.32	12	− 17
4a.	骨体中央横径	(右)	15	16.07	1.48	13	− 18	12	13.67	0.88	12	− 15
		(左)	17	15.71	1.57	13	− 19	13	13.39	1.32	11	− 15
4(1).	小頭横径	(右)	3	22.33		21	− 24	2	18.50		18	− 19
		(左)	2	22.50		22	− 23	2	20.50		19	− 22
4(2).	頸横径	(右)	6	13.61	1.17	12	− 15	8	11.75	0.89	10	− 13
		(左)	5	14.40	1.82	12	− 17	9	12.33	1.33	10	− 14
5.	骨体矢状径	(右)	14	11.71	0.92	10	− 13	16	10.19	0.83	9	− 12
		(左)	17	11.88	1.66	10	− 17	12	10.75	1.06	10	− 13
5a.	骨体中央矢状径	(右)	15	11.93	0.80	11	− 13	14	10.14	1.03	9	− 12
		(左)	16	11.75	1.07	10	− 14	13	10.62	1.20	9	− 13
5(1).	小頭矢状径	(右)	1	24				3	18.67	1.52	17	− 20
		(左)	2	23.50		23	− 24	4	21.25	1.26	20	− 23

		n	M	σ	min.	−max.	n	M	σ	min.	−max.
5(2).	頚矢状径(右)	6	14.83	1.48	13	− 17	9	12.78	1.20	11	− 14
	(左)	5	16.20	1.48	14	− 18	8	13.50	1.20	12	− 15
5(3).	小頭周 (右)	1	76				2	59.00		56	− 62
	(左)		−				2	66.50		61	− 72
5(4).	頚 周 (右)	6	44.50	3.27	40	− 49	8	38.63	2.97	34	− 43
	(左)	5	46.80	5.72	40	− 55	8	40.75	4.98	35	− 48
5(5).	骨体中央周(右)	15	44.00	2.59	39	− 47	12	38.00	2.26	35	− 41
	(左)	16	43.44	3.18	39	− 51	13	37.92	3.28	33	− 44
5(6).	骨下端幅(右)	1	35				4	29.25	2.06	27	− 31
	(左)	3	33.67		32	− 35	4	31.25	2.22	29	− 34
3/2	長厚示数(右)	3	19.01		17.39−	20.28	2	20.18		16.50−	23.86
	(左)	3	18.50		17.12−	19.72	2	18.17		16.83−	19.51
5/4	骨体断面示数(右)	14	70.70	6.48	61.11−	81.25	16	72.91	8.28	60.00−	85.71
	(左)	16	70.27	7.95	58.82−	85.71	12	73.83	4.93	66.67−	83.33
5a/4a	中央断面示数(右)	15	74.93	9.21	64.71−	92.86	12	75.28	9.04	60.00−	92.31
	(左)	16	75.43	8.42	62.50−	92.31	13	79.52	6.79	64.29−	90.91

表20 尺骨計測値（mm）（Ulna）

		城間 男性					城間 女性				
		n	M	σ	min.	−max.	n	M	σ	min.	−max.
1.	最大長 (右)	3	246.33		232	−256		−			
	(左)	2	247.00		243	−251	1	219			
2.	機能長 (右)	3	221.00		212	−229	1	199			
	(左)	3	219.67		216	−222	2	193.00		191	−195
2(1).	肘頭尺骨頭長(右)	4	241.75	10.78	230	−254	1	220			
	(左)	3	245.33		241	−248	2	217.50		217	−218
3.	最小周 (右)	11	35.55	3.48	30	− 40	4	31.00	2.45	29	− 34
	(左)	7	36.14	1.86	33	− 38	7	30.43	1.71	28	− 33
6.	肘頭幅 (右)	10	23.10	2.47	20	− 28	5	19.40	0.55	19	− 20
	(左)	8	25.13	2.03	22	− 28	5	20.80	4.21	17	− 28
6(1)	上 幅 (右)	8	30.75	1.75	28	− 33	3	26.33		23	− 29
	(左)	8	32.13	1.81	30	− 36	4	27.50	4.04	24	− 33
7.	肘頭深 (右)	10	24.40	2.68	20	− 28	4	20.25	0.50	20	− 21
	(左)	8	24.13	1.81	22	− 27	5	22.40	4.51	18	− 30
8.	肘頭高 (右)	12	19.33	0.90	18	− 21	8	17.40	0.55	17	− 18
	(左)	9	21.00	1.58	19	− 23	7	18.43	2.07	17	− 23
11.	尺骨矢状径(右)	18	13.17	1.50	11	− 16	10	11.20	1.23	10	− 13
	(左)	15	13.20	1.21	11	− 16	8	11.88	1.46	10	− 14
12.	尺骨横径(右)	18	16.17	1.42	14	− 20	10	13.90	1.45	12	− 16
	(左)	15	15.93	1.54	13	− 19	7	13.57	0.98	12	− 15
S	中央最小径(右)	17	12.12	1.05	10	− 14	11	10.09	0.54	9	− 11
	(左)	15	12.53	0.75	11	− 14	8	10.75	1.17	9	− 12
L	中央最大径(右)	17	16.53	1.38	15	− 20	11	14.09	1.14	12	− 16
	(左)	14	16.07	1.44	14	− 19	8	14.25	1.28	12	− 16
C	中 央 周(右)	17	46.88	3.50	41	− 54	11	40.00	2.05	37	− 43
	(左)	14	46.64	3.52	42	− 54	8	41.38	3.16	36	− 46
3/2	長厚示数 (右)	3	16.34		14.41−	18.40	1	14.57			
	(左)	3	16.70		15.84−	17.59	2	15.82		14.36−	17.28
11/12	骨体断面示数(右)	18	82.58	9.01	68.75−	100.00	10	81.35	12.41	66.67−	108.33
	(左)	15	83.16	7.01	73.33−	100.00	7	87.17	7.33	76.92−	93.33
S/L	中央断面示数(右)	17	73.54	6.40	64.71−	87.50	11	71.96	5.95	62.50−	83.33
	(左)	14	78.57	5.80	70.59−	86.67	8	75.38	3.54	69.23−	80.00

表21 大腿骨計測値（mm）（Femur）

		城間 男性				城間 女性			
	n	M	σ	min.	−max.	n	M	σ	min.	−max.
1. 最大長(右)	1	419					—			
(左)		—					—			
2. 自然位全長(右)	1	415					—			
(左)		—					—			
6. 骨体中央矢状径(右)	11	27.18	2.09	25	−31	16	23.25	1.69	19	−26
(左)	13	26.00	1.41	24	−29	8	23.63	2.00	20	−27
7. 骨体中央横径(右)	10	26.00	1.56	23	−28	17	22.94	1.60	20	−26
(左)	13	26.54	1.67	24	−29	9	23.78	1.39	22	−26
8. 骨体中央周(右)	10	85.00	3.74	81	−93	15	73.07	3.47	67	−78
(左)	13	82.92	4.01	79	−91	8	74.38	2.56	71	−78
9. 骨体上横径(右)	8	30.50	1.31	29	−32	14	26.43	2.02	23	−29
(左)	11	30.82	1.33	28	−33	8	27.38	1.60	25	−30
10. 骨体上矢状径(右)	9	22.44	1.43	21	−25	14	20.00	2.08	17	−23
(左)	11	22.91	0.95	21	−24	8	20.75	1.75	18	−23
15. 頚垂直径 (右)	1	31				3	25.67		25	−26
(左)	4	31.00	1.41	29	−32	2	26.00		26	−26
16. 頚矢状径 (右)	1	22				3	21.00		18	−24
(左)	4	24.00	2.16	22	−27	2	20.50		19	−22
17. 頚 周 (右)	1	88				3	77.00		72	−81
(左)	4	92.25	7.04	83	−100	2	78.50		78	−79
18. 頭垂直径 (右)	1	43				2	40.00		40	−40
(左)	1	47				1	37			
19. 頭 横 径 (右)		—				1	40			
(左)	1	47				1	37			
20. 頭 周 (右)		—				1	128			
(左)		—				1	119			
21. 上顆幅(右)	1	80					—			
(左)	1	80					—			
8/2 長厚示数(右)	1	21.20					—			
(左)		—					—			
6/7 骨体中央断面示数(右)	10	105.49	12.22	92.59	−130.43	16	101.61	10.36	73.08	−120.00
(左)	13	98.31	7.95	85.71	−116.67	8	100.05	12.55	76.92	−117.39
10/9 上骨体断面示数(右)	8	73.58	7.29	65.63	−86.21	14	75.70	5.66	65.38	−84.62
(左)	11	74.41	3.28	67.74	−78.57	8	76.13	9.01	63.33	−92.00
16/15 頚断面示数(右)	1	70.97				3	81.69	10.19	72.00	−92.31
(左)	4	77.36	4.72	74.19	−84.38	2	78.85	8.16	73.08	−84.62
19/18 頭断面示数(右)		—				1	100.00			
(左)	1	100.00				1	100.00			

表22 脛骨計測値（mm）（Tibia）

		城間 男性				城間 女性			
	n	M	σ	min.	−max.	n	M	σ	min.	−max.
1. 脛骨全長 (右)	2	332.00		332	−332		—			
(左)	1	333				2	300.00		292	−308
1a. 脛骨最大長(右)	2	341.50		341	−342		—			
(左)	1	342				2	305.50		297	−314
1b. 脛 骨 長(右)	2	331.50		330	−333		—			
(左)	1	331				2	296.00		287	−305
2. 顆距間距離(右)	2	317.00		315	−319		—			
(左)	1	318				1	294			

			n	M	σ	min.	−max.	n	M	σ	min.	−max.
3.	最大上端幅	(右)	2	67.50		65	− 70		−			
		(左)	1	75				1	68			
3a.	上内関節面幅	(右)	2	28.50		28	− 29		−			
		(左)		−					−			
3b.	上外関節面幅	(右)		−					−			
		(左)		−					−			
4a.	上内関節面深	(右)	1	40					−			
		(左)		−					−			
4b.	上外関節面深	(右)	1	38					−			
		(左)		−				1	35			
6.	最大下端幅	(右)	3	46.00		43	− 48	1	44			
		(左)	4	49.25	2.22	46	− 51	4	43.50	1.29	42	− 45
7.	下端矢状径	(右)	5	38.80	2.95	37	− 44	1	33			
		(左)	2	38.00		36	− 40	3	32.00		31	− 34
8.	中央最大径	(右)	15	28.80	1.52	25	− 31	11	26.00	2.00	22	− 29
		(左)	20	29.55	1.73	27	− 34	16	26.13	2.45	21	− 32
8a.	栄養孔位最大径	(右)	14	32.57	2.15	28	− 35	7	30.57	2.51	28	− 33
		(左)	16	34.06	2.43	29	− 38	10	29.20	2.57	26	− 32
9.	中央横径	(右)	14	20.29	1.26	18	− 22	10	18.30	1.57	15	− 20
		(左)	20	20.90	1.59	18	− 25	14	18.86	2.15	17	− 25
9a.	栄養孔位横径	(右)	13	21.77	1.43	19	− 24	7	20.43	2.22	16	− 22
		(左)	15	23.00	1.85	20	− 27	9	20.44	1.75	18	− 23
10.	骨体周	(右)	14	78.64	3.73	72	− 84	10	70.60	4.84	63	− 78
		(左)	20	79.60	4.43	73	− 90	14	71.71	7.06	63	− 92
10a.	栄養孔位周	(右)	13	87.23	4.78	77	− 94	7	80.86	7.11	70	− 90
		(左)	15	90.93	4.26	84	− 98	9	80.22	5.29	73	− 86
10b.	最小周	(右)	10	72.90	4.01	65	− 78	10	64.60	4.20	58	− 70
		(左)	17	73.77	3.56	67	− 80	10	65.40	6.10	57	− 75
9/8	中央断面示数	(右)	14	70.17	3.61	65.52	− 76.00	10	70.61	6.30	60.00	− 81.82
		(左)	20	70.81	4.86	62.50	− 83.33	14	71.13	4.67	62.96	− 80.00
9a/8a	栄養孔位断面示数	(右)	13	66.90	4.46	60.61	− 75.00	7	66.85	5.61	57.14	− 75.00
		(左)	15	67.73	7.46	56.76	− 81.82	9	69.29	4.40	62.50	− 76.92
10b/1	長厚示数	(右)	2	20.79		19.58	− 21.99		−			
		(左)	1	22.82				2	23.19		20.70	− 25.68

表23 腓骨計測値 (mm) (Fibula)

			城間 男性					城間 女性				
			n	M	σ	min.	−max.	n	M	σ	min.	−max.
1.	最大長	(右)		−				1	297			
		(左)		−					−			
2.	中央最大径	(右)	7	16.43	2.07	14	− 20	12	13.92	1.08	12	− 15
		(左)	11	16.46	2.01	12	− 19	12	13.00	1.13	11	− 14
3.	中央最小径	(右)	7	10.71	1.38	9	− 13	12	10.00	1.04	9	− 12
		(左)	11	11.46	1.03	10	− 13	12	10.17	1.33	8	− 12
4.	中央周	(右)	7	46.14	4.81	41	− 55	12	39.67	2.26	36	− 43
		(左)	11	46.36	4.65	37	− 55	12	38.33	2.94	33	− 42
4a.	最小周	(右)	3	39.67		38	− 43	7	29.86	2.55	26	− 34
		(左)	12	36.67	2.87	31	− 41	10	30.80	2.39	27	− 34
4b.	頸横径	(右)	1	19				6	11.67	1.36	10	− 14
		(左)	9	13.11	1.97	9	− 16	7	11.29	1.25	10	− 13
4c.	頸矢状径	(右)	1	13				6	11.00	1.10	10	− 12
		(左)	9	14.00	2.00	11	− 18	7	10.43	1.13	9	− 12
4(1).	上端幅	(右)	2	30.00		30	− 30	2	23.00		20	− 26

		n	M	σ	min. −max.	n	M	σ	min. −max.
	(左)	2	29.00		28 − 30		−		
4(1a).上端矢状幅	(右)	2	26.50		26 − 27	3	19.00		17 − 22
	(左)	1	30				−		
4(2).端幅	(右)	3	21.33		21 − 22	2	19.50		19 − 20
	(左)	6	21.00	1.27	19 − 22	5	18.60	1.52	17 − 20
4(2a).下端矢状幅	(右)	3	27.00		26 − 28	2	20.00		15 − 25
	(左)	7	26.00	1.29	24 − 28	5	22.40	1.67	21 − 25
3/2 中央断面示数	(右)	7	65.66	8.50	52.94− 80.00	12	72.18	8.51	60.00− 85.71
	(左)	11	70.24	7.44	55.56− 83.33	12	78.36	9.31	69.23− 92.31
4a/1 長厚示数	(右)		−			1	8.75		
	(左)		−						

表24 膝蓋骨計測値（mm）（Patella）

		城間 男性				城間 女性			
		n	M	σ	min. −max.	n	M	σ	min. −max.
1. 最大高	(右)	4	40.50	2.38	38 − 43	8	36.63	2.26	32 − 39
	(左)	11	41.46	2.15	37 − 45	9	35.78	2.49	31 − 39
2. 最大幅	(右)	5	44.40	2.97	40 − 47	10	38.00	2.49	34 − 42
	(左)	10	42.20	2.25	49 − 46	8	38.25	1.98	35 − 40
3. 最大厚	(右)	5	19.40	0.89	18 − 20	13	16.62	1.20	15 − 18
	(左)	13	18.54	1.34	16 − 21	16	16.75	1.24	15 − 19
4. 関節面高	(右)	3	31.00		28 − 33	9	28.78	2.16	25 − 31
	(左)	11	30.64	1.70	28 − 33	10	28.00	2.31	26 − 32
5. 内切面幅	(右)	5	21.00	1.00	20 − 22	13	19.46	1.61	17 − 22
	(左)	9	20.78	0.83	19 − 22	8	18.50	1.69	16 − 21
6. 外切面幅	(右)	7	26.00	1.41	25 − 29	13	22.39	1.89	20 − 26
	(左)	14	25.07	1.82	21 − 27	15	22.87	1.35	20 − 25
1/2. 膝蓋骨高幅示数	(右)	3	91.95		89.36− 95.00	8	95.23	4.89	86.49−100.00
	(左)	8	100.11	3.29	95.45−105.00	5	95.50	7.17	84.62−102.86

表25 推定身長値（cm）（Estimated stature）

		城間 男性			城間 女性		
		n	M	min. −max.	n	M	min. −max.
Pearsonの式	上腕骨(右)		−			−	
	(左)	3	156.98	154.57−161.51	2	149.42	147.21−151.62
	橈　骨(右)	3	162.25	159.52−164.76	2	150.93	150.76−151.09
	(左)	2	160.18	158.54−161.81	2	152.77	151.76−153.77
	大腿骨(右)	1	160.08			−	
	(左)		−			−	
	脛　骨(右)	2	159.81	159.69−159.92		−	
	(左)	1	159.92		2	146.63	144.63−148.63
藤井の式	上腕骨(右)		−			−	
	(左)	3	157.34	154.98−161.77	2	149.21	147.22−151.20
	橈　骨(右)	3	159.66	156.97−162.14	2	148.20	148.04−148.35
	(左)	2	158.31	156.66−159.96	2	150.63	149.66−151.59
	大腿骨(右)	1	158.39			−	
	(左)		−			−	
	脛　骨(右)	2	158.35	158.23−158.47		−	
	(左)	1	158.25		2	145.24	143.25−147.23

表26　四肢骨比(最大長の比)　(Ratio of length of limb bones)

		城間 男性	城間 女性
鎖　骨／上腕骨	(右)	—	—
	(左)	—	—
橈　骨／上腕骨	(右)	—	—
	(左)	76.09	75.62
橈　骨／尺　骨	(右)	94.72	—
	(左)	91.90	97.72
橈　骨／大腿骨	(右)	55.69	—
	(左)	—	—
橈　骨／脛　骨	(右)	68.33	—
	(左)	66.37	70.05
上腕骨／大腿骨	(右)	—	—
	(左)	—	—
上腕骨／脛　骨	(右)	—	—
	(左)	87.23	92.64
脛　骨／大腿骨	(右)	81.50	—
	(左)	—	—

表27　四肢骨比(中央周の比)　(Ratio of circumference of limb bones)

		城間 男性	城間 女性
橈　骨／尺　骨	(右)	93.86	95.00
	(左)	93.14	91.64
橈　骨／上腕骨	(右)	65.22	65.87
	(左)	65.38	67.15
鎖　骨／上腕骨	(右)	54.85	56.63
	(左)	57.19	58.44
上腕骨／大腿骨	(右)	79.36	78.95
	(左)	80.13	75.92
上腕骨／脛　骨	(右)	85.78	81.71
	(左)	83.47	78.75
脛　骨／大腿骨	(右)	92.52	96.62

(左)	96.00	96.41
腓　骨／脛　骨(右)	58.67	56.19
(左)	58.24	53.45

表28　上腕骨計測値（幼小児、mm）（Humerus, child）

人骨番号		6号墓	8号墓		9号墓		10号墓	試掘 1
		上腕骨2	幼小児-2		上腕骨12	上腕骨55	上腕骨7	上腕骨9
年令		(胎児)	(2歳)		(小児Ⅰ)	(小児Ⅱ)	(小児Ⅰ)	(幼児)
		(左)	(右)	(左)	(右)	(左)	(右)	(右)
1.	上腕骨最大長	-	108	108	-	-	-	-
5.	中央最大径	5.0	9.0	9.0	12.7	17.2	13.5	10.9
6.	中央最小径	4.0	7.1	7.7	9.3	14.0	10.0	8.7
7.	骨体最小周	-	26.0	27.0	35.0	47.0	-	30.0
7(a).	中央周	14.5	26.5	27.5	37.0	50.0	39.0	32.0
6/5	骨体断面示数	80.00	78.89	85.56	73.23	81.40	74.07	79.82
7/1	長厚示数	-	24.07	25.00	-	-	-	-

表29　橈骨計測値（幼小児、mm）（Radius, child）

人骨番号		8号墓			9号墓	試掘 1
		幼小児-1	幼小児-2		橈骨56	橈骨2
年令		(新生児)	(2歳)		(幼児)	(幼児)
		(右)	(右)	(左)	(左)	(右)
1.	最大長	54	-	-	-	-
3.	最小周	12.5	17.0	16.0	22.0	-
4.	骨体横径	4.1	6.3	6.6	9.1	7.1
4a.	骨体中央横径	4.1	6.1	6.4	8.9	-
5.	骨体矢状径	3.3	4.5	4.6	6.3	5.1
5a.	骨体中央矢状径	3.3	4.6	4.6	6.4	-
5(5).	骨体中央周	12.5	17.0	17.0	25.0	-
5(6).	骨下端幅	9	-	-	-	-
	骨下端矢状径	6	-	-	-	-
3/2	長厚示数	23.15	-	-	-	-
5/4	骨体断面示数	80.49	71.43	69.70	69.23	71.83
5a/4a	中央断面示数	80.49	75.41	71.88	71.91	-

表30　尺骨計測値（幼小児、mm）（Ulna, child）

人骨番号	8号墓		9号墓
	幼小児-1	幼小児-2	尺骨79

年令		(新生児)		(2歳)	(小児Ⅰ)
		(右)	(左)	(左)	(左)
1.	最大長	-	61	-	-
3.	最小周	-	12.0	-	-
11.	尺骨矢状径	3.7	4.0	5.1	8.4
12.	尺骨横径	3.6	3.8	6.3	11.0
S.	中央最小径	3.4	3.3	4.9	8.1
L.	中央最大径	3.8	4.1	6.4	11.0
C.	中央周	12.0	12.0	18.5	30.0
3/2	長厚示数	-	19.67	-	-
11/12	骨体断面示数	102.78	105.26	80.95	76.37
S/L	中央断面示数	89.47	80.47	76.56	73.64

表31　大腿骨計測値（幼小児、mm）（Femur, child）

人骨番号	6号墓	8号墓				9号墓			10号墓	試掘　1	
	幼小児-1	大腿骨5	幼小児-1	幼小児-2		大腿骨11	大腿骨15	大腿骨19	大腿骨5	大腿骨3	大腿骨6
年令	(新生児)	(乳児)	(新生児)	(2歳)		(成年)	(小児Ⅱ)	(小児Ⅱ)	(幼児)	(小児Ⅰ)	(幼児)
	(右)	(右)	(左)	(右)	(左)	(右)	(右)	(右)	(右)	(右)	(左)
1. 最大長	-	-	-	138	-	-	-	-	-	-	-
2. 自然位全長	-	-	-	138	-	-	-	-	-	-	-
6. 骨体中央矢状径	-	7.4	-	8.4	8.5	21.8	20.4	16.3	-	15.8	-
7. 骨体中央横径	-	8.7	-	10.6	10.6	21.2	18.2	16.9	-	14.7	-
8. 骨体中央周	-	27.0	-	31.0	31.0	68.0	62.0	55.0	-	48.0	-
9. 骨体上横径	7.5	9.7	8.4	12.8	13.0	24.9	-	23.4	15.4	-	13.6
10. 骨体上矢状径	6.9	9.1	7.4	9.9	10.0	18.4	-	15.8	13.2	-	10.4
21. 上顆幅	-	-	19	-	-	-	-	-	-	-	-
8/2 長厚示数	-	-	-	22.46	-	-	-	-	-	-	-
6/7 骨体中央断面示数	-	85.06	-	79.25	80.19	102.83	112.09	96.45	-	107.48	-
10/9 上骨体断面示数	92.00	93.81	88.10	77.34	76.92	73.90	-	67.52	85.71	-	76.47

表32　膝蓋骨計測値（幼小児、mm）（Patella, child）

人骨番号		9号墓				
		膝蓋骨26	膝蓋骨45	膝蓋骨60	膝蓋骨61	膝蓋骨62
年令		(小児Ⅰ)	(小児Ⅱ)	(小児Ⅰ)	(小児Ⅱ)	(幼児)
		(右)	(左)	(左)	(左)	(左)
1.	最大高	-	30.6	-	-	20.6
2.	最大幅	-	30.3	-	29.6	21.0
3.	最大厚	10.1	13.7	12.2	12.5	8.8
4.	関節面高	-	23.6	-	22.3	-
5.	内切面幅	-	15.6	12.0	14.4	10.9
6.	外切面幅	15.0	18.1	16.9	18.4	13.2
1/2	膝蓋骨高幅示数	-	100.99	-	-	98.10

表33　脛骨計測値（幼小児、mm）（Tibia, child）

人骨番号		8号墓			9号墓			10号墓
		幼小児-1	幼小児-2		脛骨5	脛骨21	脛骨47	脛骨12
年令		(新生児)	(2歳)		(成年)	(小児Ⅱ)	(成年)	(幼児)
		(左)	(右)	(左)	(右)	(右)	(左)	(右)
1a.	脛骨最大長	67	115	116	-	-	-	-
3.	最大上端幅	-	28	29	-	-	-	-
6.	最大下端幅	10	18	18	-	-	-	-
7.	下端矢状径	9	17	16	-	-	-	-
8.	中央最大径	5.5	9.5	9.7	24.6	19.8	-	14.1
8a.	栄養孔位最大径	-	10.4	11.1	26.7	-	-	16.4
9.	中央横径	5.2	9.0	9.1	17.5	16.7	-	12.1
9a.	栄養孔位横径	6.0	9.8	10.3	18.0	19.7	-	-
10.	骨体周	17.5	29.0	30.0	65.0	59.0	-	42.0
10a.	栄養孔位周	-	32.0	33.0	72.0	-	-	-
10b.	最小周	17.5	28.5	29.0	57.0	-	56.0	-
9/8	中央断面示数	94.55	94.74	93.81	71.14	85.35	-	85.82
9a/8a	栄養孔位断面示数	-	94.23	92.79	67.42	-	-	-
10b/1a	長厚示数	26.12	24.78	25.00	-	-	-	-

表34　腓骨計測値（幼小児、mm）（Fibula, child）

人骨番号		8号墓
		幼小児-2
年令		(2歳)
		(右)
1.	最大長	-
2.	中央最大径	5.2
3.	中央最小径	4.0
4.	中央周	15.0
4a.	最小周	14.0
3/2	中央断面示数	76.92

参考文献

1. 藤田恒太郎、1965：歯の話。岩波書店。東京：57－98.
2. 平田　和生、1958：鹿児島県大島郡与論島島民の下肢骨の研究。人類学研究、5：263-315.
3. 広沢　正彦、1959：奄美群島与論島住民上肢骨の人類学的研究。人類学研究、6：241-278.
4. Martin－Saller, 1957：Lehrbuch der Anthropologie. Bd. 1. Gustav Fisher Verlag, Stuttugart：429-597.
5. 松下　孝幸、他、1980：熊本県川田京坪遺跡出土の近世人骨。車塚古墳・川田京坪遺跡・川田小築遺跡・塩塚古墳（熊本県文化財調査報告46）付：1-17.
6. 松下　孝幸、他、1980：熊本県興善寺四郎丸遺跡出土の近世人骨。興善寺Ⅱ（熊本県文化財調査報告45）：59-58.
7. 松下　孝幸、1981：鹿児島県松之尾遺跡出土の人骨。松之尾遺跡（枕崎市松之尾土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書(1))：215-228.
8. 松下　孝幸、他、1983：宮崎学園都市堂地東遺跡出土の近世人骨。宮崎学園都市埋蔵文化財調査概報（Ⅲ）：47-55.
9. 松下　孝幸、他、1983：成岡・西ノ平遺跡出土の中世・近世人骨。成岡・西ノ平・上ノ原遺跡（鹿児島県埋蔵文化財調査報告書28）355-382.
10. 松下　孝幸、他、1985：長崎県松浦市楼階田遺跡出土の近世人骨。楼階田遺跡－松浦火力発電所建設に伴う埋蔵文化財調査報告書－（長崎県文化財調査報告書第76集）：191-196.
11. 松下　孝幸、他、1988：沖縄県宜野座村クジチ墓出土の近世人骨。宜野座村乃文化財(6)-クジチ墓・クジチ原遺跡発掘調査報告書－：106-140.
12. 松下　孝幸、他、1988：与論島における形質人類学的研究。奄美諸島における日本基層文化とその変容に関する総合的研究〔昭和60年－62年度文部省科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書〕：6－26.
13. 内藤　芳篤、1976：生体計測からみた沖縄のヒト。沖縄－自然・文化・社会－、弘文堂：77-86.
14. 中橋　孝博、1987：福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨。人類誌、95：89-106.
15. 大山　秀高、1956：鹿児島県大島郡与論島島民頭骨の研究。人類額研究、3：396-434.
16. 立志　悟朗、1970：熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人上腕骨の人類学的研究。熊本医学会雑誌、44：1137-1150
17. 立志　悟朗、1970：熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人下肢骨の人類学的研究。第1大腿骨について。熊本医学会雑誌、44：1092-1115.
18. 立志　悟朗、1970：熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人下肢骨の人類学的研究。第2下腿骨について。熊本医学会雑誌、44：1116-1129.
19. 分部　哲秋、1988：沖縄県宜野座村クジチ墓出土の近世幼少児骨。宜野座村乃文化財(6)－クジチ墓・クジチ原遺跡発掘調査報告書－：141-153.
20. 脇　　達也、1970：熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人頭骨の研究。熊本医学会雑誌、44：1031-1091.

Human Skeletal Remains of the Pre-Modern Period Excavated from Gusukuma Site, Urasoe City, Okinawa Prefecture.

Takayuki MATSUSHITA, Tetsuaki WAKEBE, Kazunobu SAIKI
〔Department of Anatomy, Nagasaki University School of Medicine〕
Jouichi OYAMADA
〔Department of Oral Anatomy, Nagasaki University School of Dentistry〕

Keyword : Okinawa Pref., Pre-Modern skeletons, limb bones, tall stuture

A large number of human skeletal remains of the Pre-Modern Period were excavated from Gusukuma Site, Urasoe City, Okinawa Prefecture, in 1987.

136 individuals (adult : 118, child : 18) at least were unearthed from this site where the skeletons were buried secondarily. They were observed and measured anthroporogically.

The length-breadth index of the male is 75.94, mesocranic and the female has a tendency to brachycrany. But facial skeletons are in bad preservation, thus can not be measured.

The limb bones of the male and female are slender. The femora are not pilaser but the subtrochanteric portion is platmeric. The humeri and tibiae are flat for the pre-modern bones.

The estimated male stature is 160.08cm from the right femur and the female is not short.

城間９号墓１号頭蓋・上面（男性・熟年）
(Norma verticalis of Gusukuma 9-1 Skull, mature male)

城間試掘1-1号頭蓋・上面（熟年・壮年）
(Norma verticalis of Gusukuma test－pit 1-1 Skull, young adult female)

下顎骨前面
(Norma frontalis of the mandible)

下顎骨上面
(Norma verticalis of the mandible)

城間９号墓52下顎骨・抜歯？
(Gusukuma 9-52 mandible, tooth extraction？)

城間上腕骨（男性、右）
(Gusukuma male right humeri)

城間上腕骨（男性、左）
(Gusukuma male left humeri)

城間上腕骨（女性、右）

(Gusukuma female right humeri)

城間上腕骨（女性、左）

(Gusukuma female left humeri)

城間橈骨（男性）

(Gusukuma male radii)

城間橈骨（女性）

(Gusukuma female radii)

城間尺骨（男性）
(Gusukuma male ulnae)

城間尺骨（女性）
(Gusukuma female ulnae)

城間大腿骨（男性、左）
(Gusukuma male left femora)

城間大腿骨（男性、右）
(Gusukuma male right femora)

城間脛骨（男性、左）
(Gsukuma male left tibiae)

城間脛骨（男性、左）
(Gsukuma male right tibiae)

城間脛骨（女性、左）

(Gsukuma female left tibiae)

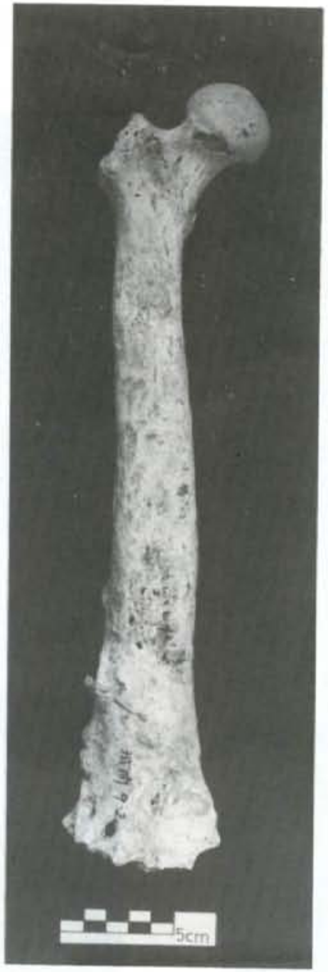
城間脛骨（女性、右）

(Gsukuma female right tibiae)

城間大腿骨（女性、左）
(Gsukuma female left femora)

城間大腿骨（女性、右）
(Gsukuma female right femora)

病変例－脛骨（Lesions in tibiae）



病変例－大腿骨（Lesion in a femur）

城間幼小児大腿骨
(Gsukuma chiled femora)

浦添市民憲章

わたくしたちは、
古い歴史と新しい希望にみちた、
てだこの都市・浦添の市民として、
この憲章を定め誇りをもって
その実践につとめます

1. わたくしたちは、
自然を愛し、みどり豊かなまちをつくります。

1. わたくしたちは、
きまりを守り、住みよいまちをつくります

1. わたくしたちは、
働く喜びをもち、活気にみちたまちをつくります。

1. わたくしたちは、
平和を愛し、文化の香り高いまちをつくります。

1. わたくしたちは、
心と体をきたえ、明るく健康なまちをつくります。

浦添市文化財調査報告書
城間古墓群

＊ 牧港補給地区開発工事に
伴う緊急発掘調査報告書 ＊

発行日　１９９０年3月
発　行　浦添市教育委員会
浦添市字安波茶380番地
電話　0988(78)4553

印　刷　ちとせ印刷
浦添市牧港２－１－５
電話　0988(79)5814